敬畏仰し、以て肉身の大士と爲す。其の賞識を被る者は、必ず名諸方に聞ゆ。然れども未だ嘗て輕しく人に予へず。ⓛ羅漢の小南禪師、ⓜ雲居の祐公に嗣ぐ。道眼明白なり、未だ人の爲に知られず。嘗て東林に至る、照覺、鐘を鳴らし衆を集めて、淸溪の上りに出迎ふ。其の徒大いに驚く、是より南の名、日に益々顯著す。ⓝ佛印禪師、再び雲居に歸る、ⓞ靈源叟、初め龍山より來り、衆と群居して、痛く自ら韜晦す。佛印、陞座して衆に白し、諸じて以てⓟ座元と爲す、其の禮歡特に異なり。靈源之を受く、叢林の學者日に親み、晦堂老人の法道有る在りを知る矣。嗚呼、先德の法器を成就して、增々世に重んぜしむること、其の法此くの如し。ⓠ堯、四凶を誅し、十六子を舉ぐること能はざるには非ず、留めて以てⓡ舜を遲つ耳。古の聖人と雖も、爲す所能く是れを外にすること莫し。二老は其れ亦此れを知る者歟。

ⓜ古塔主、雲門の世を去ること、無慮百年、而も其の嗣と稱す。ⓝ青華嚴、未だ始めより大陽を識らず、特にⓝ浮山遠公の語を以ての故に之に嗣いで疑はず、二老は皆傳言を以て、之を行ふこと自若たり。其れ己に於ては甚だ重く、法に於ては甚だ輕し。古の法に於て重んずる者は、永嘉、黃檗是なり。永嘉は、維摩を閱るに因りて、佛心宗を悟る。而も往いて六祖に見えて曰く、「吾れ宗旨を定めんと欲す」と。黃檗は、馬祖の意を悟りて、而も百丈に嗣ぐ。故に百丈、嘆じて以て及ばずとせり。

地藏のⓢ琛禪師、能く大いにⓣ雪峰、ⓤ玄沙の道を振ふことは、其の大法を秘重し、ⓥ恬退して自ら處るの效なる歟。予嘗て、其の人と爲りを想見するに、城隈の古寺、門死灰の如く、道容淸深なり。禪客に戲れて曰く、「諸方の說禪浩々地なり、爭でか我が此間、田を栽ゑて飯に替へて喫せんには如かん」と。旨ある哉。

予初め黃龍山に居りし時、ⓦ禪和子十二時の偈を作りて曰く、「吾が活計、觀る可き無し、但だ日々一般を長ず。夜半は子、困じて死するが如し、虱に咬まれて、脚指を動かす。雞鳴は丑、粥魚叱ゆ、忙しく裙を繫けて、襪紐を尋ぬ。平旦は寅、忽ち缺申す。兩眉稜、重きこと千斤。日出は卯、自ら ⓧ攪炒す、眼に經を誦して口相拗す。食時は辰、齒に津を生ず、肚皮に輪し、口唇を虧く。禺中は巳、眼前の事、看見親し、說不似。日南は午、衣自ら補ふ、忽ち針を穿つて、全體露る。日ⓨ昳は未、方に睡を破る、面を洗開し、鼻を摸着す。晡時は申、最も天眞、順なれば便ち喜び、逆なれば便ち瞋る。日入は酉、壁に口を掛く、鏡中の空、日中の斗。黃昏は戌、作用密なり、眼開闔して、ⓩ烏鞋律。人定は亥、說けば便ち會す、法身は眠る。

ⓛ羅漢。柔南、雲居祐に嗣ぐ、黃龍南三世。
ⓜ雲居元祐。黃龍南に嗣ぐ。
ⓝ佛印。前出。
ⓞ靈源。惟清
ⓟ座元。禪宗の役僧名、分座せらるるみぶん。
ⓠ堯。支那の聖帝。
ⓡ舜。支那の聖帝。
ⓝ古塔主。雲門の法嗣と自稱す
ⓝ青華嚴。投子青、大陽玄に嗣ぐ。
ⓝ浮山遠公。圓鑑禪師、葉縣省に嗣ぐ、首山三世。

ⓢ琛。應眞、漳川羅漢寺に住す、玄沙に嗣ぐ。
ⓣ雪峰。義　、德山に嗣ぐ。
ⓤ玄沙。師備、雪峰に嗣ぐ。
雪峰―玄沙―琛。
ⓥ恬退。しづかにしりぞく。
ⓦ禪和子。又は禪稍子、或は禪那子とも曰ふ、禪僧なり、和は、六和合の義に取る。
ⓧ攪炒。かきみだしいる、炊事のことか。
ⓨ昳。日かたむく。
ⓩ烏鞋律。鞋はけはしきこと。

無被蓋、坐して叢を成し、行ひて隊を作す、活鱍々、無障礙。若し動著せば、赤肉の艾、本一事の營爲す可き無し。大家相聚りて莖菜を喫す。」

雲峰悅禪師、初め高安の大愚に至りて ㋐芝和尚に見ゆ。芝問うて曰く、「汝來りて何の求むる所ぞ。」對へて曰く、「佛法を學ばんと擬す。」芝曰く、「佛法豈容易に學ぶ可けんや、色力强健を趁ふて、衆の爲に飯を乞ふこと一遭して、學ぶこと未だ晚からず。」悅天委純至にして、其の言を信受し、卽ち往いて行乞す。既に還る、芝移りて翠巖に居す。悅又芝の所に詣り、入室を求む。芝曰く、「佛法は且く置く、大衆夜寒くして炭を須む。更に當に炭を乞ふこと一次すべし、學未だ晚からず。」悅又行乞して、歲㋐晏に炭を載せて歸る、且示誨を求む。芝曰く、「佛法は、爛却することを怕れず、維那方に人を缺く、子當に職に就くべし、辭すること勿れ」と。遂に ㋑犍椎を鳴らして、衆に白して之を請ず。悅難る色あり。拜起して追悔して弁て去らんと欲す。業已に之に當れり。中に因つて休す。然も恨らくは、芝公の意、果して如何と云ふことを曉らざるを。一日、破桶を束ぬ、筬を引き、盆に觸れて地に墮つ、遂に大悟す。方めて芝公の用處を見る、走りて芝に見ゆ。芝笑つて呼んで曰く、「維那、且喜すらくは、㋒大事了畢せり。」悅未だ一言を吐くに及ばざるに、再拜して、汗雨の如くにして去る。故に其の門風孤峻にして、未だ嘗つて之に構たる者有らず。南禪師嘗つて大衆の

㋐大愚芝。汾陽善昭に嗣ぐ。
㋐歲晏。くれ。歲晏は年末といふに同じ。
㋑犍椎。木の立てに六角にしたものを槌でならす、木板の類。
㋒大事了畢。悟りの修行がなはりしを云ふ。

老原に語つて曰く、「渠れ人人悟解此くの如きことを欲すれども、豈得べけん哉。」神鼎諲禪師、少年の時、數耆宿と南岳に游ぶ。一僧宗乘を擧論す、頗る博敏なり。會々山店の中に野飯し、供辨すれども而も僧論說して已まず。諲曰く、「上人、三界唯心、萬法唯識と言ふ、唯識唯心、眼聲耳色、何人の語ぞ。」僧曰く、「法眼大師の偈なり。」諲曰く、「其の義如何ぞ」對へて曰く、「唯心の故に根境相到らず、唯識の故に聲色㋓撥然たり。」諲曰く、「舌味は是れ根境なりや否や。」對へて曰く、「是。」諲、箸を以て菜を挾んで口に置き、㋔含胡して言つて曰く、「何を か相入と謂ふや。」坐する者、相顧みて大いに驚き、能く答を加ふること莫し。諲曰く、「路塗の樂、終に未だ家に到らず、見解微に入る、見道と名けず、參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、㋕閻羅大王、多語を怕れず。」

金剛三昧經は、乃ち二覺圓通、菩薩行を示すなり。初め ㋖元曉、疏を造るとき、其の本始二覺を以て宗と爲すことを悟る。故に牛車に坐して、几案を兩角の間に置き、據りて以て草文す。圓覺經は、皆證圓覺、無時無性を以て宗と爲す。故に經首の叙文に、時處を標せず、其の飜譯の代を考ふるに及びて、史に復た書せず。曉公は事を設けて法を表す、圓覺は佛意に冥合す。其れ自覺心靈の影像なるか。

㋓撥然。みだる。
㋔含胡。明かにならぬを云ふ。うにやうにやロたして。
㋕閻羅。えんま大王。
㋖元曉。金剛三昧經疏の作者。
㋗豎兒。ねなかのこども。
㋘澁髮。れふしのこども。
㋙銅汝。人を輕蔑するの語、孟子にも出づ。

曹溪の六祖大師、其の韜晦の時に方りて、居止を編民に雜へ、勞旅を商農に混ずること、十有六年、㋑蠻兒㋺海竪、販夫竈婦、以て追呼して㋩爾汝することを得たり。其の德、人に加はり、道、天下に信ぶるに及んでは、累朝の天子と雖も、得て之を師友とせず。其の行、聖賢の分なり、故に貴賤の異を知ること莫し。大宋の高僧傳に曰く、「天子累りに召せども、祖竟に往かず。」曰く、「吾れ貌揚らず、北人之を見れば、必ず法を輕んぜん」と。是れ果して祖師の言ならんや、不仁者の言なり、至人何ぞ嘗て形骸を以て邮と爲さん。況んや其の天形道貌、慈を以て物を攝する者、其れ肯て自ら信せざらん耶。

石頭和尙、南臺に庵すること年あり。偶々米を負ふて山に登る者を見る。之に問ふ、曰く、「供米を送るなり」と。明日卽ち庵を移して、梁端に下り、遂に梁端に終ふ。塔有りて存す。百丈寺は、絕頂に在り、每日力め作して、以て其の供を償ふ。之を止めよと勸むる者有り、則ち曰く、「我れ德の以て人を勞する無し」と。衆、忍びず、作具を藏し去る。因つて食はず、故に一日作さゞれば、一日食はずといふの語あり、先德、身を卒へること、多くは此くの如し。故に六祖は、石を以て腰を墜し、牛頭は、粮を負ふて衆に供す。今少年の㋥苾芻、鉢を擎げ、㋭顰頞して曰く、「吾が臂酸し」と。

雪竇禪師、㋬祖英の頌古を作る。其の首篇に、初祖、梁武に契はざるを

㋥苾芻。小僧等を云ふ。
㋭顰頞。顏をしかめる。
㋬祖英。祖英集一卷あり。

頌じて曰く、「閩國の人追へども再來せず、千古萬古空しく相憶ふとは、㋮老蕭の遇はざるを重嘆する詞なり。味者、乃ち其の事を前に叙して曰く、『達磨既に去る。』誌公問うて曰く、『陛下、此の人を識るや否や、蓋し觀音大士應身のみ、佛心印を傳へて、此の土に至る、奈何んぞ禮を爲さゞらん耶』と。老蕭之を追はんと欲す。誌公曰く、『借使閩國の人追へども、亦復り來らず矣』と。」雪竇、豈誌公は、大鑒十三年に沒し、而して達磨は、普通元年を以て金陵に至ると云ふことを知らざらんや。予是を以て知んぬ、此を叙するは、雪竇の意に非ずと。今傳寫して、又蓋國と作す、益々笑ふ可し。又洞山の㋯麻三斤を頌して曰く、「憶ふに堪へたり、㋰長慶の㋱陸大夫、道ふことを解す、哭す合きや、哭す合からずや」と。憶ふに、長慶の語を用ふ、長慶、陸大夫の此の語を聞いて、哭して乃ち衆に問うて曰く、「且く道へ、哭す合きや、哭す合からずや」と。事、傳燈錄に見えたり。而も味者易へて曰く、「笑ふ合し、哭す合からず」と。其の旨を失すること甚だし矣。王文公、禪者を見て、多く㋲韓退之が㋳大顚に見えし事を問ふ。往々に公に對して妄談する者なり。公、禪者の辭を吐く、臆說多く、義理を問はざることを嗟惜す。故に誘を要する者、多く此を以てす。宗敎に志有る者は、當に之を考證すべし。苟もすべからざるなり。

僧、予に問ふ、「八識を轉じて四智と成すこと、從上の宗師、頗る其の義を釋する者有りや。」予

㋮老蕭。武帝を云ふ、蕭氏なればなり。
㋯麻三斤。公案の也。
㋰長慶。慧稜、雪峰存に嗣ぐ。
㋱陸大夫。陸亘、南泉願に嗣ぐ。
㋲韓退之。名は愈、大文豪。
㋳大顚。大顚禪師也。

曰く、「曹溪偈有り、最も詳かなり。」曰く、「大圓鏡智、性清淨なり、平等性智、心病無し。妙觀察智、見、功に非ず。成所作智、圓鏡に同じ、五八六七果因に轉ず。但だ其の名を轉じて實性無し。若し轉處に於て、情を留めざれば、繁興して永く ㋐那伽定に處す」と。五識第八の親相分を以て、故に成所作智、圓鏡に同じと曰ふ、是れ皆果上に方に轉ず。第六第七、別體なきが故に、但だ能く了知すれば、卽ち性平等なり、是れ皆因中に轉ずるなり。

英邵武、開谿明濟の妻あり、蓋し從上宗門の爪牙なり。嘗つて雲居に客として、室を掩ふて人と交はらず、四海を下し視るに、其の意に可なる者有ること莫し。曰く、「吾れ將に此の山に老死せんとす」と。偶〻夜 ㋙李長者の十明論を讀み、因つて大悟す。久しうして夜 ㋚經行す。二僧の、老黃龍、佛乎、驢脚の因緣を擧するを聞き、之を異とす。就いて問ふ、「南公今何の所にか寓す。」對へて曰く、「黃檗に在り。」黎明徑に遊る、南公一見して與に語り、自ら及ばずと以謂へり。又往いて、翠巖の眞點胸に見えて、方に入室す。眞問うて曰く、「女子出定の意旨如何ん。」英、手を引き其の膝を掐みて去る。眞笑つて曰く、「匙箸を賣る客、未在。」眞、是より、其の機辯、窠臼を脫略すと知りて大いに之を稱賞す。是に於て、一時の學者宗向す。晚に、衆僧に圓通に首たり。南公、僧の廬山より來るを見ては、必ず問ふ。曾て英首座に依覲するや否や、識らずと云ふ者あらば、則ち曰く、「汝行脚して廬山に到る、英首座を識らざるは、是れ寶山に手を徒らにするの說なり」と。南公の在世には、肯て開法せず。南公化し去つて、師曰く、「大法我れを捨てて、其れ誰か能く之を荷はん耶」と。遂に出世して渤潭に住す。偶語有り甚だ多し。今止だ其の三首を記す、以て其の人と爲りを想見す可し。曰く、『石門路險鐵關牢。擧レ目重々萬仞高。無角鐵牛衝得破。㋛毘盧海內鼓二波濤一。』又曰く、『萬鍛爐中鐵葉黎。直須二高價莫一ニ饒レ伊。橫來竪去呵〻笑。一任旁人鼓二是非一。』又曰く、『十方齊現一毫端。華藏重々帝網寒。珍重善財何處去。淸宵風撼碧琅玕。』

達觀禪師、嘗て竊かに禪者の義理を問はざることを笑ふ。宗門に四種の藏鋒あるが如きは、初めに曰く、「理に就く。」次に曰く、「事に就く。」、「理事俱に藏するに至りては、則ち入つて就く」と曰ふ。「俱に理事に涉らざるは、則ち出でて就く」と曰ふ。彼れ字畫を視ずして、輙く就理を易へて、袖裏と作し、出就を易へて、出袖と作し、入就を易へて、入袖と作す。就事は易ふ可からず。則ち孤り之を令す。今德山四家の錄に載する所、具さに存す。晚生末學をして、長老の袖中に必ず一物の出入往來を疑ふ、大いに笑ふ可きなり。晦堂老人、禪者の漫汗なるを見て、則ち笑つて曰く、「彼れ出家して、便ち八陽經を誦する者に依り、師と爲す矣」と。其の見聞、必ず淵源有らん。

南院和尙曰く、「問は答處に在り、答は問處に在り。」㋜夾山曰く、「明中に橫骨を抽んで、暗中に舌

㋐那伽。梵語。龍也、龍は佛也。
㋙李長者。華嚴學者。
㋚經行。禪堂のうんどう。
㋛毘盧。最大と翻す。
㋜夾山。會禪師也。

頭に坐す。上座の玄旨は、是れ老僧が舌頭、老僧が玄旨は、是れ上座の舌頭。」又曰く、「舌頭を坐却して、別に見解を生せよ、他の活意に參じて、死意に參せざれ。」達觀曰く、「纔かに唇吻に涉れば、便ち意思に落つ、並に是れ死門なり、故に活路に非ず、直饒ひ透脫するも、猶ほ沈淪に在り」と。予嘗て怪しむ、洞山、臨濟提倡の旨歸、多く相同じ、蓋し前聖、物の爲にする法式の大要を得たり。楞嚴に曰く、「此の方の眞の敎體は、淸淨音聞に在り。」故に舊說に多く言ふ、達磨は乃ち觀音の應身なりと。㋐楞伽以て心を印す可しと指す。則ち其の旨、蓋し嘗て佛語心を宗と爲すと曰ふが故なり。又曰く、「南岳の讓公も、亦觀音の應身なり、其の意を味ふに、㋑苟然に非ざるが若き者なり。」

僧有り、予に謂つて曰く、「古人、大修行の人、還つて因果に落つるや、また無やと問ふが如きは、或は答へて曰く、『不落。』或は答へて曰く、『不昧。』『如何なるか是れ大悲千手眼』と問はゞ、或は答へて曰く、『通身是。』之を聞く者有らば、則ち曰く、『我れは則ち然らず。』曰く、『徧身是。』或は、『如何なるか是れ佛』と問はゞ、或は答へて曰く、『臭肉等しく蠅を來たす。』之を聞く者あらば、曰く、『我れは則ち然らず、破驢脊上に蒼蠅足れり。』或は『一問を借つて、以て影草と爲さんと擬する時如何ん』と問はゞ、答へて曰く、『可必。』之を聞く者有らば、曰く、『何ぞ箇の不必と道はざる』と。諸尊宿の所示の如きは、何を以て其の優劣を分たん、其の旨に達することを得ば、法に於て無礙にして、一切の語言、揀擇を用ふること無く、手に信せて拈じ來ると謂はんや。則ち彼れ皆問答の鏹銖を輕重して、之を較べ、機に臨んで直に須らく別辨すべしと謂はんや。則ち彼れの理致具さに在り、若し同異すべき無ければ、此れ吾が嘗て疑ふ所、釋くこと能はざるなり」と。予曰く、「我れ子の疑を解かず、然れども聞く、世尊在せし日、㋒比丘有り、根鈍にして多聞の性無し。佛、苕帚の二字を誦せしむ。日夕に之を誦す。苕を言へば、則ち已に帚を忘れ、帚を言へば、則ち又苕を忘る。毎に自ら尅して責め、念を係けて休まず。忽ち能く言つて、苕帚と曰ふ。此に於て大悟して、無礙辯才を得たり。子能く苕を誦する者の如くせば、當に先德大慈悲の故に、物の爲にするの心を見るべし。」僧、㋓默嚮して去る。

法昌倚遇禪師は、北禪賢公の子なり。住山三十年、刀耕火種す。衲子門を過ぐれば、必ず之を勘詰す。英邵武、聖上座は、皆黃龍の高弟なり、之と友として善し。法句多く叢林に徧し。晦堂老人、嘗て之に過ぎて、問うて曰く、「承り聞く、和尙近日草堂を造ると、工を畢るや否や。」曰く、「已に工を畢ふ。」又問うて曰く、「幾く工にか成す可き。」曰く、「止だ數百工を用ふ。」遇逮つて曰く、「大好草堂。」晦堂手を拊つて笑つて曰く、「且く天下の人の疑著することを要す」と。臨終の時、人をして徐德占を要せしむ。德占、靈源禪師に偕だちて、馳せ往く。至れば則ち方に寢室に坐して、院事什物を以て、監寺に付して曰く、「吾れ此に住してより、今日に至るまで、常住を護惜する

㋐楞伽。經の名也。
㋑苟然。かりそめにも、さうとは。
㋒比丘。槃特の事なり。
㋓默嚮。懼れて言ふ能。

を以ての故に、毎に自ら之に莅む。今行かん矣、汝が輩、精彩を著けよ」と言ひ畢つて、手中の杖子を擧して曰く、「且く道へ、這箇阿誰にか付與せん。」衆、對ふる者無し。地に擲ちて、床に投じ、臂を枕にして化す。

ⓑ首山和尚、嘗て傳法綱要の偈を作りて曰く、『咄咄拙郎君。機妙無二人識一。打二破鳳林關一。穿レ靴水上立。』『咄咄巧女兒。停レ梭不レ解レ織。貪二看鬪雞人一。水牛也不レ識。』汾陽無德禪師、之を注釋す。然れども學者猶ほ曉ること莫し。則ち知んぬ、古人神悟穎脫の資、今人企て及ぶ可からずして、遠きこと甚だし。予嘗て嗟いて之を誦す。ⓒ淳化三年十二月五日、衆に謂つて曰く、「老僧今年六十七、老病相依つて日を過す。今年記取せよ明年の事、明年記着せよ今年の日、明年に至つて時皆爽ふこと無し。」復た衆に謂つて曰く、「白銀世界金色身、情と無情と共に一眞、明暗盡くる時俱に照さず、日輪午の後全身を示す」と。日午に安坐して化す。

大般若經に曰く、「諸の天子、竊かに是の念を作す。諸の藥叉等の言辭咒句、復た隱密なりと雖も、而も當に知る可し。尊者善現、此の般若波羅密多に於て、種々の言辭を以て、顯示すと雖も、而も我れ等が輩、竟に解すること能はずと。善現、彼れが心の所念を知り、便ち之に告げて言く、『汝等天子、我が所說に於て、解すること能はざるか。』爾天子言く、『如是如是、具壽善現、』復た告げて言く、『我れ

ⓑ首山。省念、風穴沼に嗣ぐ。
ⓒ淳化。北宋太宗の年號、三年は日本一條天皇正曆三年に當る。

曾て此に於て、一字を說かず、汝も亦聞かず、當に何の解する所かあるべき。何を以ての故に、甚深般若波羅密多は、文字言說、皆遠離するが故に、此の中に由らば、說者、聽者、及び能く解する者、皆不可得なり。一切の如來、應正等覺、所證の無上正等菩提、其の相甚深なること、亦復た是くの如し』と。」曹溪大師、將に入滅せんとせしとき、方に敢て此の命を全提するは、大乘の種性、純熟するを知るが故なり。僧、新州に歸る意旨を問ふ。乃ち曰く、「葉落ちて根に歸す。來時口無し」と。江西の馬祖、南岳の石頭に至りて、則ち大いに之を振耀す。故に石頭を號して眞吼と爲し、馬祖を全提と爲す。其の機鋒、大火聚の如し、之に擬すれば則ち死す。學者、乃ち意思を以て解せんと欲す、亦悞らず哉。

嵩ⓓ明敎每に嘆ず。「沙門の高尙なるは、ⓔ大聖慈蔭の力なり、而も晚世紛々たる者、自ら之を卑賤にす。其れ天子を見て、臣と稱するの禮無し。臣の言たる、公卿大夫の職なり、當に僭越して、取つて之を有すべからず。唐の令珣、暗識にして、首めて其の端を壞る。歷世之に因つて疑はず。彼の山林野逸の人すら、天子猶ほ之を臣とすることを得ず、況んや沙門をや」と。故に其の正宗記を進むる表に、皆首尾に臣某と言ふて、以て故事を存す。其の間に至りて、自ら叙するに當つては、則ち亦止だ名を稱する而已。當時の公卿之を閱て、其の高識を重んず。予昔、湘中に游び、沙門の道場を作るを見るに、南岳帝君を召すに至り、則ち躬を屈め、倡へて曰く、「臣僧某」

ⓓ明敎。契嵩、洞山聰に嗣ぐ、雲門三世。
ⓔ大聖。釋尊。

と。此れ又何ぞや。

予頃、京淮、東吳の間に游ぶ。法席至盛なり。然れども主法の者太だ謙し、以て先德の式を壞る。前輩の㊥升堂の如きは、衣を攝むること定まり、侍者問訊して退く。然して後、大衆敬を致し、側ち立つて肅み聽く、法を重んずるを以ての故なり。主法者に於て何か有らん哉。今は則ち然らず、長老、座に登り拱立して、以て大衆の立定まるを㋐遲ちて、乃ち敢て坐す。獨り江西の叢林、古格易へず。然れども、予、今日の事勢を以て之を觀るに、恐らくは他日、京淮、東吳よりも甚だしきこと有らん。

㋑仁宗皇帝、㋒大覺禪師と法喜の游を爲す、宸を和する詞句甚だ多し。然れども皆上の語に蹤迹して、初より敢て新奇宏妙の言を出さず。其の平日の所作を觀るに至りては、則ち驚絕の句甚だ夥し。世に其れ瓦注を爲すかと疑ふは非なり。昔、宋の文帝、鮑明遠を以て、中書舍人と爲す。文帝、文章を好む。自ら謂へらく、人及ぶこと莫しと。明遠其の旨を識る、故に文を爲るに鄙言多し。世謂へらく、其の才盡くと。實は然らざるなり。大覺、身世兩ながら忘ず、明遠が、委曲にして君に事ふるの比に非ず。而して仁宗皇帝は、生ながらにして道妙を知り、詞章を涕唾にす。決して宋文の能く髣髴する所に非ず。然れども予は璉公の智深くして、機に應ずるの法、爾らざるを得ざることを知るなり。

㊥升堂。大殿なる法堂にて說法する式。
㋐遲。まつ。
㋑仁宗。宋主。
㋒大覺。璉、濟潭澄の法子、青王に住す、雲門五世。

㋓端師子は東吳の人なり、西余山に住す。初め師子を弄する者を見て、遂に悟入す。因つて㋔彩素を以て、皮の色を制爲し、或は堂に升りて客を見るとき、則ち之を披る。雲朝に遇ひ、披て以て城に入る。小兒追逐して譁し。錢を得ば、悉く以て飢寒の者に施す。歲歲以て常と爲す。法華經を誦して功あり、湖人爭ふて之を迎ふ。經を開き數句を誦して則ち錢を携へ去る。好んで漁父の詞を歌ふ。月夜には之を歌ふて旦に達す。時に狂僧あり、回頭和尙と號す、流俗を皷動す、士大夫亦其の妄を安んず。潤の守呂公と肉を食するに方りて、師徑に趨り至り、之を指して曰く、「正當與麼の時、如何なるか是れ佛。」回頭窘んで以て對ふること無し。師、其の頭を捶ち、推倒して去る。又狂僧不托と號する者あり、秀州に於て說法す、聽く者城を傾く。師、㋕搦住して問ふ。「如何なるか是れ佛。」不托擬議す。師、之を趨つて去る。師、初め㋖開堂す、俞秀老疏を作り、其の事を叙して曰く、「回頭を推倒し、不托を趨翻す。七軸の蓮經未だ誦せざるに、一聲の漁父先づ聞く。」師、㋗僧官の宣して此に至るを聽き、手を以て耶揄して曰く、「止みね」と。乃ち座に登り、倡へて曰く、「本是れ瀟湘の一釣客、東より西より南北よりす」と。大衆雜然として善と稱す。師顧み視て笑つて曰く、「我れ法王の法を觀ずるに、法王の法如是」と。下座徑に去る。章子厚、師を請じて墳寺に住せしむ。方に對して食し、子厚、言之に及ぶ。

㋓端師子。白雲守端、楊岐に嗣ぐ。
㋔彩素。或は彩帛に作る。素は白練なり。
㋕搦住。とらへとどめて。
㋖開堂。入寺開堂と云ふ、嗣法の說法の式、禪宗法式の第一にして法輪を轉ずるの始め。
㋗僧官。天子より賜はる僧位。

師、目を瞑らし、偈を說いて曰く、「章惇章惇、我を請じて看墳せしめ、我は却つて素を喫し、儞は却つて葷を喫す。」子厚爲に大笑す。呂延安は坐禪を好む、而して子厚は鍛を喜ぶ。師、偈を作り、之に示して曰く、「呂公は坐禪を好み、韋公は仙を學ぶを好む、徐六、㋐喻擔板、各自に一邊を見る」と。

㋐圓照禪師、方に身を慧林に乞ふて、南の方姑蘇に歸る。師を丹陽に見て、問うて曰く、「師は端師子に非ず耶。」師曰く、「是。」圓照之に戲れて曰く、「汝は村裏の師子耳。」師、聲に應じて曰く、「村裏の師子村裏に弄す、眉毛眼と一齊に動く、口を開却すれば、肚裏直くして籠統、人の取奉を愛せず、直饒ひ弄して帝王宮に到るとも、也是れ一場の㋑乾打閧」と。其の意復た圓照の嘗て詔に應じて、都城に住くことを戲るが故なり。

大覺禪師、昔し南岳の三生藏に居ること年あり。叢林、璉三生と號す。文學議論、時の名公卿の爲に敬畏せらる。予嘗て其の孫莘老に與ふる書を得て、之を讀み、其の天下の奇才たることを知るなり。其の畧に曰く、「妙道の意、聖人嘗て之を易に寓す。周衰へ、先王の法壞れ、禮義亡ぶるに至つて、然して後、奇言異術、間々出でて俗を亂す。我が釋迦、中土に入るに迨んで、醇らㄉ第一義を以て人に示す。而して始末、慈悲を說爲して、以て衆生を化す。亦時に趣く所以なり。生民より以來、淳撲未だ散せず、則ち三皇の敎、簡にして素なるは泰なり。情實日に鑿つに及んで、則ち五帝の敎、詳にして文なるは夏なり。時、世と異に、情、日に隨つて遷る、故に三王の敎、密にして嚴なるは秋なり。昔し商周の誥誓、後世の學者、曉り難き所あり。彼の當時の人民之を聽いて違はず、則ち俗今と如何ぞや。其の弊にして秦漢と爲るに及んでや、則ち至らざる所無し。而も天下聞くことを願ふに忍びざる者有り。是に於て、我が佛如來、一へに之を推すに、性命の理を以てし、之を敎ふるに、慈悲の行を以てするは冬なり。天に四時あり、循環して以て萬物を生成す。而して聖人の敎、迭に相扶持し、以て天下を化成すること、亦猶ほ是くのごとき而已矣。然れども其の極に至りてや、皆弊無き能はず。弊は迹なり、道は一耳。要は當に聖賢者有りて、世に起つて之を救ふことあるべきなり。秦漢より今に至るまで、千有餘歲、風俗㋒靡々として愈々薄し。聖人の敎、列つて㋓鼎に立ち、互に相詆訾して、所從を知らず、大道寥々として、之を返すこと莫し、良に嘆ず可きなり」と。予之を讀んで、置くに忍びず、王文公、㋔韓子を非るを觀るに及び、其の詞意此れと相合せり。其の文に曰く、「人、孟子の楊墨を拒むを樂ふて、佛老を以て己が功と爲すこと有り、嗚呼、莊子の謂はゆる㋕夏蟲とは、其れ斯の人の謂ひ乎。道は歲なり、聖人は時なり、一時を執して、歲を疑ふ者は、終に道を聞かず矣。夫れ聖人の言、時に應じて設く。昔は常に是なる者、今は蓋し非なり。士、其の常に是なることを知つて、因つて以て變す可からずと爲す。變する所の者は言にして、同じき所の者

㋐喻擔板。一方に凝る者。
㋑圓照。圓照本禪師。
㋒乾打閧。俗語なり、事文類聚に、合坐皆笑ふの義とす、俗に謂ふ「からさわぎ」の意。
㋓第一義。大悟の法なり、禪宗にては之を第一義と云ふ。

㋒靡靡。なびく。
㋓鼎。かなへの如くに。
㋔韓子。非子。
㋕夏蟲。なつのむし、人の識見の狹小にたとへる。

は道なることを知らず。曰く、然らば則ち孰れか正しき。曰く夫れ春は冬より起ちて冬を以て終と爲す。天下の道術を終る者は、其れ釋氏か。是に至らざる者は、皆謂はゆる夏蟲なり。」大般若經に曰く、「應に欲界色界無色界の空なることを觀ずべし、善現、是の菩薩摩訶薩、此の觀を作す時、心をして亂れしめず、若し心亂れざれば、則ち法を見ず、若し法を見ざれば、則ち證を作さず。」又曰く、「金翅鳥の虛空に飛騰して、自在に翱翔し、久しく墮落せざるが如し。空に依つて戲ると雖も、而も空に據らず、亦空の爲に拘礙せられず。」昔し洞山の悟本禪師、五位偏正を立てゝ、以て大法を標準す。三種の滲漏を約して、以て衲子を辨ず。意に斷じ苟くも爲すに非ず、皆本佛の遺意なり。今の叢林、滲漏の語を聞き、往々に鼻笑す、悟本復た出づと雖も、安んぞ能く爲さんや。

大般若經に曰く、「一切智智清淨、無二、無二分、無別、無斷なるが故に」と。古の宗師、臨濟、德山、趙州、雲門の徒の如きは、皆此の意に洞達す。故に一切時に於て、心太虛に同じ。物の爲に則を爲すに至りては、則ち用ひんと要せば便ち用ふ。聊か其の一戲を觀るに、則ち將つて大千を搏取すること、陶家の手の如し。未だ了證せざる者は、當に事を以て明かすべし。草を鞭たば血流れ、頑石吼聲す。則ち情と非情との異無し。雪中に竹に啼かば、筍之が爲に茁す。則ち今昔の時無し。指を嚙んで子を悟つて、蔡順來り歸る、則ち間隔の處無し。自ら猶子に乳して、德秀乳流る、則ち男女等の相無し。㊂肇公曰く、「傷ましい夫、人情の惑へることや

㊂肇公。羅什の弟子、姚秦の人。
㊃寒山子。寒山といふ仙僧にて、詩に長ず、寒山詩。
㊄眞如。大潙眞如禪師。
㊅雲菴。守智、黃龍南に嗣ぐ。
㊆地爐。禪堂の中にあり火をたいて暖をとるところ。
㊇帔。袖なし羽織。

久し、目して眞に對すれども覺ること莫し」と。亦是を以てする而已。

山谷禪師每に曰く、「世に相貌を以て、人の福を見ること、是れ大いに然らず、福本象無し、何を以てか之を觀ん。惟其の人の量の淺深を視る耳。」又曰く、「人の壽夭を觀るには、必ず其の用心を視る、夫れ動もすれば、欺誑に入る者、豈長世の人ならんや。」㊃寒山子曰く、「語直ければ背面無し、心眞なれば罪福無し」と。蓋し心語相應は、人の常に然る者たり、而して前聖之を貴ぶこと以あり、世道の交々喪ふを見ること甚だし。大潙の㊄眞如禪師、一生門弟子に誨ふるに、但だ事を作すこと實頭なれと曰ふ。㊅雲蓋の智禪師、示す所有るには、必ず曰く、「但だ心を瞞ずること莫れ、心自ら靈聖なり。」と。

予、湘山の雲蓋に在るとき、㊆地爐に夜坐し、㊇帔を以て首に蒙りて、夜久しく僧の相語るを聞くに、曰く、「今四方皆臨濟の兒孫、平實の禪を說くを誘る。例に隨ひ、虛空中に筋斗を拋つ可からざるなり、須らく悟を求めしむべし。箇の什麼をか悟る。古人悟れば、則ち土を握つて金と成す、今の人悟れば、正に是れ鬼を見ると說く。彼れ皆狂解未だ歇まず、何れの日か家に到り去らん。」僧曰く、「只だ趙州に『承り聞く、和尙親しく南泉に見ゆと、是なりや否や』と問ふが如きは、答へて曰く、『鎭州に大蘿蔔頭を出す』と、此の意如何ん。」其の僧笑つて曰く、「多少分明なり、豈獨り臨濟下のみ此れを用つて

人を接せんや。趙州も亦老婆なること是くの如し」と。予戯に之に語つて曰く、「這の僧問端未だ穩がならず、何ぞ『如何なるか是れ天下第一等の生榮』と問はざる、答へて『鎮州に大蘿蔔頭を出す』と曰はゞ、平實更に分明なり。彼れ南泉に見ゆるを問うて、而して此れを以て對ふること、却つて虛空中に㋒筋斗を打するを成す。聞く者、傳へて以て笑ひを爲す。」

靈源禪師、予が爲に言ふ、彭器資、每に尊宿に見えて必ず問ふ、「道人命終に多く自由なり」と。或は云ふ、「自ら旨決有り」と。聞く可き乎。往々に安りに之に言ふ者あり、器資竊かに之を笑ふ。暮年に乞ふて溢江に守たり、禮を盡して、晦堂老人に致す。郡齋に至り、日夕道を問ふ。從容に問うて曰く、「臨終に果して旨決有り乎。」晦堂曰く、「之れ有り。」器資曰く、「願くは其の說を聞かん。」答へて曰く、「公の死する時を待つて、卽ち說かん。」器資、覺えず起立して曰く、「此の事、須らく是れ和尙にして始めて得べし。」予、其の言を嘆味して偈を作りて曰く、「馬祖伴有らば則ち來らん、彭公死する時卽ち道はん、睡裏㋓虱子人を咬む、手に信せて摸り得れば㋔革蚤。」

余夜僧と㋕楊大年が作る所の佛祖同源集の序を閱る。「昔し如來、然燈佛の所に於て、親しく記莂を豪る。實に少法の得可き無し、是を大覺能仁と號す」と曰ふに至りて、卷を置いて長嘆す。大年は士大夫なり、其の辯慧、以て佛祖無傳の旨に達するに足れり。今㋖山林の衲子、反つて首を仰いて、人に從つて禪道佛法を求む、笑ふ可しとす。僧曰く、「石頭大師曰く、『㋐竺土大僊の心、東西密に相付す。』豈其れ妄に之を言はん耶。」予謂つて曰く、「子、其の文を讀むこと誤れり、謂はゆる密付とは、醫巫の家に、其の術を以て、人に背いて相爾汝するが若くなるに非ざるなり。直に其をして自ら悟明せしむるを、密と爲す耳。故に㋙長慶の獻禪師曰く、『二十八代の祖師、皆傳心を說いて、傳語を說かず、但だ疑情を破つて、終に佛の心體上に於て、㋘話頭を答へ出さず。』道明上座、六祖に大庾嶺頭に見ゆるが如きは、既に發悟して則ち曰く、『此の外更に密意有りや也た無や。』六祖曰く、『我が適に說く所は密意に非ず、一切の密意、盡く汝が邊に在り』と。特に然らずや、釋迦の如きは、然燈佛の所に於て、但だ授記を得る而已。如し法の傳ふ可き有らば、卽ち之を付與せん矣。阿難亦嘗て猛省して曰く、『將に謂へり、如來我に三昧を惠み給はんと。』前聖の語訓具さに在り、以て心に鏡みつ可し。然のみならず、㋚香嚴は擊竹の聲を聞き、潙山を望んで再拜す、㋛高亭は江を隔てゝ德山に見えて、卽ち橫に趨り去る。何を以てか、密に耳語せん哉。」

㋝曹山の本寂禪師の㋞耽章に曰く、「正命食を取る者は、須らく三種の墮を具すべし。一には披毛戴角。二には不斷聲色。三には不受食。」時に會中に、稠布衲と云ふ者あり、問ふ、「披毛戴角、是れ什

㋒筋斗。もんどり。
㋓虱。音シツ。
㋔革蚤。のみ。
㋕楊大年。億居士、翰林學士、廣慧連に嗣ぐ、首山三世の名居士なり。
㋖山林。叢林と同じ意。

㋐竺土。印度の釋迦さま、卷同契の語。
㋙長慶。懷。
㋘話頭。古則公案。
㋚香嚴。智閑、潙山祐に嗣ぐ、唐の名僧、昭宗乾寧二年化す。
㋛高亭。簡、德山に嗣ぐ、唐の名僧。
㋝曹山。本寂、洞山悟本に嗣ぐ、唐の曹洞の祖。
㋞耽。耽と同じことなり、耽味の意ならん、ふかくあぢはふ。

麼の墮ぞ。」答へて曰く、「是れ類墮。」進んで曰く、「不斷聲色、是れ什麼の墮ぞ。」答へて曰く、「是れ墮。」進んで曰く、「不受食、是れ什麼の墮ぞ。」答へて曰く、「是れ尊貴墮。」因つて又爲に其の要を擧して曰く、「食とは卽ち是れ ㋐本分の事なり、本分の事、有ることを知つて取らず、故に尊貴墮と曰ふ。若し初心を執つて、自己及び聖位有ることを知る、故に類墮と曰ふ。若し初心に ㋑己事有ることを知つて、光を回す時、聲色香味觸法を擯斥して、寧謐を得て卽ち功勳を成し、後に却つて ㋒六塵等の事を執りて、分に隨つて之に味任せざれば、卽ち礙へらる。所以に ㋓外道六師は、是れ汝の師なり。彼の師の墮する所、汝亦隨つて墮せば、乃ち食を取る可し。食とは卽ち是れ正命食なり。食すれば亦是れ却つて六根門頭に就いて、見聞覺知す。只だ是れ他に染汚せられざるを將つて墮と爲す。且つ是れ向前他に均しきに同じ。本分の事すら尙ほ取らず、豈に況んや其の餘事をや。曹山、凡そ墮と言ふは、混ずること得ず、類することを齊しからざるを謂ふ耳。凡そ初心と言ふは、謂はゆる悟了同未悟耳。」

唐 ㋔溫 ㋕尙書 ㋖造、嘗て圭峰の密禪師に問ふ、「理を悟り妄を息むの人は、復た業を結ばず、一期壽終の後、靈性何くにか依る。」密、書を以て之に答へて曰く、「一切衆生、覺靈空寂を具せざること無きは、佛と殊なること無し。但だ無始劫來、未だ嘗て了悟せざるを以て、身を妄執して、我相と爲す。

㋐本分の事。生死の大事を云ふ。悟の根本。
㋑己事。悟心のこと。
㋒六塵。色、聲、香、味、觸、法。
㋓外道六師。印度にある外道等のなかのねにたとへる。
㋔溫。姓。
㋕尙書。唐の官名。
㋖造。名。

故に愛惡等の情を生じ、情に隨つて業を造り、業に隨つて報を受け、生老病死、長劫に輪廻す。然れども身中の覺性は、未だ曾て生死せず。夢に驅使せられて、身本安閑なるが如く、水の冰を作れども、而も濕性異ならざるが如し。若し能く此の意を悟らば、卽ち是れ法身本自ら無生なり、何ぞ倚託有らん。靈々として昧ます、了々として常に知る。從來する所無く、亦所去無し。然れども多生妄に習ひ、執つて以て性成し、喜怒哀樂、微細流注す。眞理然も顯達すと雖も、此の情以て率に除き難し。須らく長へに覺察して、之を損して又損すべし。風の頓に止んで波浪漸く停るが如し、豈一身の修する所、便ち佛の用に同じうす可けんや。但だ空寂を以て自體と爲す可し、色身を認むること勿れ。眞如を以て自心と爲し、妄念を認むること勿れ。妄念若し起らば都て之に隨はざれ。卽ち命終の時に臨んで、自然に業、繫ぐこと能はず、中陰有りと雖も、所向自由にして、天上人間、隨意に寄託す。若し愛惡 ㋗已に泯びなば、分段の身を受けず、自然に短を易へて長と爲し、麁を易へて妙と爲す。若し、微細の流注、一切の寂滅は、圓覺の大智、朗然として獨り存す。卽ち隨つて千百億の身を現じて、有緣の衆生を度す、之を名けて佛と曰ふ。本朝の韓侍郎宗古、嘗て書を以て、晦堂老師に問うて曰く、『昔、和尙に聞いて開悟し、㋘曠然として疑無し。但だ無始より以來、煩惱習氣、未だ頓に盡くること能はず、之を奈何が爲ん。』晦堂答へて曰く、『敬つて、書中に論及することを承る。昔時、開悟、曠然疑無し、但だ無

㋗已泯。原本、已泯の上、情の字を逸するに似たり。
㋘曠然。ひろく大なり。

始以來の習氣、未だ頓に盡くること能はず。然れども、心外に剩法無ければ、煩惱の習氣を知らず、是れ何物としてか、而も之を盡さんと欲する。若し此の心を起さば、翻つて賊を認めて子と爲るに成る。從上以來、但だ言說有るは、乃ち是れ病に隨つて藥を設く。縱ひ煩惱習氣有るも、但だ如來の知見を以て之を治す。皆是れ、善權方便、誘引の說なり。若し是れ定めて習氣の治す可き有らば、却て是れ心外に法として之を盡す可き有り。譬へば、靈龜の尾を塗に曳いて、迹を拂へば、迹生ずるが如し。謂つ可し、心を將つて心を用ふれば、轉た病を見ること深し。苟くも能く明達すれば、心外に法無く、法外に心無し。心法既に無し、更に誰をして頓盡せしめんと欲する邪。』伏して來諭を奉じて、略ぼ少答を叙べて、以て山中の信と爲す耳。」二老は古今の宗師なり、其の隨宜方便、自ら意味有り、初めより優劣無し。然れども圭峰答ふる所の詞は、正に韓公所問の意なり。而も語宗を失はず、正見を開廓することは、密を以て之を晦堂に較べば、所得多からん矣。

永明和尙曰く、「夫れ祖佛の正宗は則ち眞の唯識なり、才かに信處有らば、皆人の爲にす可し。若し修證の門を論せば、諸方皆云ふ、功未だ諸聖に齊しからず。且つ敎中に許す所、初心の菩薩は、皆比知す可し、亦敎に約して會することを許す。先づ聞解を以て信入して、後に無思を以て契同す。若し信門に入らば、便ち祖位に登る。且く現今世間の事に約するに、衆生界の中に於て、第一に比知、第二に現知、第三に敎に約して知る。」第一に比知とは、且く卽今有漏の身の如きは、夜皆夢有り、夢中に見る所、好惡の境界、憂喜㋐宛然たり、覺め來れば床上に安眠す、何ぞ曾て是れ實ならん。並に是れ夢中の意識、思想の所爲なり。則ち覺時所見の事、皆夢中の如くにして、實無しと比知す可し。夫れ過去、現在、未來三世の境界は、元是れ第八㋑阿賴耶識の親相分なり。唯だ是れ本識の所變なり。若し現在の境は、是れ明了、意識分別す。若し過去未來の境は、是れ獨散の意識思惟す。夢覺の境殊なりと雖も、俱に意識を出でず。則ち唯心の旨、比況㋒昭然たり。第二に現知とは、卽ち是れ事に對して分明なり。況を立つるを待たず、且つ現に靑白の物を見る時の如きは、物、本自ら虛なり。我れ靑、我れ白と言はず、皆是れ眼識、同時の意識に分與し、計度分別して、靑と爲し、白と爲す。意を以て辨じて色と爲し、言を以て說いて、靑と爲す。皆是れ意言なり。妄より安置し、六塵鈍を以ての故に、體、自ら立せず。名、自ら呼ばず。一色既に然り、萬法咸く爾り、皆自性無し、悉く是れ意言なり。故に曰く、「萬法本閑なり、而して人自ら鬧し。」是を以て若し心起る時あらば、萬境皆有なり。若し心の起處を空しうせば、萬境皆空なり。則ち空、自ら空ならず、心に因るが故に空なり。有、自ら有ならず、心に因るが故に有なり。既に空に非ず有に非ず、則ち唯識唯心なり。若し心を無にせば、萬法安くにか寄らん。又過去の境の如き、何ぞ曾て有ならん。念の起處に隨ひ、忽然として現前す。若し想、生せざれば、境終に現せず、此れ皆衆生の日用、以て現知す可し。功成ることを待たず、豈修得を假ら

㋐宛然。さながら。
㋑阿賴耶識。Ālaya. 藏又は無沒と譯す。
㋒昭然。あきらか。

んや。凡そ心有る者は、並に證知す可し。故に先德曰く、「大根人の唯識を知る者の如きは、恒に自心の意言を觀じて、境と爲す。此の初觀の時、未だ聖と成らずと雖も、分に意言を知る、則ち是れ菩薩なり。」第三に、敎に約して知るとは、大經に曰く、「三界唯心、萬法唯識。」此は是れ所證の本理、能詮の正宗なり。予嘗て此の言を三復せり。佛祖の所示、廣大㋓坦夷にして、明白簡易なること此くの如し、而も亦之を誦信する者有ること鮮きは何ぞや。㋔淸涼國師、言有り、曰く、「行人、勤、勇、念、知、顯修の儀に當り、貪等の世事、無始の惡習を以て之を離るること甚だ難し、世間の慈父の、孝子に離るるよりも過ぎたり。故に須らく精進して、方に能く除遣すべし。勤は則ち策勵を勤めて、勇猛にして息まざらんことを欲す。念は則ち明記して忘れず。知は則ち決斷して悔なし。」予、淸涼の訓を守り、以て永明の旨に遵ふて、諸々の同志と與に、圓寂道場に入らんことを願ふ。

嵩明敎、初め洞山より康山に游び、迹を開先の法席に託す。主者、其の年少にして、文學に銳きを佳しとするを以て、命じて㋕書記を掌らしむ。明敎笑つて曰く、「我れ豈汝が一盃の㋖薑杏湯の爲にせんや。」因つて之を去り、杭の西湖に居す。三十年、關を閉ぢて、妄りに交はらず。㋗嘉祐中に、譔する所の輔敎編、定祖の圖、正宗記を以て、㋘闕に詣して之を上る。翰林王公、素時に開封に權たり。表を爲り、朝に薦む。仁宗皇帝、加嘆することを久しうす。其の書を中書に下す。宰相韓公、參政歐公、其の文を閲て大いに驚き、朝の士大夫に譽む。書竟に㋙藏に入ることを賜ふ。明敎の名、遂に天下に聞ゆ。晚に移りて、靈隱の北、永安㋚蘭若に居す。淸旦、金剛般若經を誦して音を輟めず、齋罷んで書を讀む。賓客至れば、則ち淸談して世事に及ばず。嘗て曰く、「客去つて淸談少く、年高うして白髮饒し」と。夜分に觀世音の名號を誦す、十萬聲に滿ちて寢に就く、其の苦硬淸約の風、以て鍾山の㋛僧遠に追配するに足れり。予嘗て其の手書を見るに、月禪師に與ふるに曰く、「數年より來、紙被一翻を製し、以て苦寒を禦がんと欲す、今幸に已に之を成す。想ふに、之を聞いて、大いに笑はん」と。臨終に安坐微笑して、筆を索め偈を作りて曰く、『後夜月初明。予將ニ獨自行。不レ學大梅老。猶貪ニ聽鼠聲。』師、法を㋜洞山の聰禪師に得たり。而るに宗派の圖、德山遠公の法嗣の列に系くるは誤れり矣。

㋓坦夷。たひらか。
㋔淸涼國師。華嚴宗の祖、名は澄觀、唐の初の人、圭峰の師なり。
㋕書記。記室と同じ、禪宗役僧の名。
㋖薑杏湯。梅湯に當るべし。
㋗嘉祐。北宋仁宗の年號。
㋘闕。宮闕にて御所也。
㋙藏に入る。一切經の中に入る。
㋚蘭若。寺と譯す。
㋛僧遠。鍾山の淸僧也。
㋜洞山聰。
靈門匡眞・德山緣密・文殊應眞・洞山曉聰・明敎契嵩・雲居舜老夫

國譯石門洪覺範林間錄卷上終

國譯石門洪覺範林間錄卷下

大覺禪師、皇祐二年、十二月十九日、仁宗皇帝、詔して後苑に至らしめ、化成殿に齋す。齋畢り、㊀宣を傳へて、南方禪林の儀範に効ひ、開堂演法せしむ。又左街副僧錄、慈雲大師淸滿に宣して、啓白せしむ。滿、恩を謝し畢り、倡へて曰く、「帝苑春回つて、皇豕會々啓く、萬乘既に舜殿に臨む、兩街堯眉に奉ずることを獲たり。爰に和照の居に當り、正に是れ闡揚の日なり。宜しく祖道を談じて、上、宸衷に副ふべし。謹んで白す」と。璉、遂に座に陞る。問答罷んで、乃ち曰く、「古佛堂中、曾て異說無し。流通の句の內に、誠に多談有り、之を得る者は、妙用虧くること無く、之を失ふ者は、途に觸れて滯を成す。所以に溪山雲月、處々風を同じうし、水鳥樹林、頭々道を顯はす。若し迦葉門下に向はば、直に得たり。堯風滿々、舜日高明、野老謳歌し、漁人皷舞することを。此の時に當つて純ら無爲の化を樂しむ、焉んぞ恁麼の事有ることを知らん」と。皇情大いに悅ぶ。

杜祁公、張文定公、皆致政して睢陽に居す、里巷相往來す。朱㊁承事と云ふ者有り、醫藥を以て二老の間に游ぶ。祁公勁正にして、未だ嘗て雜學せず。每に安道が佛に佞することを笑ふ、賓客に對して、必ず此を以て之を嘲ける。文定但だ笑ふ而已。朱承事、間に乘じて文定に謂つて曰く、「杜公は、天下の偉人なり、惜しい哉、未だ此の事を知らず、公、力有り、盍んぞ之を勸發せざる。」文定曰く、「君、此の老と緣熟すること、我れに勝れり、我れ止だ能く之を助けん耳。」朱、㊄謦欬して去る。一日、祁公、朱を呼んで切脈せしむ、甚だ急なり。朱、使者に謂つて曰く、「汝、先づ往いて相公に白せ、但だ、首楞嚴を看ること、未だ了らずと云へ。」使者、告ぐる所の如く、馳せ白す。祁公默然たり。久しうして乃ち至る、几に隱りて揖して坐せしむ。徐ろに曰く、「老夫、君疏通して事を解すと以へり、意はざりき、近ごろ亦㊅闖茸に例す。謂はゆる楞嚴の如きは、何等の語にして、乃ち爾も㊆躭着す。聖人の微言は、孔孟に出でたるは無し、此を捨てゝ彼れを取る、是れ大なる惑なり。」朱曰く、「相公、未だ此の經を讀まず、何を以てか孔孟に及ばざるを知らん。某之を觀るを以てせば、之に過ぎたるに似たり」と。袖中より、其の首卷を出して曰く、「相公試に之を閱よ。」祁公熟々朱を視て、已むことを得ずして乃ち取り、默看す、覺えず軸を終ふ。忽ち起つて大いに驚き、曰く、「世間何れよりしてか此の書有るや」と。使を遣はして、盡く其の餘を持ち來らしめ、徧く之を讀む。朱が手を捉へて曰く、「君は眞の我が知識なり、安道之を知ること久し、而も以て我に告げざるは何ぞや。」即ち駕を命じて來し、文定を見て其の事を叙ぶ。安道曰く、「譬へば、人の物を失つて、忽ち已に尋ね得るが如し。但

㊀宣。勅宣。
㊁承事。官名。

㊄謦欬。おづおづする。
㊅闖茸。猥雜なり、いやしきこと。
㊆躭着。躭は耽に同じ。

だ當に其の之を得るを喜ぶべき而已。之を得るの早晩を追悔す可からざるなり。僕、相告げざるに非ず、公と朱君と、緣熟するを以ての故に、之を遣はす耳。佛祖の人を化すと雖も、亦必ず同事に藉るなり」と。祁公、大いに悅ぶ。

荊州㊀福昌の善禪師は、㊁明敎寬公の子なり、人と爲り、敬嚴にして、大法を秘重す。初め住持の時、屋廬十餘間、殘僧三四輩のみ。善、晨香夕燈、陞座說法、千衆に臨むが如し。而して叢林の受用、宜しく有るべき所の者は、咸く之を修備す。過客至れば、肅然として敬を增す。十餘年にして衲子方に集る、天下風に向つて長く想ふ。南禪師、㊂悅公と亦會下に在り、南公曰く、「我れ時に寒を病む。藥を服し被を須めて、汗を出す。文悅をして徧院に之を借らしむ、皆有ること無し。百餘人例して、紙を以て之を爲す、今は則ち然らず。重氈の上に、褥を以て之を覆ふ、一日三覺、快活の時世と謂ふべし。」

華嚴論に曰く、「若し法性に隨はば、萬相都べて無し、若し智力に隨はば、衆相隨つて現ず。隱顯緣に隨ふこと、都べて作者無し。凡夫は執着して用つて、無明と作す、執障既に無ければ、智用自在なり。」永明禪師曰く、「一眞の境を離れず、化儀百變す。是を以て箭、石虎を穿つ、功力の能くする所に非ず。醉ふて三軍に告ぐ、豈㊃麴糵の造する所ならんや。筍、寒谷に抽んづ、陽和の生ずる所に非ず、魚、冰河に躍る、豈網羅の致す所ならんや。悉く心の感を爲して、此の靈通を鼓はす。故に知んぬ、萬法の施爲、皆自心の力耳。」

㊀福昌。重善。
㊁明敎寬。雲門に嗣ぐ。
㊂悅。雲峰、大愚芝に嗣ぐ、世世三世。
㊃麴糵。かうぢ。

金峰の玄明禪師は、曹山の㊄耽章禪師の嗣なり、道貌奇古にして、機辯衆に冠たり。一日陞座して曰く、「事存すれば函蓋合ふ、理應ずれば箭鋒拄ふ。若し人道ひ得れば、我れ半院を分つて、伊れに與へん。」時に僧有り衆を出づ。明、座を下りて約住して曰く、「相見は好きことを得易く、事を共にすれば人の爲にし難し」と、去る。

㊅大本禪師、年八十にして、蘇州の靈嵩山に終ふ。行に臨み、門弟子請ふて曰く、「和尙、道天下に徧し、今日、偈告安坐無くんばある可からず。」本、熟々視て曰く、「癡子、我れ尋常、尙ほ偈を作るに懶し、今日特地に什麼をか圖らん。尋常、臥せんと要せば便ち臥す、今日特地に坐す可からざるなり。」紙筆を索めて、五字を大書して曰く、「後事、守榮に付す」と。筆を擲ち、㊆悉臥して、熟睡するが若し、然も之を撼かせば、已に去りぬ矣。

首楞嚴經に、二種の轉依とは、一には、染を轉じて淨を得、二には、迷ひを轉じて悟を得、菩提は是れ生得。謂く、二障障へて生せず。故に今障を斷じて得るを生得と名づく、涅槃は名づけて顯得と爲す。本性清淨なれども、客塵翳ふが故に、今斷じて、彼れ顯を名づけて顯得と爲す。然れども、轉位に六有り、第一、損力益能轉、謂く、初二位、勝解慚愧力を以て、本識中、染種の勢力を損し、

㊄耽章。曹山耽章禪師。
㊅本禪師。雲巖大本禪師。
㊆悉臥。ぐうぐうねると云ふの意か。

淨種の功能を益して、漸く現行を伏するを亦名づけて轉と爲すなり。第二に通達轉。見道達眞の力に由りて、二障の龜を斷じ、一分の眞實を證する、轉依なるが故に。第三に、修習轉。謂く、地地漸く俱生を斷じて、眞を證する轉依なり。第四に、果滿轉。謂く、究竟位、金剛定を以て、永く本來一切の龜重を斷じ、頓に佛果圓滿を證する轉依なり。第五に、下劣轉。謂く、二乘は苦を厭ひ寂を欣び、眞の擇滅を證して、堪能に勝ふること無きが故に。第六は、廣大轉。謂く、大乘位には、俱に欣厭無し、二空に通達し、二障を雙べ斷じ、頓に無上菩提を證す、堪能に勝ふること有るが故に。

●唐の高僧、⑦懶瓚と號す、衡山の頂、石窟の中に隱居す。嘗て歌を作る、其の畧に曰く、『世事悠悠。不レ如下山丘。臥二藤蘿下一。塊石枕頭上』と。其の言は宏妙にして、皆佛祖の奥を發す。德宗其の名を聞き、使を遣はして詔を馳す。詔の使者、其の窟に卽いて宣言す。「天子詔有り、尊者幸くは起つて恩を謝せよ。」瓚、方に牛糞火を撥き、煨芋を尋ねて之を食す。寒涕膺に垂れ、未だ嘗て答へず。使者之を笑ふ、且つ瓚に涕を拭へと勸む。瓚曰く、「我れ豈工夫の俗人の爲に涕を拭ふ有らん耶。」竟に致すこと能はずして去る。德宗之を欽嘆す。予嘗て其の像を見るに、垂頤瞋目、氣韻超然として、犯干す可からざる者の如し。爲に其の上に題して曰く、「糞火但知る黃獨の美、銀鉤那ぞ識らん紫泥の薪、尙は心緒の寒涕を收むる無し、豈工夫の俗人を問ふ有らんや。」

⑦懶瓚。唐の德宗頃の仙僧。

律部に曰く、「昔し一國有り、大いに亂る、民爭ふて他邦に逃る、道旁の室廬皆空なり。一老兵之に過る、呱々の聲を聞き、入りて之を視れば、嬰兒の屋梁を仰視する有り。老兵隨つて之を觀るに、乃ち飯⑦繠を懸くる耳。爲に解開して之に示すに、則ち灰なり。嬰兒之を見て卽ち死す。蓋し其の母、棄て去らんと欲するとき、殺すに忍びず、此の繠を懸けて、紿いて此は飯なりと云ふ。故に其れ念を係けて忘れず、其の灰たるを識つて、則ち餘想無し矣。乃ち知んぬ、三界生死の留滯は、皆想の所持なり。故に古の達法の大士、臨終に超然として自得するは、別道無し。但だ法の根源を識る而已。」

叢林に相傳ふ、「石頭和尙、身を施して虎に食ふ。祝して曰く、『我が宗如し、他日大いに振はゞ、必ず先づ吾が足を食せよ。』虎果して足よりして食す」と。予竊かに之を笑ふ、紹聖の初め、南臺に游び、泰布衲が、石頭の明上座を祭る文を見るに、其の身を施して虎に食ふを叙べて、甚だ詳かなり。乃ち知んぬ、後人明むこと能はず、遂に相傳へて、遷禪師と爲すなり。又曰く、「清涼の法眼禪師、臨終に書を以て李國主に別る、主、所居に幸す、而して法眼去らず、侍者壓すに米繠を以てして卒す」と。本傳を按ずるに、法眼は周の顯德五年、戊午七月十七日を以て疾を示す。閏月、剃髮沐浴して、衆に告げて坐逝す。未だ嘗て先づ書を以て國主に約せざるなり。而るに韓希載、悟空禪師の碑を作りて、則ち曰く、「師、臨終に書を以て皇帝に別る、中夜に鐘聲を聞き、昇元閣に御して、泣いて之を送る」

⑦繠。はらおび。

と。又曰く、「洞山の悟本禪師、母の行乞するを見て、伴りて識らざることを爲す。母竟に路旁に死す。往いて之を視るに、米數合有り、爲に大衆の粥鍋中に投じて、以て冥福を薦む」と。悟本は獨り、寒溪に庵して、百結にして最も年有り、新豐に住するに至り、已に六十餘、巖頭、雪峰、欽山、三人相尋いで至りしより、是に於て、衆を積むること幾んど千人、則ち母蓋し翅だ八十歳のみならざる矣。借使ひ其の子の顯著なるを聞けども、東吳より、孤行して來ること、亦難からずや。又曰く、「玄沙、出家せんと欲し、其の父の從はざるを懼れて、同じく魚を捕ふるに方り、因つて母を覆へして、之を溺死せしむ」と。玄沙は天資高妙なり、必ずしも爾らず。獨り知らず、何の據る所にして、便ち爾く疑はざる。此れ直だ不情の者之を記して、以て自ら藏む、安んぞ先德を誣毀して、罪逆と爲すとも、必ず其の咎に任ずる者有るを知らん、愼まざる可からざるなり。

香山居士㊂白樂天、心を內典に醉はしむ、之と與に游ぶ者は、多く高人勝士なり。其の濟上人に與ふる書を觀るに、深を鉤め、隱を索りて、精確高妙なり。未だ嘗て卷を置き長嘆して、其の人と爲りを想見せずんばあらず。恨らくは濟公の所答を見ざることを。因つて濟上人の樂天に答ふる書一首を補ふことを作す。樂天の問詞を幷せて此に錄す。

㊁「日月、弟子太原の白居易、濟上人の侍者に白す。昨者に頂謁の時、恐蒙を以てせず、言、佛法に及ぶ。或は未了の者、重ねて討論を許せ。今經典の間、未諭の者、其の義二有り、面り問答を欲すれども、恐くは彼此㊃卒々にして、語言盡きず。故に粗ぼ文字に形はす。願はくは、詳かに之を覽て、敬んで報章を佇んで、以て未悟を開け、所望所望。佛、無上の大慧を以て、一切衆生を觀じ、其の根性の大小等しからざることを知りて、方便智を以て、方便法を說く。故に㊄闡提の爲には、十善の法を說き、小乘の爲には、㊅四諦の法を說き、中乘の爲には、十二因緣の法を說き、大乘の爲には、㊆六波羅蜜の法を說く。皆病根に對して、投ずるに良藥を以てす。此れ蓋し方便敎中、不易の典なり。何となれば、若し小乘人に對して、大乘の法を說かば、心則ち狂亂狐疑して信せず、謂はゆる大海を以て、牛跡に內るること無れとなり。若し大乘人の爲に、小乘の法を說かば、是れ穢食を以て寶器に置く。謂はゆる彼れ自ら瘡無し、之を傷むこと勿れとなり。故に維摩經に、其の義を總べて云く、『大醫王と爲り、病に應じて藥を與ふ。』又首楞嚴三昧經に云く、『先づ何の法を說くことを思量せざらんや、其の所應に隨ひ、而も爲に說法す』と。正に是れ此の義耳。猶ほ說法者の人の根性に隨はざるを恐るるなり。又法華經に戒めて云く、『若し但だ、佛乘を贊せば、衆生、苦に沒在して、是の法を信ずること能はず』と。法を破して信せず、故に此くの如きは、獨り說者の病を救ふこと能はざるを虛るのみに非ず、亦恐らくは聞く者信せずして、罪苦に沒在することを。則ち佛の付囑、豈丁寧ならずや。何んぞ則ち法王經に曰く、『若し根基を定めて、小乘人の爲に、小乘の法を說き、大乘人の爲に、

㊂白樂天。居易、唐代名儒。
㊁日月。何月何日。
㊃卒卒。にはかに。
㊄闡提。信不具と譯し、外道者也。(Icchantika)
㊅四諦。苦、集、滅、道。
㊆六波羅蜜。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をいふ。

に、大乘の法を說き、闡提人の爲に、闡提の法を說かば、是れ佛性を斷じ、是れ佛身を滅す。是の說法の人は、當に百千萬劫を歷て、諸の地獄に墮すべし。縱ひ佛出世すとも、猶ほ未だ出づることを得ず。若し人中に生るれば、脣缺け舌無からん。是くの如きの報を獲ん、何を以ての故に、衆生の性は、卽ち是れ法性なり。本より已來、增減あること無し。云何が中に於て、病藥を分別せん。』又云く、『諸法の中に於て、若し高下を說かば、卽ち邪說と名づけん。其の口當に破るべく、其の舌當に裂くべし。何を以ての故に、一切衆生、心垢は同一垢、心淨は同一淨、衆生若し病めば、應に同一病なるべく、衆生須らく藥すべきは應に同一藥なるべし。若し多法を說かば、卽ち顚倒と名づく。何を以ての故に妄りに分別して、善惡の法を拆ち、一切の法を破するが爲の故に、機に隨つて法を說くは、佛道を斷ずるが故に、此れ又了然不壞の義なり。』金剛三昧經に云く、『皆一味道を以てせず。諸の雜味有ること無く、猶ほ一雨の潤すが如し。』又金剛經に云く、『是の法平等にして高下有ること無し、是を㊐阿耨多羅三藐三菩提と名づく。』此の後の三經に據らば、前の三經と義甚だ相戾れり、其の故何ぞ哉。若し維摩詰、㋟富樓那に謂つて云ふに依ると云はゞ、先づ當に入定して此の人の心を觀じて、然して後に說法すべし。又云く、『人根を觀せざれば、說法すべからず』と。夫れ富樓那の通慧を以て、又親しく如來に奉りて、大弟子と爲る、尙ほ未だ人の心を觀知すること能はず、況んや後五百歲、末法中の弟子、豈能く盡く人の心を觀知して、而して後に說法せんや。設使ひ人の心を觀知すとも、若し彼れ小乘の心を發せしに、而も爲に大乘の法を說かば可ならんや。若し未だ彼れが心を觀ずること能はずして、己が意に率つて說かば、又可ならんや。既に未だ觀ずること能はず、與に默然として說かざれば、又可ならんや。若し義に依つて、語に依らずと云はゞ、則ち上の六經の義、互に相違反せり。其れ將に孰れに依らんとするや。若し了義經に依ると云はゞ、三世の諸佛、一切の善法は、皆此の經より出づ。孰れをか名づけて、不了義經と爲さんや。況んや諸經の中に、維摩、法華、首楞嚴の說と同じき者一に非ず、法王、金剛三昧の說と同じき者、亦一に非ず、徧く擧ぐ可からず、故に二義の中に於て、各々三經を擧ぐ。此の六經は、皆上人の常に講讀する所の者なり。今故に引いて以て問を爲す、必ず甚深の旨有らん。今且く人有り、忽ち法を上人に問ふ、上人或は能く其の心を觀知し、或は其の心を觀知することを能はず、應病與藥を將つて、爲に說かんや。同一病一藥を將つて、爲に說かんや。若し應病與藥ならば、又是れ高下あり、是れ雜味あらん。卽ち法王等の三經の義に反くのみならんや、又上の所說の如きの罪報を獲ん。若し同一病一藥にして爲に說かば、必ず當に大乘を說くべし。大乘は卽ち佛乘なり。若し佛乘のみを讚せば、且つ隨應せず、且つ病を救はず、卽ち維摩等の三經の義に反く。六の者は皆如來說なり。如來は是れ眞語者、實語、不誑語、不異語者なり。今此れに隨はば則ち彼れに反く、彼に順へば此れに逆ふ。設し上人に問ふものあらば、其れ將た何の法を以て焉に對へ

㊐阿耨云云。梵語、支那では無上正等覺、この上もない正しく平等なる悟りと云ふこと。
㋟富樓那。辯才第一、釋迦十大弟子の一。

ん。此れ其の未だ論らざる者の一なり。又五蘊とは色、受、想、行、識、是れなり。十二因緣とは、無明は行を緣し、行は識を緣し、識は名色を緣し、名色は六入を緣し、六入は觸を緣し、觸は受を緣し、受は愛を緣し、愛は受を緣し、取は有を緣し、有は生を緣し、生は老、死、憂、悲、苦、惱、を緣す、是れなり。夫れ五蘊、十二因緣は、蓋し一法なり。蓋し一義なり。略して之を言へば則ち五、之を詳かにせば則ち十二と爲る。名數の多少殊ありと雖も、其の倫次轉遷に於ては、合に條貫を同じうすべし。今五蘊の中には、則ち色、受、想、行、識、相次いで、十二因緣の中には則ち行、識、色、入、觸、受、想の緣、一には則ち色、行の前に在り、一には則ち色、行の後に次ぐ。正しく之を序するに既に類せず、逆つて之を倫づるに、又同じからず。若し佛、次第にして言へば、則ち此の雜亂有るべからず。若し偶然にして說くと謂はゞ、則ち當に名づけて、因緣と爲すべからず。前後不倫、其の義安んか此に在る。其の未だ論らざる者の二なり。上人は耆年大德、後學の宗師なり、出家の中に就いて、又說法を以て佛事を作す、必す能く二義を研精し、合せて之に通ず。仍つて望むらくは、指陳して翰墨に著はせ、蓋し諸を篋笥に藏めて、永々に忘れざらんことを欲するなり。其の餘の疑義は亦續いて咨問せん。居易頓首。」と。予、其の答を補ふて曰く、「辱く書を賜ひ、敎乘を以て問を爲すこゝを蒙る。魯鈍の姿を顧み惟ふに、何ぞ以て、㋐天縱の辯に當るに足らん。然れども敢て疲陋を竭し、以て外護の法の爲にするの勤めたるを塞がざらんや。居士、論ずる所の六經の二義と夫の行色不倫の說と、通せずとする者の如きは、痛く自らの所問の端の方便智の三言を思はざるに在るのみ。此の三言を了せば、則ち百千の妙義、無盡の法門と雖も、究めて解せざる可けんや。矧んや謂はゆる維摩、法王前後の六經、相戾るの義をや。方便智とは、將の兵に將たるが如し、權謀の施す所、定式有るに非ず、其の發すること、雷霆の如く、機括の如し。故に能く過を未然に消し、衝を千里に拆たん。一時に在るのみ、豈典故に據らんや。夫れ軍勢の虛實、將氣の勇怯、陣形の可否、成敗の先見、或は定論あり。吾が敎の三乘に例せば、根を觀じて法を授け、參亂す可からざるを以てす是なり。勇怯の氣を以て、虛實の勢を爲し、以て其の事を施すは卽ち誤れり。吾が法に例せば、謂はゆる大乘の法を以て、小乘の人に授く可からず、而して小乘の人、終に大乘の法に堪受せず。維摩、法華等の三經、丁寧に告諭する所以の如き者是なり。法王等の三經、又明かに告げ直に指して、纒悉に之を蕩除す。亦當に爾るべき所なり。何を以て之を知る、兵に將たる者の如きは、意、亂を濟ひ以て國を安んずるに在り、則ち如來の意、豈迷を開き以て智を顯はさんと欲するに非ずや。三乘の語言を執して、佛の方便智と爲すは、失の甚しきなり。彼れは特だ衆生の根器を品第するの說なり。了すること能はざる者は、反つて常見に墮す。卽ち外道なり、佛道に非ざるなり。衆生の佛性、無始より來、是の事有ることなしと執する者は、又斷見に墮す。卽ち外道なり、佛道に非ざるなり。華嚴經に曰く、『凡愚の人、佛の方便に逆ふて、三乘有りと執す。』法華經に曰く、『過

㋐天縱。天よりゆるさる。

去佛を尋念すれば、亦應に三乘を說くべし』と。來書の疑ふ所、以つて釋く可し。涅槃經に曰く、『早く成佛を得んと欲する者は、與に早く成じ、遲く成佛を欲する者は、與に遲く成す』と云ふ。起信論に曰く、『世尊、勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には、果を得ること須らく僧祇を滿つべし』と說き給ふは、眞の方便智の旨なり。神にして之を明らむれば、則ち能く變通與奪して、之を施して以て衆生を成就するなり。一代の時敎は、三宗を以て之を攝す。謂はゆる法相、破相、性宗なり。前の六經の二義は、乃ち法相、破相の二宗の攝する所なり。此の二宗は自ら相難することを許さず、建立、蕩除、宗異なるを以ての故なり。又法師たる者、人の根を定觀すること能はず、過慮して誤つて人に授くるに法を以てし、且つ罪苦あらんことを疑ふ。夫れ知法の比丘は、凡夫、煩惱を具足するの軀と雖も、然も其志好明達にして、慧辯猛利なり。果位小乘の比す可きに非ず。㋐迦陵鳥の殼に在りて、則ち聲衆鳥を壓するが如く、㋑堅好木の地に茁んづれば、則ち已に群木に秀づるが如し。又況んや維摩に呵せられて、富樓那、自ら其の過を言ふこと以あるをや。是くの如くにして論せば、恐らくは尙ほ疑に紆はれんことを。請ふ、近事を借りて、以て之を明らめん。王公大人の天下の士を閱ること、必ずしも龍章玉山に非ず、其れ必ず先づ言語を以てす。言語は德行の㋒候なり、故に曰く、『有德の者は、必ず有言なり。』又曰く、『其の由る所を觀、其の安んずる所を察せば、人焉んぞ廋さんや。』古の聖人と雖も、能く此を外にすること莫し。則ち知法の者、人の根の大小を觀ること、又豈他の術あらんや。居士の疑ふ所の、色、受、想、行、識と、夫の十二有支因緣の法と、名次倫でず、互に錯繆有るが如きは、未だ名目の理を辨せざる故なり。夫れ色等の五蘊は、乃ち三苦已に成るの軀なり、十二有支は、乃ち三世生因の法なり。華嚴の十地品に云ふが如きは、第一義に於て、了せざるが故に、無明と名づく。所作の業果は是れ行、行依止、初心は是れ識、四取蘊を共生す。名色等と爲すは、其の本末の㋓沿襲を叙ぶ。理因より然るなり。般若經に則ち曰く、『色卽是空、空卽是色、色不異空、空不異色、受想行識も亦復た是くの如し』とは、有法の眞ならざるを破する故なり。且つ色體尙ほ爾り、況んや四蘊は、但だ名のみなるをや。般若の諸經は、有を破するの敎、故に五蘊を言へば、則ち色、行の前に居す。華嚴の十地品の諸經は、沿襲の因を叙ぶ。故に色、行の後に在り。略して言へば五、詳かに言へば十二なるに非ず、法の本づく所、理に本づくことを要す、而も當に義に於て、必ずしも名句を守りて以て自ら滯るべし。病多くして久しく講を廢す、前の陳ぶる所は皆敎乘の深旨なり。敢て臆斷意論に非ず、言謂の及ばざるに至りては、模を以て、魔佛を鑄る可し。同異を了辨することは、又未だ遽かに言ふ可からざるなり。」

斷際禪師、嘗て異僧と天台に游ぶ、行くこと數日、江の漲るに値ひ、濟ること能はず、杖を植つる

㋐迦陵鳥。かりょう頻伽、極樂の鳥にて美聲也。
㋑堅好木。唐木にて美材也。
㋒候。兆、しるし。

㋓沿襲。沿は淦、襲はつぐ也。

こと、之を久しうす。異僧笠を以て舟に當て、之に登りて浮び去る。斷際嫚罵して曰く、「我れ早く汝を知らば、定めて其の脛を捶折せば、乃ち快からん。」異僧嘆じて曰く、「道人猛利なること、我が及ぶ所に非ず」と。㋙雪峰、㋚巖頭、㋛欽山、湘中より江南に入る。新吳山の下に至り、欽山、足を澗の側に濯ふ。榮葉を見て、喜んで指して、以て二人に謂つて曰く、「此の山に必ず道人有らん、流に泝ふて之を尋ぬ可し。」雪峰恚つて曰く、「汝、智眼太だ濁れり、他日如何が人を辨せん。彼れ福を惜しまざること此くの如し、住山して何か爲んや」と。古の人、師を擇び友を結ぶこと、是くの如く其れ審かなる哉。

㋜法燈の泰欽禪師、初め洪州の雙林に住す。乃ち曰く、「山僧、本深く山谷に藏れ、日を遣し、生を過ぎんと擬す。清涼老人不了底の㋝公案有るに緣り、所以に出で來り、他の爲に了却す。若し人有りて問はゞ、便ち伊れに㋞說似せん。」時に一僧出でて問ふ、「如何なるか是れ老人の未了底。」欽、杖を拽いて、之を擊つ。僧曰く、「何の過か有る。」欽曰く、「㋟祖禰了せざれば、殃兒孫に及ぶ」と。李國主從容として問うて曰く、「先師、什麼の不了底の公案がある。」欽曰く、「現に分析する底。」國主之を駭く。欽、少年の時、其の悟解已に逸格なり、然れども未た人の爲に知られず、獨り法眼禪師のみ、深く之を奇とす。性、㋠繩墨を忽にして、事を事とせず。嘗て清涼より、化に維楊に遣はす。戒律を奉せず、時を過して未だ歸らず、一衆傳へて以て笑ひを爲す、法眼偶を遣はし、往いて之を呼ぶ。既に歸りて、衆の爲に浴を燒かしむ。一日法眼、大衆に問うて曰く、「虎項下の金鈴、何人か解き得る」と。對ふる者、皆契はず、欽、適に外より至る、法眼、前語を理して之に問ふ。欽曰く、「大衆、何ぞ繫ぐ者解き得ると道はざる。」是に於て人々觀を改む。法眼曰く、「汝が輩、這の回渠れを笑ふこと得ざれ」と。

㋙雪峰。存、德山に嗣ぐ。
㋚巖頭。豁、德山に嗣ぐ。
㋛欽山。文邃、洞山に嗣ぐ。雪峰岩頭と欽山と三人を雪巖欽と云ふて、中よい禪友なり。
㋜法燈泰欽。法眼益に嗣ぐ、法眼二世、清涼に住す。
㋝公案。古則公案は公府の帖の如きを云ふ。
㋞說似。ときしめす。
㋟祖禰。おやののこしたおきて。

王文公、大拜に方り、賀客門を塞ぐ。公默然たること甚だ久し。忽ち壁間に題して曰く、「霜筠雲竹鍾山寺、老を投じて歸らん歟此の生を寄す。」又、元宵に宴を相國寺に賜ひ、俳優を觀る。坐客懽ぶこと甚し。公、偶を作りて曰く、「諸〻の優戲場の中、一は貴く復た一は賤し、心に知んぬ本自ら同じきことを、所以に欣怨無し。」予、嘗て同學に謂つて曰く、「此の老人、通身是れ眼、渠れを瞞すること、一點も亦得ず。」

臨濟大師曰く、「大凡宗乘を擧唱するには、須らく、一句中に三玄を具し、一玄中に三要を具すべし」と。玄あり要あり、諸方の衲子、多く其の語を溟涬す。獨り汾陽の無德禪師、能く妙に其の旨に達す。偶を作りて之を通じて曰く、「三玄三要事分ち難し。旨を得て言を忘るれば道親しみ易し。一句明々として萬象を該ぬ。重陽九日菊花新なり」と。特だ臨濟宗のみ喜んで三玄を論ずるに非ず、石

頭が所作の參同契にも、備さに此の旨を具ふ。竊かに嘗て深く之を觀るに、但だ玄要の語を易へて、明暗と爲すのみ。文止だ四十餘句、而も明暗を以て論ずる者、之に半ばせり。篇首に便ち標して曰く、「靈源明に皎潔たり、枝派暗に流注す。」又之を開通發揚して曰く、「暗に上中の言に合し、明に清濁の句を明らむ。暗に在りては、則ち必らず上中を分ち、明に在りては、須らく清濁を明らむべし。」此れ體中玄なり、其の宗を指して其の意を示すに至りては、則ち曰く、「本末須らく宗に歸すべし、尊卑其の語を用ふ、故に下に廣く明暗の句を叙し、⑦奕々聯連して已まず。」此れ句中玄なり。其の辭盡くるに及んで、則ち又曰く、「謹んで參玄の人に白す、光陰虛しく度ること莫れ」と。道人日用に、能く時を遺れ候を失はざれば、則ち是れ眞に佛恩に報ゆ、此れ意中玄なり。法眼、之が注釋を爲し、天下の學者、之を宗承す。然れども予獨り其の三つの法を分たず、但だ一味に體中玄の解を作して、石頭の意を失ひしことを恨む。李後主、「明中に暗あり」の注辭に當り、「⑪玄黃眞ならず、⑧黑白何ぞ咎めん」と曰ふを讀みて、遂に開悟す。此れ句中玄を悟りて、體中玄と爲すのみ。⑨安楞嚴の句讀を首楞嚴に破するも、亦明處あるが如し。予、學者の其の旨を雷同することを懼るれども、宗門の妙意指趣は、今の叢林口を絕ちて言はず、老師宿德は日に以て凋喪し、末學小生は日に以て譁諠にして、復た明辨すること無し。因つて先德の銓量する大法の宗趣を此に記し、

⑥繩墨。叢林の規矩等。
⑦奕奕。さかんなること。
⑧玄黃。くろき、是非にたとふ。
⑧黑白。くろしろ、善惡にたとふ。
⑨安楞嚴。楞嚴經の一種

以て有志者を俟つ。此の方の敎體は、音聞を以て機に應ず、故に明導の者、假りに語言を以て、其の智用を發す。然れども言を以て言を遣り、理を以て理を辨ずれば、則ち妙精圓明にして、未だ嘗て間斷せず、之を流注眞如と謂ふ。此れ汾陽の謂はゆる一句明々として萬象を該ぬる者なり。之を得る者は、神にして之を明らめ、然らざれば語下に死す。故に其の機に應じて用ふるに、皆窠臼を脫略して、影迹に滯らざらしむ。之を有語中の無語と謂ふ。此れ汾陽の謂はゆる重陽九日菊花新なる者なり。三玄の設け、本猶ほ病を遣る。故に達法の者、其の意を知ることを貴ぶ。意を知らば、則ち⑩索爾として虛閑に、緣に隨つて⑪任運なり、之を時を遺れずと謂ふ。此れ汾陽の謂ゆる意を得て言を忘るれば道親しみ易しと云ふ者なり。古塔主、喜んで此の道を明らむことを論ず。然れども三玄を論ずれば、則ち言を以て傳ふ可し。三要を論ずるに至りては、則ち說なくんばあるべからず。豈一玄中に三要を具す、玄あり要ありと曰はざらんや。親しく此の道を證するに非ざるよりは、能く辯ずること莫し。

⑩索爾。索は大繩、又は緊緊也。
⑪任運。天運自然に任ずる也。
⑫玉澗林。廬山の智識也。
⑬堂堂。さかんなること。
⑭戒五祖。師戒、明覺寬に嗣ぐ、雲門の三世。

廬山⑫玉澗の林禪師、雲門の北斗に身を藏す因緣の偈を作りて曰く、「北斗藏身爲に擧揚す。法身此れより露⑬堂々、雲門、他家の子を賺殺して、直に如今に至るまで霞に度量す。」五祖の⑭戒禪師は雲門の的孫にして、機辯有り、嘗て祖峰の法席を罷めて、山南に游び、林に見えて、偈を作るの意を問

ふ。林、目を擧げて之を視る。戒曰く、「若し果して此くの如くならば、雲門、一錢に直らず、公亦當に兩目無かるべし」と。遂に去る。林、竟に言ふ所の如し。而して戒も、暮年に亦一目を失ふ。今妄意を以て先德の旨を測度し、後生を疑惑する者、亦以て少しく戒む可し。

天台宗の講徒曰く、「昔し智者大師、西竺異比丘の言を聞くに、龍勝菩薩嘗て灌頂部に於て、大佛頂首楞嚴經十卷を誦出し、五天に流在す。皆諸經に未だ聞かざる所の義なり。唯だ心法の大旨なり、五天の世主、保護秘嚴して、妄りに傳授せず。智者之を聞き、日夜に西に向ひて禮拜して、早く此の土に至り、佛の壽命を續がんことを願ふ。然れども竟に見るに及ばず。唐の㊆神龍の初に、此の經、方に廣州に至りて飜譯す。今市工㊇販鬻して天下に徧し、而も學者、往々に生を畢るまで、嘗て之を識らざる者あり、法輕ければ、則ち信種自ら劣なり。嘆す可きなり。」

古の老衲住山、多く物に託して意を寓し、既に自ら游戲し、亦人を悟さんとす、子湖の犬を畜ひ、道吾の巫衣端笏の如し。獨り雪峰、歸宗、西院、皆木蛇を握る。故に雪峰、西院に寄する偶に云く、「本色住山の人、且た刀斧の痕無し。」予、㊈元符の間に疎山に至る。㊉仁禪師の畫像を見るに、亦木蛇を握る。嘗て僧あり、問うて曰く、「和尚の手中、是れ什麼物ぞ。」答へて曰く、「是れ曹家の女。」因つて

㊆神龍。唐の中宗の年號、日本文武天皇慶雲ごろなり。
㊇販鬻。うりひさぎ。
㊈元符。北宋哲宗の年號、日本堀河天皇承德のころなり。
㊉仁禪師。雪峯存に嗣ぐ。初め南臺に住し、後、鎮境寺に遷住す。

其の孤韻超拔、能く熱惱を淸涼にすることを嘆じて、爲に贊を作りて曰く、㊐「三支の習氣、其の毒燄然なり、識心を薰蒸して、㊋盤屈糾纏す。衆生明めずして、橫に疑怖を生ず。忽然之を見て、輒ち自ら驚仆す。空華の世間、本と生滅を離る。廓然たる十方、其の窟穴を露はす。惟だ矮師叔のみ、是れ大幻師なり。萬法を與奪して、自在に娛嬉す。乃ち知んぬ大千皆公の戲具なることを、手中の木蛇、是れ曹家の女。」

永明和尙問うて曰く、「此の根本識心、既に稱して一切の法體と爲す。又常住不動と云ふ。只だ萬法の如きは、此の一心に卽して有るか、此の一心を離れて有るか。若し心に卽せば萬法遷變す、此の心云何が稱して常住と爲さん。若し此の心を離るれば、復た云何が一切の法體と爲すことを得ん。」自ら答へて曰く、「開合して緣に隨ひ、卽するに非ず、離るゝに非ず、緣會するを以て、故に合す、緣散するを以て、故に開く。開合は但だ緣、卷舒體なし、緣但だ開合す。緣亦本空なり。彼此知無くして、能所俱に寂す。」故に密嚴經の偈に曰く、「譬へば金石等の、本來水相無く、水と共に和合して、水の若くに流動するが如し。」藏識も亦是くの如し、體、流動に非ざれども流る。諸識共に相應して、法と同じく流轉す、鐵の磁石に因りて、周回して轉移するが如し。二つ俱に思あること無く、狀ち思覺有るが若し。㊌賴耶と㊍七識と當に知るべし。亦復た然ることを、習繩の繫ぐ所、人無くして有るが若し。衆生の身に普徧し、諸の陰趣に周行す。鐵と磁石と展轉して相知らざるが如し。予嘗つて諦かに

㊐三支。貪と瞋と癡なり。
㊋賴耶。第八阿賴耶識の略。諸法の根本なり。

一切衆生を觀るに、動轉遷移の中に迷ひ、心を生じ執着して、以て實に然りと爲す。是を以て、生あり、死あり、罪行はれ、福行はると横計す。嬰兒の自ら旋りて、屋廬の轉すると見るが如し。諸佛大悲を以て、爲に方便を作して、無情の類、心念あること無くして、而も遷流あるを以て、爲に識心本來自ら寂なるに譬へ、卽ち無生大解脫門に入らしむ。

潭州の道吾山に㊀湫あり、毒龍の蟄する所なり。墮葉波に觸るれば、必ず雷雨日を連らぬ、過ぐる者敢て嚙かず。慈明、㊁泉大道と同じく游ぶ。泉、其の衣を牽いて曰く、「同じく浴す可し」と。慈明肘を擧き、徑に去る。泉、衣を解き躍り入る。霹靂隨ひ至り、腥風雨を吹き、林木㊃掀播す。慈明、草中に蹲り、大いに驚き、泉、死せりと意へり。須臾にして晴霽す、忽ち頸を引いて、波間より出で、笑つて呼んで曰く、㊄「囮」と。又嘗て融峰頂に夜坐す。大㊅蟒あり、之を繞盤す。泉、衣帶を解き、其の腰に㊆縛す、中夜見えず、黎明に杖を策き、徧山に之を尋ぬ。帶、枯松の上に纏はる、蓋し松の妖なり。又後洞より、一の石羅漢の像を負ふて南臺に至る。像、無慮數百斤、衆僧驚駭し、其の來るを知ること莫し。後洞の僧も亦其の去ることを知ること莫し。遂に相傳へて、今に至るまで飛來羅漢と號す。又衡山縣を過ぐるとき、屠者の肉を斫るを見て、其の旁に立ち、憐む可きの態を作し、其の肉を掣し、

㊀七識。末那識とて、凡夫心の根本也。
㊁泉大道。汾陽照に嗣ぐ。
㊂掀播。はねあがる。
㊄囮。舟を引く聲よりたとへる、こーあとかえーいとかあーとか云ふこゑ、ちから入れてだす聲。
㊅蟒。うはばみ。
㊆縛。ゆはふ。

又其の口を指す。屠問うて曰く、「汝啞なるか。」卽ち點頭す。屠大いに之を憐み、巨臠を割いて、鉢中に置く。泉、其の望外に出づるを喜び、連呼して感謝と曰ふ。市人皆笑ふ。泉、自若として去る。後に南嶽の芭蕉菴に住す。横逆に遭ひ、其の衣を民にせらる。郴州の牢城に役し、盛夏に土を負ふて城を㊇塹ぐ。迺彌を經て、擔を弛べて坐す、觀る者堵の如し。偈を說いて曰く、「今朝六月六、谷泉罪を受くること足る、是れ天堂に上らざれば、便ち是れ地獄に入らん」と。言ひ訖りて微笑して寂す。異香郁然たり、郴人今に至るまで、之に供事す。泉は親しく汾州の無德禪師に見ゆ。南山の淸源道人、予に謂つて曰く、「我れ十餘年、老黃龍の侍者と作る、其の慈明に見えし事を說くを聞くに、甚だ詳かなり、嘗て㊈喟然として嘆じて曰く、『我れ平生、谷衆文悅を得ず、又爭でか慈明を識得せん』と。」

靈源禪師、予に謂つて曰く、「道人保養すること、人の病に、須らく藥を服すべきが如し、藥の靈驗は見易し、口を忌むことを要須せば、乃ち可なり。然らざれば藥を服すとも何の益あらん。生死は大病、佛祖の言敎は是れ良藥、染汚の心は是れ雜毒、之を忌むこと能はざれば、生死の病、時として損すること無けん」と。予、其の言を愛し、聞覺經を追念するに、曰く、「末世の諸衆生、心に虛妄を生せず、佛說き給ふ、是くの如きの人は、現世に卽ち菩薩なり。」法華經に曰く、「若し精進の心を起さば是れ妄なり、精進に非ず、但だ能く心妄ならざれば、精進涯り有ること無し。」㊉南岳の思大師、

㊇塹。塞也。
㊈喟然。ためいきついてなげくこと。

法華三昧に悟入す。卽ち誦して曰く、「是れ眞の精進、是れを眞の法供養と名づく。」汾陽の ㋐無業大達國師、一生、學者の問に答ふるに、但だ「莫妄想」と曰ふ、是れを稱性の語、見道の徑門なりと謂ふ。禪者其の言を易り、反つて玄妙を求む、笑ふ可し。

三祖の信心の銘、誌公の十二時の歌、永嘉の證道の文、禪者誦せざる可からず、退之が大顚に見ゆる事、㋒傳大士の四相の頌、宗門に言はずと雖も、何ぞ傷まんや。

㋓定上座は何の許の人なることを知らず、臨濟の會中、㋔龍象と號稱す。初め臨濟に至りて問ふ、「如何なるか是れ祖師㋕西來意。」臨濟下座し、搊住して曰く、「速かに道へ、速かに道へ。」定擬議す。濟之を㋖掌して輒ち推し去る。傍僧呼んで曰く、「何ぞ禮拜せざる。」定拜起して、汗雨の如し、因つて大悟す。巖頭、雪峰、欽山三人、河北に往く。道に定に鎭府に逢ふ。問うて曰く、「臨濟和尙健なりや否や。」定曰く、「已に化し去れり」と。相顧て嘆息す。又問ふ、「何の言句の衆に示す有る。」定曰く、「尋常上堂に曰く、汝等諸人、赤肉團上に、一㋗無位の眞人あり、常に面門より出入す、未だ證據せざる者は看よ」と。欽山曰く、「何ぞ赤肉團上、非無位の眞人と道はざる。」定忽ち㋘擒住して曰く、「且らく道へ、無位の眞人と非無位の眞人と相去

㋐南岳思。慧思といひ法華に通ず。
㋑無業大達。汾陽の大德也。
㋒傳大士。雙林善慧大師といひ、輪藏を作る。
㋓定上座。臨濟に嗣ぐ。
㋔龍象。會下の中のえらもの。
㋕四來意。達磨の支那に來た意旨。
㋖掌。ぴつしやり手のひらでやつた。
㋗無位の眞人。これが禪宗悟りの根本じやと云ふこと。
㋘擒住。とらへとどめる、まあまつたとの意。

ること多少ぞ、速かに道へ、速かに道へ。」欽、色動いて對ふること能はず、巖頭、雪峰、之を㋙解せと勸む。定曰く、「若し是れ這の兩箇の老凍醸にあらざれば、㋚尿牀の鬼子を堅殺せん」と。又橋を過り、三の講人、方に法義を論ずるを見る。定、杖に倚り之を聽く。講者戲に問うて曰く、「禪者、如何なるか是れ禪河窮めて底に到らん。」定、捉住して、水中に拋置せんと欲す。兩講人、驚き之を抱持して、哀告す。定曰く、「若し是れ汝が輩にあらずんば、且く這の漢をして、窮めて底に到らん」と。臨濟の宗旨、直下に便ち見て、復た情を留めざることを貴ぶ。定公用ふる所、舒卷自在なること、明珠の盤を走りて、影迹を留めざるが如し。畏仰す可けん哉。

南禪師、積翠に居りし時、僧あり侍立す。顧視之を久しうして問うて曰く、「百千の三昧、無量の妙門、一句と作して汝に說與す。汝還つて信ずるや否や。」對へて曰く、「和尙の誠言、安んぞ敢て信せざらん。」南公其の左を指さして曰く、「這邊に過ぎ來れ。」僧將に趨らんとす、忽ち之を㋛咄して曰く、「聲に隨ひ色を逐ふ、甚の了期かあらん、出で去れ。」一僧之を知りて、卽ち趨り入る。南公、前語を理して之に問ふ、亦對へて曰く、「安んぞ敢て信せざらん。」南公又其の左を指さして曰く、「這邊に過ぎ來れ。」僧堅く往かず。又之を咄して曰く、「汝來りて我に親近せしに、反つて我が語を聽かず、出で去れ」と。其の門風壁立、佛祖と雖も、亦將に氣を喪はんとす。故に能く臨濟巴陵の道を起す。而るに今人其の家風を誣ゆ。但

㋙解。ゆるせ。
㋚尿牀の鬼子。便所の鬼にて、惡罵するの言也。
㋛咄。やい馬鹿やらう。

だ是れ平實の商量と、笑ふ可きなり。

予常に愛す、王梵志の詩に云く、「梵志翻つて襪を着くれば、人皆是れ錯と謂ふ。寧ろ儞が眼を刺す可し、我が脚を隱す可からず。」と、寒山子の詩に云く、「人は是れ黑頭の蟲、剛ひて千年の調を作す。鐵を鑄て門限と爲す、鬼見て手を拍つて笑はん」と。道人自ら行處を觀じ、又世間を觀じ、當に是くの如く游戲すべきのみ。

淨業障經に曰く、「㋐世尊、無垢光に謂つて曰く、『寢ねて欲を犯すと夢む、本と差別無し、一切の諸法は、本性清淨なり。然れども諸の凡夫は、愚小無智にして、無有の法に於て、如なることを知らざるが故に、妄りに分別を生じ、分別を以ての故に、三惡道に墮す。』古佛同聲に偈を說いて曰く、『諸法は鏡像に同じ、亦水中の月の如し。凡夫愚惑の心は、癡恚愛を分別す。諸法は常に無相なり、寂靜にして根本無く、無邊にして取る可からず、欲性も亦是くの如し』と。」然れども敎乘の論ずる所、開遮一にあらず、故に曰く、「九結十纏、性空寂なりと雖も、初心の學者は、且く須らく之を離るべし。是を以て諸佛所說の深經には、先づ新發意の菩薩に於て、說く可からざるを誡む、種子の習重、現行を發起することを慮る。又觀淺く根浮にして、信解及ばざるが爲の故なり。」

㋐世尊。十號の一、釋迦牟尼佛を云ふ。

道吾の眞禪師、孤硬にして大知見を具す、俱に禪林に重名あり。當時慈明の會中に、先づ會、眞の二大士を數へて、龍象と爲す。然れども法を開くこと、皆遠方の小剎にして、衆才かに二十餘輩、諸方より來る者は、必ず之を勘驗す、往々崖を望んで退くもの甚だ多し。眞、病に臥す。院主問ふ、「和尙近日㋑尊候如何。」答へて曰く、「粥飯頭に氣力を得ず。」良久して曰く、「會す麽。」對へて曰く、「不會。」曰く、「猫兒の尾後に研槌を帶ぶ。」或は問ふ、「如何なるか是れ佛。」答へて曰く、「洞庭蓋無し」と。予、偈を作りて曰く、「洞庭蓋無し、法身を凍殺す、趙州食を貪り、牙齒に津を生ず。」

翠巖の眞點胸、英氣逸群にして、虛りに許可せず、嘗て南昌の章江寺に客たり。長老政公、亦慈明に嗣ぐ。性、講說を喜び、學者多く義學を尙ぶ。眞、一日政を見て、則ち手を以て其の衣を揮げ、兩脛を露はし、緩步して過ぐ。政怪んで、之を問ふ、對へて曰く、「前廊後架、皆是れ葛藤、正に恐らくは絆倒せん耳。」政、爲に大笑す。又問うて曰く、「眞兄、我れ儞と同參なり、何ぞ人を見て便ち我れを罵ることを得たる。」眞、熟視して曰く、「我れ豈汝を罵らん、吾れ一㋒喙を畜へ、佛を罵り祖を罵るに準備す。汝何ぞ預らんや。」政、之を如何ともすること無し。而して去りて、南禪師に見えて曰く、「我れ他日、十字街頭に箇の粥㋓飰の主人と做り、僧ありて黃檗より來らば、我れ必ず之を勘せん。」南公曰く、「何ぞ必ず他日にせん、我れ黃檗の僧と作らん、汝今試に問へ。」眞便ち問ふ、「近離什麼の處ぞ。」曰く、「黃檗。」眞曰く、「見說く、㋔堂頭老子、脚跟地に點せずと、是なりや否や。」曰く、「上座、

㋑尊候。あなたのごきげん。
㋒喙。くちばし。
㋓飰。飯に同じ。
㋔堂頭。その寺の住持の和尙。

何れの處に這の消息を得來る。」眞曰く、「人あり傳へ至る。」南公笑つて曰く、「却つて是れ汝脚跟地に點せず。」と、眞亦大笑して去る。好んで學者に、㊥魯祖當日來參の者を見れば、「何が故ぞ便ち面壁し去る」と問ふ。未だ其の機に契ふ者あらず。自ら偈を作りて曰く、「千山と萬山とを坐斷して、人に勸めて是非を除却すること難し、池陽近日消息無し、果して當年自覩せざるに中る。」

衡嶽の楚雲上人、唐末に生る、至行あり。嘗て血を刺して、妙法蓮華經一部を寫す、長さ七寸、廣さ四寸、而して厚さ之に半す。梅檀の匣を作りて、福嚴の三生藏に藏む。又八字を其の上に刻み、曰く、『若開二此經一。誓同二慈氏一』と。㊦皇祐の間に、貴人あり、遊山して之を見て、其の妄を疑ふ。人をして鉗を以て之を發かしむ、血ありて綾の如くに出づ。須臾にして風雷山谷に震ふ。烟雲屋に入り、相捉へども相見えず。日を彌りて止まず、貴人大いに驚き、誠を投じて懺悔す。嗟乎、願力の持する所、乃ち爾も異なり。予、嘗て經游して之を頂戴す、細かに看れば、血綾依然たり。㊧貫休詩あり之に贈りて曰く、「皮を剔り血を刺して、誠に何ぞ苦む、爲に寫す靈山九會の文、十指澀乾して七軸を終ふ、後來の求法更に君無し。」

永明和尚曰く、「今の學者、多く解會を求むることを好む、此れ豈究竟ならんや、解は但だ情を遣らんが爲めのみ、說は但だ執を破せんが爲めのみ。情消し執盡くれば則ち說解何ぞ存せん、眞性了然たり、寂にして存泯無し。所以に若し卽と不卽とを言はゞ、皆是非に落つ。㊨瞥かに有無を掛くれば、卽ち正念に非ず、故に三祖大師云く、『纖かに是非あれば、紛然として心を失す』と。」時に僧ありて問ふ。「凡そ有無に涉れば、皆邪念と成る、若し能所に關すれば、悉く有無に墮つ、如何んが是れ正念にして知らん。」答へて曰く、「瑞草嘉蓮に生じ、林華早春に結ぶ」と。此れは是れ禪宗の妙、諸の方便中に於て、最も親語たり。

㊤白雲端禪師、蠅子窓を透るの偈を作りて曰く、「光を尋ぬるが爲に、紙上に鑽る、透ること能はざる處、幾多か難し。忽然撞着す來時の路、始めて覺ゆ平生眼に瞞せらるこを。」北斗に身を藏す因緣の偈を作りて曰く、「五陵の公子花に游ぶに慣ふ、未第貧儒古より多し、冷地に他人の富貴を看て、等閑に㊩幞頭を奈何ともせず」と。予謂ふに、此の老、筆端口あり、故に多說少說、皆剩語なし。

道宣律師、二祖の傳を作りて曰く、「可、賊に遇ふて臂を斫らる、法の心を御するを以て、初めより痛苦無し」と。獨の僧神淸、其の說を引き、以て左書す。予之を讀み、每に失笑す。且つ宣、是非を辨するに暗きを嘆ずるなり。既に林法師と二祖とを列して傳を聯らぬ。林の傳に於て則ち曰く、「林、賊に遇ふて臂を斫られ、呼號して已まず、故に人呼んで、無臂林と爲す。」林、二祖と友として善し、

㊥魯祖。達磨を云ふ。
㊦皇祐。年號。
㊧貫休。禪月大師、唐の名僧。

㊨瞥。わづかにとよむ、ちらりとの意。
㊤白雲。名は守端、五祖演に嗣ぐ。
㊩幞。頭巾。

一日同じく餐す。其の亦一手を以て進むるを惟み、其の故を問ふ。對へて曰く、「我れ臂無きこと舊し」と。豈之に游從する人、賊の爲に臂を斫らるること、久しうして知らず、反つて相問ふ者あらんや。夫れ二祖は、法を求むるを以ての故に、世に知る者なし。林公は賊に遇ふを以ての故に、人皆之を知る。宜、之を雷同して、先聖を辱誣するは過てり。彼の神清何爲る者ぞや、據つて以て書を爲す、又以て一笑を發す可し。然りと雖も孟子曰く、「盡く書を信せば、書無きに如かず」と。學者亦以て此に鑒む可し。

慈明老人、性豪逸にして、繩墨を忽にす、凡聖測ること莫し。初め南源を棄てて、其の母を歸省し、銀盃を以て之が壽を爲す。其の母、諸を地に投じ、罵りて曰く、「汝少うして行脚するに、布甕を負ひ去る、今安ぞ此の物を得ん、吾れ望むらくは、汝が我れを濟はんことを、今反つて我れを置いて地獄の滓と作さんと欲すや」と。慈明、色怍ぢず、徐ろに之を收めて辭し去る。㊀神鼎の諲公師叔に謁す。諲公は首山の子なり、望、叢林に高し、住山三十年、影、山を出でず、諸方其の意に當る者あること莫し。慈明通謁して、法姪と稱す、一衆大いに笑ふ。諲公、人をして問はしむ。長老、「何人の嗣ぞ」と。對へて曰く、「親しく汾陽に見え來る。」諲、之を訝り、出でて與に語る。應答流るゝが如し、大いに之を奇とす。會々道吾席を虛しうす。郡、移書して、大㊆禪伯を得て之を領せしめんと欲す。諲、慈明を以て召に應せしむ。湘中の衲子、其の名を聞き、聚りて之を觀る。予謂らく、慈明の道、臨濟を將に仆れんとするに起す、而して平昔㋐廓落なること乃ち此くの如し。神鼎微りせば、則ち殆んど亦谷泉の流ならん。然れども至人の示現、要するに有思議心の能く知る所に非ざるなり。

㊀神鼎洪諲。首山省念に嗣ぐ。
㊆禪伯。禪僧を尊びて用ゐる敬稱の一なり。

敎中に、女子出定の因緣あり、叢林の商略甚だ衆し。道眼明白にして、親しく作家を見るに非ざるよりは、能く明らむること莫し。大愚の芝禪師、每に僧に問うて曰く、「文殊は是れ七佛の師、什麼として此の女子の定を出し得ざる。㊇罔明菩薩は㊈下方よりして至る。但だ㊉彈指一聲して、便ち能く定を出す」と。對ふる者あること莫し。乃ち自ら對へて曰く、「僧、寺裏に投じて宿す、賊は不愼の家に入る」と。予、其の語を滋愛す。偈を作りて之を記して曰く、「出家只だ彈指を消す、佛法豈工夫を用ひんや、我れ今用ひんと要せば便ち用ふ。罔明と文殊とに管せず。」雲庵和尙之を見て、明日升座、前話を用ひて乃ち曰く、「文殊と罔明と、見處優劣ありや也た無や。若し無しと言はゞ、文殊何が故ぞ女子の定を出し得ざる、只だ今日、行者法鼓を擊動して、大衆同じく座前に列するが如きは、罔明、女子の定を出すと是れ同か是れ別か。」良久して曰く、「道ふことを見ずや、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀すべし。」亦偶あり、曰く、「佛性は天眞の事なり、誰か云ふ別に師ありと、罔明彈指の處、女子出禪の時、纖毫の力を費さず、何ぞ曾て所思を動せん、衆生總に平等、日用自ら疑ひ多し。」

㋐廓落。志なうしなふことに用ふ。
㊇罔明菩薩。過去佛の一也。
㊈下方。四十二億河沙の國土。
㊉彈指。つまはじき。

大愚芝禪師、偈を作ること絶だ精峭なり。予猶ほ老成の多く之を誦するを見るに及ぶ。其の僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」答へて曰く、「麻三斤」の偈を作るに曰く、㊂「眸を横にして㊃梵字を讀み、舌を彈じて眞言を念ず。火を吹いて尖鋩を長じ、柴生じて滿竈烟る。」又雲門㊁普字の偈を作るに曰く、「佛を說き法を說いて廣く㊄鋪舒す。矢上に尖を加ふ也た太だ悲なり。明眼の衲僧傍に㊅覷見す。一條の拄杖兩人捉く。」又示衆に曰く、「沙裏油無く事哀む可し、翠巖飯を嚼んで嬰孩に餵む。他時好惡端的を知らば、始めて覺ゆ從前滿面の灰。」

㊆李留後端愿、達觀禪師に問うて曰く、「人死して識何れの所に歸すべき。」答へて曰く、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」對へて曰く、「生は則ち端愿已に知る。」曰く、「生、何れより來る。」李留後擬議す。達觀其の胸を揖ちて曰く、「只だ這裏に在り、箇の什麼をか思量する。」對へて曰く、「會せず。」曰く、「只だ程を貪ることを知つて、㊇蹉路することを覺えず。」達觀拓開して曰く、「百年一夢。」又問ふ、「地獄畢竟是れ有か是れ無か。」答へて曰く、「諸佛、無中に向つて有を說き、眼に空華を見る。太尉は、有中に就いて無を覓め、手に水月を㊈撮る。笑ふに堪へたり、眼前に牢獄を見て過ぎず、心外に天堂を見て生を欲することを。殊に知らず、欣怖心に在れば、善惡境を成すことを。」太尉、但だ自心を了せば、自然に惑無し。」進んで曰く、「心、如何か了せん。」答へて曰く、「善惡都て思量することと莫れ。」又問ふ、「不思量の後、心何れの所にか歸す。」達觀曰く、且く請ふ。太尉宅に歸り、潤州の浮玉山に住す、禪者景向す。嘉祐五年、正月元日、堂に登りて、出世の始末を叙す。大衆悲戀す。下座、方丈に入りて趺坐す。衆復た擁して至る。手を以て揮ひて曰く、『各壁に就き、立つて譁しきこと勿れ』と、少頃して寂然として逝す。」

㊂眸。ひとみ。
㊃梵字。印度の文字、こゝでは經文をさす。
㊁普。あまねくの意、偏界普て現はるなど下語せり。
㊄鋪舒。しきのべる。
㊅覷見。うかがひみる。
㊆李留後。達觀に嗣ぐ、居士。
㊇蹉路。みちをまごつく。
㊈撮。音さ、とる。

予、大宋の僧史會略を讀み、隋の大臣楊公素が識度明正を愛す。嘗て嵩山に游び、畫壁を見る、指ざして道士に問うて曰く、「此れ何の像ぞ。」對へて曰く、「老子胡を化して成佛せしむる圖なり。」楊公曰く、「何ぞ胡を化して八道を成せしめずして、反つて成佛せしむるや。」道士答ふること能はず、傳へて以て名言と爲す。

雪竇の㊉通禪師は、長沙岑大蟲の子なり。毎に諸の同伴に謂つて曰く、「但だ時中常に在らば、識盡きて功成ず、瞥然として起らば、卽ち是れ他を傷ましむ。而も況んや言句をや。故に石霜の諸禪師の宗風に、多く內紹外紹、臣種王種、借句挾帶を論ず。直饒ひ未だ嘗て照を忘れざるも、猶ほ外紹とし、之を臣種と謂ひ、亦之を借と謂ひ、之を誕生と謂ふ。然れども絲毫も隔てずして、王子の生下して、卽ち能く紹種なるが如きには若かず、之を內紹と謂ひ、之を王種と謂ひ、之を句と借とに非ずと謂ふなり。借の言たる、一色邊の事のみ、已むことを得ずして、機に應じて生を利すれば、則ち挾帶と成る。」と、汾陽の無德禪師の偈に曰く、『士庶公侯一道に看る、貧富賢愚漸次と名づく。將に知る、修

㊉通禪師。長沙岑に嗣ぐ。

行亦須らく眼を具すべし。』と、予參じて此に至り、毎に自ら嗟笑す。嗟くらくは、堂中の首座、先師の意を昧して、脱去することを。笑ふことは羅山大師契はず、而も巖頭を識ることは、棗栢大士の論を觀るに及んで、曰く、「當に㋑止觀の力を以て、功熟して乃ち證知すべし、急も亦成ることを得ず、緩も亦得ず。但だ常に休せざることを知らん、必定して虚しく棄てず、乳中に酪あるが如し、要は須らく其の緣を待つべし。彼の緣緣の中に、本と作者有ること無し、故に其の酪成り已る。亦來處あることなし、亦是れ本有に非ず、如來の智慧海方便も亦是くの如し。」と是を以て知んぬ、古の老宿の行處は、皆聖賢の言なりと。

幽州㋺盤山の積禪師、言あり、曰く、「地の山を擎げて、山の孤峻なることを知らざるに似たり。石の玉を含んで、玉の瑕なきを知らざるが如し。若し能く是くの如くならば、是れ眞の出家なり。」と、大法眼禪師曰く、「理極りて情謂亡し、如何ぞ喩齊あらん、到頭霜夜の月、任運前溪に落つ、果熟して猿の重きを象ね、山長くして路の迷ふに似たり。頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」遂導師曰く、「老僧平生、百、所解なし、只だ是れ日々一般、此の間に住すと雖も、緣に隨つて任運、今日諸上座、本と異なることなし。」と。

古の人大機智あり、故に能く緣に遇ふて卽ち宗し隨處に主と作る。巖頭和尚曰く、「汝但だ綱宗を識りて、本と是の法無し。」予嘗て客と靈雲見桃華の偈を論じて曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち又枝を抽んづ。桃花を一見してより後、直に如今に至るまで更に疑はず。」潙山老子、大人の相無し、便ち云く、緣より入る者は、永く退失なし。獨り、玄沙のみ曰く、「諦當なることは、甚だ諦當、敢保す、老兄猶ほ未徹在。」客、予に問ふ、「未徹の處安くに在るや。」爲に偈を作りて曰く、「靈雲一見して再見せず、紅白枝々花を著けず、耐がたし釣魚船上の客、却つて平地に來りて魚鰕を摝る。」

五祖戒禪師、喜んで衲子を勘驗す。時に大岳、雪竇號して飽參とす、且つ機辯あり、東山の下に至る。雪竇、大岳をして先づ往かしむ。岳、包腰して、徑に方丈に入る。時に戒、外より歸りて之を見る。呼んで曰く、「什麼を作す。」岳、首を回らし、手を以て圓相を畫して之に示す。戒曰く、「是れ什麼ぞ。」岳曰く、「胡餅。」戒曰く、「爐竈の熱に趁ひ、更に一箇を搭けよ。」岳、擬議す。拄杖を曳いて、門を趂ひ出す。岳曰く、「顯川遣の闘西子、面目なし、休し去らば好し。」戒、暮年に其の徒を弃て、來つて高安に游ぶ。㋩洞山寶禪師は、其の法嗣なり。寶、名を好み、之を賣つて禮を爲さず。㋥大愚に至る、未だ幾くならざるに、拄杖を僧堂前に倚せ、談笑して化す。五祖、人を遣はし來つて、骨石を取り歸つて塔す。

㋭潙山の大圓禪師曰く、「道人の心は、質直無僞なり、背無く面無く、詐妄の心無し。一切時中視聽尋常にして、更に委曲無し。亦眼を閉ぢ、耳を塞がず、但だ情物に附するなくして卽ち得。從上の諸

㋑止觀。止觀觀法にて、座禪も亦、止觀の一なり。
㋺盤山積。寶積禪師也。

㋩洞山自寶。五祖戒に嗣ぐ、雲門三世。
㋥大愚。守芝、無德の會下。
㋭潙山大圓。百丈大智に嗣ぐ。

聖、唯だ是れ濁邪の過患を說く。如許多の惡覺、情見、想習の事なきが若く、譬へば秋水の澄淨清淨にして無爲淡佇、無礙なるが如し、喚んで道人と作す。亦無事の人となづく。或もの問ふ、『頓悟の人更に修することを用ふるや否や。』曰く、『若し眞實に悟得する底は、他自ら時節を知る、修すると修せざると、是れ兩頭の語なり。今緣に從つて一念頓に自理を悟ることを得と雖も、猶ほ無始の習氣あり。未だ頓に淨むること能はず、須らく渠をして現業の流識を淨除せしむべし。卽ちこれ修するなり。別に一法の渠をして修行趣向せしむるあるべからず。聞より理に入り、理の深妙を聞いて、心自ら明にして ㋕ 惑地に居せず、縱ひ百千の妙義あるも、抑揚時に當る。此乃ち得坐披衣、自ら活計を作すことを解することを始めて得、要を以て之を言はゞ、則ち實際理地、一塵を受けず、萬行門中、一法を捨てず。若し也單刀入せば、則ち凡聖情盡き眞常を體露す。理事不二にして、卽ち如如佛なり。今時の學者、常に佛性本來具足、何ぞ復た修することを須ひんと疑ふ。設し修行せずんば、聖を證するに緣なし。情向背に隨ひ、終に斷常に落つ。三世の如來、十方の菩薩、所有の修習、皆自ら覺性に隨順することを知らざる而已。」則ち大潙の所謂、修と不修とは是れ兩頭の語、亦宜ならずや。

法眼禪師の子に、㋖ 慧明道人といふものあり、知見甚だ高し、諸方を下視す。初め大梅山に菴す、禪者あり、來りて游ぶ。明問うて曰く、「近離何れの處ぞ。」對へて曰く、「城都。」曰く、「上座城都を離れて、此の山に到る、則ち城都に上座を少き、此の山には上座を剩す。剩せば心外に法あり、少くれば心法周からず。道理を說得せば卽ち住し、會せずんば卽ち去れ。」禪者、能く對ふることなし。又遷つて天台山に止まる。彥明道人といふものあり、俊辨自ら負んで來りて師に謁す。師問うて曰く、「從上の先德悟る者ありや。」對へて曰く、「之あり。」曰く、「一人、眞を發し源に歸る、十方虛空、悉く皆消殞せん。」手を擧げて指して曰く、「只今天台山凝然たり、如何んか消殞し去ることを得ん。」明、目を張り直に視て遯れ去る。又諸老宿に問うて曰く、「雪峰の塔の銘に曰く、『夫れ緣よりして有るものは、始終にして成壞す、緣より有るに非ざる者は、歷劫も長く堅し。堅と壞と卽ち且つ止む。』雪峰只今什麼の處にか在る。」予謂ふに禪宗は、大機大用を貴ぶ、知解を貴ばず、雲菴、每に曰く、「汝が輩皆有ることを知る、只これ用ふること得ず。」慧明道人の如きは、善く用ふる者と謂つべし。

予、傳燈錄を讀むに、老安の子所謂破竈墮といふもの、深く無生を證するを愛す。恨むらくは、之と同時に生せざることを。㋗ 紹聖中に、再び廬山に游び、其の畫像を見て、爲に贊を作つて曰く、『嵩山屋老。竈有レ神。民爭祠レ之。日宰烹。師與二門人一偶經行。卽而視レ之因嘆驚。此唯土瓦和合成。是中何從有二聖靈一。以レ杖敲レ之輒墮傾。須臾青衣出笑迎。謝三師爲レ我談二無生一。言訖登レ空如レ鳥輕。門人問レ之。拜投レ誠伏レ地。但聞二破墮聲一。君看一體惰非惰。皎如二朗月一懸二青冥一。未二證據一者以レ事明。

㋕ 惑地。修行のたらぬ境界。
㋖ 慧明。報恩に住す、法眼に嗣く。
㋗ 紹聖。宋の哲宗皇帝在位中の年號。

鞭レ草血流石吼升。涅槃門開見ニ戸底一。老安憐レ兒。爲作レ名。金屑雖レ貴翳ニ眼睛一。」と。

金華の㋺懷志上座、性㋻夷粹にして經論に㋼飽く、東吳の學者之に尊び事ふ。嘗て客に對して曰く、「吾れ天台㋽賢首唯識の三宗の義を會して、之を折中して一書を爲し、以て影迹の譚を塞がんと欲す。」適禪者あり、坐末に居して曰く、「賢首宗の祖師誰とか謂ふ。」志曰く、㋾「杜順和尚。」禪者の曰く、「順に法身の頌あり曰く、『懷州牛喫レ禾。益州馬腹脹。天下覓レ醫人。灸ニ猪左膊上一。』此の義天台唯識二宗の、何の義にか歸合する耶。」志對ふること能はず。禪者の曰く、「何ぞ游方し去らざる。」志是に於て、㋿講を罷めて南詢して㋷洞山に至る、時に雲菴和尚焉に在り、之に從つて游ぶこと甚だ久し。去つて湘上に游ぶ、石頭の雲溪に菴すること二十餘年、氣韻閑淡にして、過客之に謁するに、多く言はず、侍者之に問ふ。答へて曰く、「彼は㋾朝の貴人、多知多語なり、我れは粥㋿飯僧。」之を見て自然口吻遲鈍し去る。僧問ふ、「住山何んの趣味かある。」答へて曰く、「山中住、獨り柴門を掩ふ別趣なし、三箇柴頭品字に煨く、毫を援くことを用ひざれども、文彩露はる。」又曰く、「萬機俱に罷んで㋼癡憨に付す、蹤迹常に容す野鹿の參ずることを、麻衣を脫せず拳を枕と作す、幾く生の夢か綠羅の菴に在る。」年六十二にして、江南に歸つて、故人照禪師に依る

㋺懷志。眞淨文に嗣ぐ、黃龍南の三世。
㋻夷粹。質實純粹なること。
㋼飽。十分研究しつくす。
㋽賢首。華嚴。宗の祖師。
㋾杜順。華嚴宗の高僧。
㋿講。經文を講釋する教家。
㋷洞山。雲菴禪師住山の寺。
㋾朝。朝廷の貴官。
㋿飯。飯の俗字。
㋼癡憨。おろかばかもの。

ことを思ふ。照、龍安に住す、遂に徑に去る。予嘗て偈を作つて之に寄す、曰く、『看徧三湘㋾萬頃山江南歸去臥ニ龍安一。只將ニ一味無求法一。留ニ與叢林一作ニ樣看一。』又曰く、『閑中拋擲亦奇哉。句裏藏レ身活路開。生鐵心肝含笑面。不下虛參ニ見作家一來上。』

杭州、上天竺の辨才法師元淨は法華三昧を悟り、至行あり、天台敎を宏め、號して第一と稱す。東吳の講者之に宗向す。時に秀州に狂人あり、回頭と號す、㋻左道以て流俗を鼓す。宣言す、當に窣堵波を建て、吳人の㋸福田と爲すべしと、施者雲の如くに㋾委る。然も杭の境に入るを憚る、辨才欺くべからざるを以ての故なり、已むことを得ずして既に來る。先づ錢十萬を以て、上天竺に詣して僧に飯す。且つ使を遣はして問を通じて曰く、「今修造の錢若干を以て、願はくは一堂に供僧せん。」淨其の書に答へて曰く、「㋿道風遠來山川勝を增す、誨言まづ至る、喜慰量るべし。營建の淨檀を以て、飯僧の用と爲ることを承はる。竊に聞く、敎に明文あり、㋼手用を許さず、聖者既に明誨を遺す。知らず佛に白す、當に何の辭を以てすべき、報章を佇聞し、卽ち疏文を撰せしむ。」狂人大いに驚きて、其の徒に見ゆることを慚づ。然も淨の門弟子、亦且つ之を禮して、以て俗に化せよと勸む。淨、語を屬して曰く、「出家の兒は須らく眼を具して始めて得べし、彼れ誠に聖者ならば、吾れ敢て恭せざらんや、如し其れ誕妄なら

㋸萬頃。ひろひろとした山。
㋻左道。正道ならざる道をいふ。
㋸福田。幸福のどだいなり。
㋾委。委積、つもりつもる。
㋿道風。あなたの御きぶんは、とほさところまで光りますの意なり。
㋼手用。手は互の俗字、牙とまちがへぬようにすべし。

ば、知つて之に同す、是れ正念を失す。吾れ聞く聖者㋐他心通を具す、今夕當に爾が曹と虔んで請じて、明日に於て、此の山に就いて、十方の諸佛と同齋すべし。」即ち法の如く嚴敬して、跪いて疏の文を讀み之を焚く。明日衆を率ゐて出で迎ふ。所謂、狂人は竟に至らず、學者皆服す。

㋑汾陽の無德禪師、七十一員の善知識に見ゆ。前後八たび請すれども、皆出世せず、襄陽の㋒白馬寺に㋓燕居す。幷汾の道俗千餘人、其の居に詣して、說法を勸請す。既に宗風大いに振ふに至るも、迹闃を越えず、自ら院を出でざるの歌を爲りて、以て志を見はす。北地苦寒、因つて夜參を罷む。忽ちに梵僧の雲に乘じて至るあり、說かざる所以の意を問ふ。師、衆僧夜立すべからざるを以て、詞と爲す。梵僧の曰く、「時失ふべからず、此の衆多からずと雖も、然も中に六人あり、異日大宗師と爲り、道人天に㋔膝ふ。大慈を開きて法施を爲すべし。㋕惱むべからず。」と言卒つて沒す。師明日上堂に曰く、「胡僧金錫の光、法の爲に汾陽に到る、六人大器を成す、爲めに敷揚することを勸請す。」時に㋖大愚芝、㋗石霜圓、㋘鄧珊覺、㋙法華舉の諸公咸く會下に在り。

㋚永嘉禪師偈に曰く、『若以知知寂此非無緣知。如手執如意非無如意手。若以自知知亦非無緣知。如手自捉拳非是不拳手。亦不知知寂亦不自知知。不可爲無知以性了然故。不同於木石如手不執物。亦不自作拳不可爲無手。以手安然故。不同於兎角。』

㋛智覺禪師の曰く、「斯れ禪宗の妙たるが故に、今之を用ひて復少しく異なり。彼れ但無緣の眞智を顯はし、以て眞の道と爲すを以て、若し拳はゞ但本心を顯はして、妄心に隨はず。未だ智慧の心原を照了することあらず、故に須らく能所平等にして、等しく照を失はざるを。無知の知と爲すべし、此れ知の空寂無生に於けることは、如來藏性、方に妙ある耳。智覺の意偈に言を兼ねて、悟を明さんと欲す。永嘉は止だ悟の後の病を說く。二老の言は皆是なり、然も天下の理、豈一言を以て盡すべけんや。永嘉の偈、必ず奪はずんば亦可なり。

㋜正宗記に、㋝三祖大師を評して曰く「尊者初め自ら其の姓族鄉邑を道はずと雖も、後の世に於ける、復三十餘載、豈口に絕つて略云はざらんや、此れ疑ふべし。」曰く、予、房が碑を視るに曰く、「㋞大師嘗て㋟道信に謂ふて云く、『人あり㋠借問せば、我が處に於て法を得と道ふことなかれ。』此れ尊者自ら絕つを明すの甚だしきなり。㋡至人物の迹を以て、大道の累と爲す、乃ち其の心を忘る。今正法の宗、猶ほ之を遺ることを欲す、況んや其の姓族鄉國俗間の事をや、肯へて以て意とせんや。」予讀んで此に至りて、明敎の所得の多きことを知

㋐他心通。六神通の一。
㋑汾陽。善昭首山に嗣ぐ、無德、太子院大中に住す。
㋒白馬寺。支那佛敎最初の寺、摩騰竺法蘭の古迹。
㋓燕居。安居に同じ、室居ともかく、閒居ともかく。
㋔膝。おほふ、蒙らしむの意。
㋕惱。悔と同じ。
㋖大愚守芝。瑞州興陽に住す。
㋗石霜楚圓。慈明と號す。
㋘鄧珊惠覺。潭州琅琊、廣照と號す。
㋙法華全舉。舒州法華に住す。
㋚永嘉。眞覺、六祖惠能に嗣ぐ。

㋛智覺禪師。名は永明。
㋜正宗記。明敎大師契嵩の撰。
㋝三祖。僧璨鑑智禪師、達磨三世。
㋞大師。三祖大師、即ち鑑智禪師を指す。
㋟道信。四祖大醫道信禪師、達磨の四世。
㋠借問。試に問ふこと。
㋡至人。聖者と同じ。

る。王文公、亦曰く、「古の有道の者は、功業の、以て其の懷を累すに足らざることあり、況んや身後の名をや。亮公の㊂西山に逃れ、㊃常公の大梅に庵し、歸宗の目を㊄眯はし、法正の名姓を言はざるが如き、是の諸老、皆能く其の所聞を踐む者なり、固に其の㊆化し去る數百年、凜々として尙ほ生氣あり。彼れ此に意なし、世爭でか此を以て、之を與せん。蓋し理固とに然り。」

㊅南禪師、㊇歸宗に住する時、化を遣はして虔上に至る、化人還つて白して曰く、「虔に信士劉君あり、行くに臨んで送りて郊外に至り、祝して曰く、『我が爲に、老師の偈一首を求めて、子孫世々の福田と爲さん』と。」明年に師偈を以て之に寄せて曰く、『虔上僧歸二廬岳寺一。首言二居士乞一㊈伽陀一。援レ毫示二汝箇中意一。近日秋林落葉多。』後四十年、㊉雲庵復た歸宗に住す、法席前日よりも盛んなり。劉君の子此の偈を持し來つて、僧に餙し其の事を叙ぶ。雲庵上堂偈あり、曰く、『先師昔住二金輪一日。有レ偈君家結二淨緣一。我住二金輪一還有レ偈。却應下留二與子孫一傳上。』と。

涅槃經の中に、「佛は大福德と爲す」と讃するを聞くことあり。怒つて曰く、「生れて七日を經て、母便ち命終、豈大福德の相と謂はんや。」讀者曰く、「年志俱に盛にして卒暴ならず、之を打てども顰らす、之を罵れども報せず、是の故に我れ大福德相と言ふ。」と、怒るもの聞いて、心に服する故に、慈を無盡の福德の相と爲す。故に沙門、世の福田を能くするもの、慈を以て身を修むる故なり。

㊂四山亮。馬祖に嗣ぐ、亮座主といふ。
㊃常公。大梅法常は馬祖に嗣ぐ。
㊄眯。音び目に物の入ること。
㊆化。遷化、死すること、僧家に用ふ。
㊇南。黃龍南禪師、石霜圓に嗣ぐ。
㊈歸宗。廬山にある寺の名。
㊉伽陀。偈と同じ、梵語。
㊊雲庵。眞淨克文を指す。

永明和尙の曰く、「此の重玄門名言路絕ゆ、隨智の演ぶる所、以て見聞を廣む。唯證して方に知る、情の解する所に非ず、若し親しく證する時は、悉く是れ現量の境にして、處々法界に入り、念々㊋遮那の境に當つて、時に還つて滯礙を成す、差別の問處に遇ふ、皆是れ疑情なり。」㊌鹽官の安禪師の如き、華嚴を講する大師に問うて云く、「華嚴經、幾ばく種の法界ありや。」對へて曰く、「略して之を言へば、十種の法界あり、廣めて之を言へば、重々無量なり。」鹽官拂子を擧して云く、「是れ第幾重の法界ぞ。」大師㊍俛首して之に答へんと擬す。鹽官訶して曰く、「思ふて知り慮つて解せば、是れ鬼家の活計、日下孤燈、果然として照を失す出で去れ。」予華嚴宗に聞くに曰く、「㊎勝熱婆羅門の、火聚刀山は、是れ般若の無分別智なり。」彼の義を疏する者、葉公が龍を畫くに、眞龍忽ち見ゆれば、筆を投じて怖走するが如し。

㊋洞山圓禪師、雪竇に嗣ぐ、年甚だ少し。開先の㊏遐道者之を擧げて、以て筠人の請に應せしむ。時に㊐南禪師、黃檗に住す。因つて邑を出でゝ、淨戒寺に相見す、南公、默して言ふ所なし。但香を

㊋遮那。吡盧舍那の略、大日と譯す。
㊌鹽官齊安。馬祖に嗣ぐ。
㊍俛首。くびをたれて。
㊎勝熱婆羅門。耐熱苦行の外道也。
㊋洞山悟圓。筠州洞山に住す、宗派圓には遐道に嗣ぐとあり。
㊏遐道者。開先善遐道者、德山道に嗣ぐ、雲門の三世。
㊐南禪師。黃龍慧南を云ふ。

焚いて相向ひ危坐する而已。申時より三鼓に至る、圓公、卽ち起つて曰く、「夜深けぬ、和尙の㋒偃息を妨ぐ。」趍り出で、明日各山に還る。南公、偶々㋓永首座に問ふ、「汝廬山に在つて、今の洞山老を識るや否や。」永曰く、「識らず、止其の名を聞く。」久しうして進んで曰く、「和尙此の回之を見る、如何なる人ぞ。」南公の曰く、「奇人なり。」永退いて侍者に問ふ、「汝和尙に隨つて洞山を見る、夜語して何事にか及ぶ。」侍者實を以て告ぐ。永笑つて曰く、「天下の人を疑殺す。」と、

㊂誌公和尙の十二時の歌、大いに佛祖の要妙を明す。然も年代寢遠くして、㋔昧者多く其の語を改め易へて、以て其の私に循ふ。其れ大いに意を害する者なり。夜半は子、心無生に住するも、卽ち生死の心法、何ぞ曾て有無に屬せん、用ひる時は便ち用ひよ、文字を沒すと曰ふが如き、乃ち生死何んぞ曾て有無に屬せん。言は則ち工なり、然れども下の句、血脈貫かず。既に生死有無に屬せずと曰ふ、又用ひる時は便ち用ひよと曰ふ何んぞや。

予湘山の道林に在り、僧あり、予に謂ふて曰く、「吾れ初め六祖の風㊆幡の因緣を看ること久し、偶々首を仰いで㋐架に就いて衣を取るとき、方に其の旨を薟む。」予戲れて曰く、「目を擧げて風幡を見る時、節に非ずや。」僧之を首肯す。予曰く、「㋑祖師夜二僧の徵詰を聞いて、卽ち謂ふて曰く、「風幡の動くに非ず、仁者の心動く。」縱ひ其の目を暗中に張るも、二僧何を以てか之を識らん。」僧大いに慍つて去る。㋓

㋒偃息。よろふすこと。
㋓永首座。傳記未考
㊂誌公。梁の寶誌和尙、武帝のときの人。
㋔昧者。愚迷のもの。
㊆幡。剎幡、てらに立てるはた。
㋐架。たな。
㋑祖師。六祖をさす。
㋓無盡居士。性は張名は商英、天覺と號す、宋の名臣。

無盡居士、嘗て予の爲に言ふ、頃ごろ京師に慧林の一僧、禪を談じて諸方に背はざるを見る、吾れ問ふ㊇蜆子の祖師西來意に答へて、乃ち「神前の酒臺盤と曰ふ意旨如何。」其の僧目を張つて直に視て曰く、「神前の酒臺盤。」無盡之に戲れて曰く、「廟中是の夕、燈あるときは則ち已まん、然からずんば、蜆子の佛法遂に虛施と爲す。」と。

㋖靈源禪師予に謂ふて曰く、「吾れ嘗て龍舒に在りて、龍門の顯道人の課言を逃るゝ者あることなし。意必ず道ふことあらん。」顯の曰く、「但所見あを發するを見る。能く其のらば、卽ち道ふ微思惟に入り、卽ち靈あらず。」予が故人、耶溪鄭の正臣、能く㋙五行を言ふ、其の精妙世に一二を以て數ふ。亦嘗て予に告ぐるに此の意を以てす、彼の術の至れるもの、且爾り、況や此れより大いなるもの有りて、思慮を以て求むるを欲する乎。

㋗鄧峯の永庵主、嘗て僧瀋奇に問ふ、「汝久しく見ず、何んの爲す所ぞ。」奇曰く、「近ごろ偉藏主に見ゆ、箇の安樂の處あり。」永の曰く、「試に我れに擧似せよ。」奇因つて其の所得を叙ぶ。永曰く、「汝は是、偉は未だ是ならず。」奇測るゝことなうして、歸つて偉に語る。偉大いに笑つて曰く、「汝は非、永は非ならず。」奇走りて、積翠の南禪師に質す、南公亦大いに笑ふ。永之を聞いて偈を作つて曰く、「明暗相參殺活機。大人境界普賢知。同條生不二同條死。笑倒庵中老古錐。」と其の語言を觀るに、當

㊇蜆子。洞山价の法嗣。事跡頗る異り、日々江畔出に出で、蜆を採へ食し、夜は東山白馬廟に宿る、世人蜆子といふ。
㋖靈源。惟清、黃龍心に嗣法す。
㋙五行。木、火、土、金、水。
㋗鄧峯永。傳未詳。

時の法喜、游戯の逸韻を想見するに、永公をして今に施さしむ。則ち其の詬辱を取ること必せり。

臨済大師、臨終付法の偈に曰く、「泝レ流不レ止問二如何一。眞照無邊説二似他一。離レ相離レ名如不レ稟。吹毛用了急須レ磨。」傳ふるもの急に還つて磨すと作す。㋐曹山和尚、枯木龍吟髑髏無識の語を釋して、偈を作つて曰く、「枯木龍吟方見道。髑髏無レ識眼方明。喜識盡時消息盡。當人那辨濁中清。」而も傳ふるもの消不盡と作す。二宗の兩偈、甚だ微にして、一び其の旨を失すれば、則ち害を爲すこと甚だ大いなり、故に辨せざるべからず。言ふ所用ひ了つて、急に須からく磨すべし。者は船子の曰く、「直に須からく身を藏す處、蹤跡を沒すべし。沒蹤跡の處、身を藏すことなし、」と是れなり。喜識盡る時、消息盡く、當人那ぞ、濁中の清を辨せんとは、㋑達觀の所謂、「偏正手に縱横㋒超然として十成を忌む。龍門須らく透ることを要すべし、鳥道行くに堪へず、石女霜中に織る。泥牛火裏に耕す、兩頭如し脫得せば、枯木一枝榮ゆ」といふ、是れなり。無盡居士、嘗て予に問うて曰く、「㋓悟本大師、五位君臣の偈を作る、其の正中來に曰く、『但能莫レ觸二當今諱一。也勝二知朝斷舌才一。』先德の意、妙挾を明すと雖も、然も知朝斷舌必らず本據有つて言ふか、前古斷舌の事なし、矧んや又知朝と曰ふ尤も謂れなし、將に後世傳錄の誤に非ず耶。」予曰く、「舊本に曰く、『也勝二前朝斷舌才一』と。意は隋の賀若弼が父敦、宇文護が爲に忌害せらるゝことを用ふ。刑に臨みて之を戒めて曰く、『吾れ舌を以て死す。』若弼が舌を引いて、錐を以て之を刺し、血を出して口を慎しましむ。隋は唐の前に興る。前朝刺舌、知朝に非ざること明けし、然るに斷舌刺舌、意は則ち同じき耳。」無盡予に屬して之を紀せしむ。

㋐曹山。名は本寂、洞山に嗣ぐ、悟本大師といふ、支那曹洞宗の元祖。
㋑達觀。頴。名は曇頴、杭州饅頭の人。
㋒超然。はるかなり。
㋓悟本大師。前の㋐を見よ。

道圓禪師、南雄州の人、性純至、少うして游方す、飽參と雖も、未だ大いに通透せず。南禪師㋔黃檗の積翠庵に居ると聞き、往いて之に依る。一日下板に燕坐す、兩僧の百丈野狐の因緣を擧するを聞く。一僧の曰く、「只不昧因果の如きは、也未だ野狐身を脫得せず。」一僧聲に應じて曰く、「便ち是ならば、因果に落ちず、亦何ぞ曾て野狐身に墮ちんや。」圓㋕悚然として其の語を異とす、自ら其の身の起つを覺えず、行いて庵頭に上らんことを意ふ。澗を過ぎて忽ちに大悟す。南公に見えて、其の事を叙ぶること、未だ終らざるに涕願に㋖交ぶ。南公、侍者の榻に就いて熟寐せしむ。忽ち起きて偈を作りて曰く、『不落不昧。僧俗本無二忌諱一。丈夫氣宇如レ王。爭受二囊藏被蓋一。一條㋗柳樑任二縱横一。野狐跳入金毛隊。』南公大いに笑ふ。久しうして又風幡の偈を作つて曰く、「不二是風一分不二是幡一。白雲依レ舊覆二青山一。年來老大渾無レ力。偷二得忙中些子閑一。」予昔、雲庵の大〻に之を稱賞して、其の機鋒、㋘英邵武に減せずと謂ふを聞く。雲庵化し去る、偶々故書を檢するに、其の手づから此の二書を疏するを見る。意傳へんと欲して、而も

㋔黃檗。臨濟和尚の師なり。
㋕悚然。ぞつとして、又はあつけにとられる。
㋖交。およぶ、つたふこと。
㋗柳樑。杖。
㋘英邵武。洪澤洪英、姓は陳、邵武軍の人、黃龍南に嗣ぐ。

未だ果さゞるものゝ若し、是に於て之を錄す。或は聞く、聞公は大庾の雪峰寺に住す。

皓月供奉、長沙岑禪師に問うて曰く、「㊀永嘉の云く、『了すれば、即ち業障本來空、未だ了せざれば應に須からく㋐夙債を償ふべし。』只㋑師子尊者㋒二祖大師の如きは、什麼としてか、亦夙債を償ふ。」長沙曰く、「㋓大德本來空を識らず。」曰く、「如何なるか是れ本來空。」長沙の曰く、「業障是。」又問うて曰く、「如何なるか是れ業障。」長沙の曰く、「本來空是。」乃ち偈あり、曰く、「假有元非有。假滅亦非無。涅槃償債義。一性更無殊。」㊁龍勝の㋔中觀論に曰く、「業は緣より生せず、非緣より生せず。是の故に則ち能く業より起る者有ること無し。業なく作者なく、何んぞ業の果を生ずること有らん、若し其れ果あること無くんば、何んぞ業を受くる者有らん。」問うて曰く、「汝種々に業果報及び業を起す者を破し、現に衆生の業を作し、果報を受くるを見る、是の事云何。」答へて曰く、「世尊の神通の如きは、變化人の作す所なり、是くの如き變化人、復變化人を作す、初の變化人の如し、是を名けて作者と爲す。變化人の作す所、是を則ち名けて業と爲す。諸の煩惱及び業、皆幻と夢との如し、亦炎と響との如し。龍勝の意を以て、長沙の言を會して、無作の妙旨に達せば、此の世界に游ぶこと、夢中に㊂了了として、辭裏に㊃惺々たるが如くならん。」

㊀永嘉。記道歌を作る、了すれば云々はその一句也。
㋐夙債。前生にてつくりしつみとが。
㋑師子。印度の人、禪宗第二十三祖にして、鶴勒那夜闍に嗣法す。
㋒二祖。惠可大師、達磨に嗣ぐ。
㋓大德。尊敬して皓月をさす。
㋔龍勝。龍樹菩薩のこと、印度の人。
㋕中觀論。三論の中。
㋖了了。さかしきこと。
㋗惺惺。心さときこと。

汾州の㊄無德禪師、徒に示すに、多く洞山の五位、臨濟の三玄を談ず。廣智の歌を作つて、㊅十五家の宗風を明すに至る。豈後進の參尋を惰つて、少を得て足れりと爲るを視て、之を警しむるに徧參を以てするに非ずや。今の知識に問ふもの有らば、則ち答へて曰く、「吾が家自ら本分の事あり、彼れ皆古人の一期、建立の門庭言語のみ、何んぞ究むるに足らんや。」と正に字を識らざるものあり、卷を執りて㊆屋愚子に問へば、屋愚の「此れ墨紙に塡てる耳。安んぞ我に問ふことを用ひんや」と曰ふが如し、三尺の童子も、笑はざるは莫し。昔僧あり、雪峰和尚に問ふ、「㊇臨濟に四喝あり、意旨如何。」雪峰の曰く、「我れ初め發足便ち㊈河北に往く、意はざりき、中途、大師化し去る、因つて之に見ゆるに及ばず、他家の宗旨、我れ未だ知ざる所なり、汝彼の兒孫を尋ねて、之に問へ。」僧以て㋐南院に問ふ。且つ雪峰嘗て之を遣はすの意を言る、南院雪峰を望んで再拜して曰く、「和尚は眞の善知識なり。嗚呼、今㋑譊々として人に語つて、屋愚子の如くなる者、雪峰の用處を聞かば、面熱し汗下らざるべけん耶。」と。

㋒雲峰悅禪師、僧の籠を荷ふて至るを見て、則ち曰く、「未だし、更に三十年して、定んで馬に乘つて行脚せん。」㋓法雲の秀禪師、包腰して至るものを聞いて、色顏面を動かす、彼れ心を叢林に存する

㊄無德。汾陽善昭禪師を指す。
㊅十五家。五家七宗等の禪宗十五流。
㊆屋愚子。俗言、馬鹿者の意。
㊇臨濟。四喝四通りの喝の用。
㊈河北。地名。
㋐南院。名は慧顒。
㋑譊々。あらそふ、いかりよぶこゑに形容する。
㋒雲峰。文悅。南岳、大愚芝に嗣ぐ、汾陽三世。
㋓法雲。秀。圓通、天衣懷に嗣ぐ。

こと、豈㊀淺淺ならん哉。今少年㊁苾蒭、其の畫像を見て、則ち指して曰く、「這の通方の漢ならず、也死耶。」

㊂首楞嚴經に曰く、「一切の世間、生死相續す。生は順習に從ひ、死は流變に從ふ、臨命終の時、未だ煖觸を捨てず、一生善惡倶に時に頓に現ず。」古の釋此に至つて多く之を略す、滋以て恨と爲す、寶積經を讀むに及んで、此を釋するに意あり。今其の下に系けて曰く、「善惡の業は自らの作る所、時に一生の中、何ぞ自ら見ざる。捨壽の時に至つて、方に始めて頓に現ずる者、人生夢の如し、方に夢を作す時、豈能く自ら是れ夢、夢に非ずと知らんや。要は須らく覺時夢中の事、了然として自ら現ずべし、尋繹を待たず、亦復是くの如しと。」

福嚴の感禪師、一面目嚴冷、㊃孤硬叢林に秀出す。時に之を感の鐵面と謂ふ。衆僧に江州の㊄承天に首たり。時に㊅佛印の元禪師、將に遷つて㊆新州の斗方に居り、郡守に譽あり。之を嗣續せしめんと欲す、且つ感を召して、其の事を語る。感の曰く、「某念此に至らず、和尚終に推し出して、衆の爲に㊇粥飯して、主人と共に叢席を成さんと欲す、敢て德を忘れず。然若らず法を嗣がしめば、則ち某自ら師あり。」佛印、心に之を服す。業已に之を言ふ。因つて成就して、復た易へず、遂に法を開いて、黃龍の子と爲る、道

㊀淺淺。水の疾くながるるにたとふ。
㊁苾蒭。梵語、譯して僧、又は比丘とも云ふ、元と草の名。
㊂首楞嚴經。十卷。
㊃孤硬。ひとりかたいぢな。
㊄鐵面。感師の硬孤、鐵に比せる也。
㊅承天。寺名。
㊆佛印元。靈居に住す、開先に嗣ぐ。
㊇糜。音ミ。
㊈粥飯。大衆にごちそうする。

價一時に重し。居常包を懸け、杖を方丈に倚る、宿夕の計を爲さず、郡將已下皆之を信敬す。太守あり、其の姓名を忘る、新に車を下り、事を以て之に臨む。感笑つて偈を作り、㊉郡庭に投じ、揖せずして去る。偶に曰く、「院是大宋國裏院。州是大宋國裏州。州中有レ院不レ容レ住。何妨一鉢五湖游。」と太守人をして之を追はしむるに、已に江を渡り去る。

餘杭の㊋政禪師、㊌止山㊍標致最も高し。時に蔣侍郎、錢塘に守たり、師と方外の友たり、師每に來り之に謁す。則ち一の黃牛に跨り、軍持を以て、角上に掛く、市人爭ふて之を觀る、師自若たり。郡庭に至りて、始めて牛を下つて笑語、終日にして去る。一日蔣公、師を留めて曰く、「適々過客あり、明日府中に當に會あるべし、吾が師固に飲まず、能く我が爲に少しく留まること一日せよ、因つて清話せんと欲す。」師之を諾す、蔣公喜ぶこと甚だし。明日人をして之を要せしむ。一偈を留めて去る、曰く、「昨日曾將今日期。出レ門倚レ杖又思惟。爲レ僧只合レ居二巖谷一。國士筵中甚不レ宜。」と坐客皆其の㊎高韻を仰ぐ。又山中の偈を作つて曰く、「橋上山萬層。橋下水千里。唯有二白鷺鷥一。見レ我常來レ此。」冬爐を擁せず、荻花を以て毬を作り、足を中に納る。客至れば之を共にして、清論窮りなし、秀氣人に逼る。秋夏好んで月を翫ぶ。膝を大盆の中に㊏盤し、池上に浮べ、自ら其の盆を㊐旋し、吟笑して旦に達す、率ね以て常と爲す。㊑九

㊉郡庭。郡のやくしよ。
㊋政。百丈惟政禪師、慈明に嗣ぐ。
㊌住山。住持する風彩。
㊍標致。道德の高さことを云ふ。
㊎高韻。けだかきやうす。
㊏盤。わだかまること、さかぶれのこと。
㊐旋。かへす、あちらこちらと

峰鑑韶禪師、嘗て門下に客たり、韶、㋐担率㋑垢汗にして、事を事とせず、毎に竊かに之を笑ふ。一夕將に臥せんとす、師人をして韶を呼ばしむ、已むことを得ずして、㋒顰頻して至る。師の曰く、「好月㋓勞生、㋔擾々たり、能く幾人か之と對するに暇あるか。」韶唯々す。已にして㋕行者を呼んで熟炙せしむ。韶方に飢ゑて、㋖藥石を作すと意へり、久しうして乃ち橘皮湯一盃のみ。

㋗靈源禪師、予の爲に曰く、「居士あり、吳敦夫といふ、才敏鋭にして、學道に意あり、自己多く㋘知識に見ゆ、心地明淨なり。偶々㋙鄧隱峰の傳を閱するに、其の倒に卓つて化し去つて、而も衣亦身に順じて褪せずといふを見て、竊かに之を疑ふて曰く、『彼れ化の異なること固に測ること莫うして、衣亦之に隨ふは何んぞや。』以て晦堂老人に問ふ、晦堂の曰く、『汝今衣順じて地に垂る、復之を疑ふ乎。』曰く、『疑ふ所なし。』晦堂笑つて曰く、『此れ既に疑ひ無ければ、則ち彼れ倒に化す、衣亦體に順ず、何んの之を疑ふこと有らん哉。』敦夫言下に了解す。」故に其の一時、應機の辨、雷の如く霆の如く、昏蟄を開警するもの多し。

㋐九峰。潙潭澄に嗣ぐ、雲門三世。
㋑担率。ひろくさっぱりしたる、むとんぢやくのこと。
㋒垢汗。あかやあせでもかまはぬ。
㋓顰頻。かほをしかめて。
㋔勞生。ごくらう、莊子大宗師に出づ。
㋕擾擾。みだる。
㋖行者。僧院に居る俗人。
㋗藥石。禪寺に夕食を「やくせき」と云ふ。
㋘靈源。名は惟清、黄龍死心に嗣ぐ。
㋙知識。禪宗の宗師たち。
㋚鄧隱峰。馬祖に嗣ぐ、五臺に住す、唐代の名僧。

舟のやうにひつくりかへす。

㋛金剛經に曰く、「爾時慧命㋜須菩提、佛に白して言さく、『世尊、頗る衆生あり、未來世に於て、是の法を說くを聞いて、信心を生ずるや不や。』佛の言はく、『須菩提、彼れ衆生に非ず、衆生に不ざるに非ず。』何を以ての故に、須菩提、衆生の衆生といふは、如來、衆生に非ずと說く、是を衆生と名づく。」此の義深渺にして、從上の聖賢、語秘に旨妙にして、學者、多く聽瑩して、佛意卒かに明めず。獨り定林老人のみ、解して曰く、「慧命を以て、衆生を觀ること、第五大の如く、第六陰の如く、第七情の如く、孰れを衆生と爲す。衆生を以て、衆生を觀る、然して後、安りに其の有たることを見ば、則ち衆生は、慧命者の衆生に非ず、是れ衆生の衆生而已。衆生の衆生は卽ち衆生に非ず。然るに是れ乃ち所謂衆生なり。則ち是の法を說くを聞き、苟くも能く本性相を悟らば、何爲ぞ、信心を生せざらん、慧命を以て、衆生を觀ば、其の有と爲すを見ず、則ち云何か衆生を度せんや。」曰く、「衆生に衆生ありて、而も衆生有に非ず、慧命、衆生無うして而も衆生、無に非ず、是の義を以ての故に、衆生を度す。」

㋝大智禪師の曰く、「㋞此の事は、是れ一切の名目にあらず、何を以てか、實語を以て答へざるや。」曰く、「若爲ぞ、虛空を雕琢し得て、佛の相貌と爲す、若爲ぞ說いて、虛空は是れ青黃赤白と道ふ、㋟維摩に云ふが如し、法は比あることなし、喩ふべき無きが故に、法身無爲にして、諸數に墮せず。」

㋛金剛經。大般若の中五百七十五卷目。
㋜須菩提。佛弟子、解空第一。
㋝大智禪師。百丈大智。
㋞此の事。禪宗の悟。

と、故に曰く、「聖體名なし、說くべからず、實理空門の淒り難きが如し、喩へば太末蟲の處處に、能く泊まる、唯火焰の上に泊まる能はざるが如し。衆生も亦爾り、處處に能く緣ずれども、般若の上に緣ずる能はず、每に學者を見るに、多く誤つて、其の意を領ず、衆生般若に於て、參求すること能はずと謂ふ耳、非なり、此の法は情識の到る所に非ず。」故に ㋜三祖大師の曰く、「非思量の處、識情測り難し。」と

青龍の道氤法師、金剛般若經に於て、深く妙旨に達す。嘗て疏を造る、此の經を疏して、精博淵微、法の體相を窮む。諸師能く其の ㋝藩垣を望むこと莫し。唐の明皇、亦意を經の義に留む、自ら之を注釋す。「是人先世罪業應墮惡道以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅」といふ處に至つて、自ら其の義を決する能はず、以て氤に問ふ。氤對へて曰く、「佛力法力は三賢十聖も亦測ること能はず。陛下、曩般若に於て聞薫一なら ㋛三藏十聖も亦測ること能はず。」明皇是に於て、筆を下して休まず、更に注想に沈んで、自ら現行を發す。」

天縱神悟の辨、一期の應答、滯惑を言下に掃ふて、般若を現前に揭ぐ。豈意思義解の日を同じうして語るべけんや。

㋟雲門大師、有る時僧を顧視して曰く、「㋠鑒。」僧之に對へんと擬す、則ち曰く、㋡「咦。」後學其の語を錄して偈を爲りて、顧鑒の頌と曰ふ。德山

㋐維摩。印度の長者、維摩經十卷あり。
㋛三藏。僧璩鑒智、達磨三世。
㋝藩垣。さかひがき。
㋞天縱。天賦の伶悧なることにして、縱は、ゆるす也。
㋟雲門大師。雪峰、眞覺義存に嗣ぐ、匡眞文偃。
㋠鑒。顧鑒咦の三語の一、禪宗にても雲門一流の警策に用ひる。

の ㋡圓明禪師は雲門の高弟なり、顧の字を刪り去つて、之を ㋢抽顧の頌と謂ふ。因つて偈を作つて之を通ず、又之を擡箭商量と謂ふ。偈に曰く、「相見不レ揚レ眉。君東我亦西。紅霞穿二碧海一。白日透二須彌一。」雲庵亦偈あり、曰く、「雲門抽顧自有二來由一。一點不レ到、休休休休。」今の禪者、多く之を ㋣漫汗す。其の意旨を問ふに則ち往往に、㋤瞠目怒り視て曰く、「此れは是れ道眼の因緣なりと亦 ㋥悞らずや。又其の室中語に曰く、「盡大地是れ法身、枉げて箇の佛法の知見を作す、如今拄杖を見て、但喚んで拄杖と作す、屋を見て但喚んで屋と作す」と。校證する者之を易へて曰く、「枉げて箇の佛法中の見を作す。」又曰く、「小より一頭の ㋦水牯牛を養ふ、溪西に向つて放たんと擬す、他の國王の水草を食むことを免れず、如かず處に隨つて、些子を納る、他惣べて妨げず。」今の本には乃ち曰く、「他惣べて見ず」と。此くの如きの類、甚だ衆し。然るに此の二字、細事と雖も、其れ先德の妙旨を失す、傷まずと爲や、當に知者あるべき耳。

英邵武、臨終に安坐して、門弟子の爲に、出家行脚の因を說き竟つて、乃ち曰く、「吾れ卽ち化せば、骨石を ㋧普會塔に藏むべし。吾れ生平大海衆と居す、死して之と離るゝことを忍びず、他あるに非ず、古の聖賢、叢林に因つて以て、情見を折伏し、道果を成辨せざるは莫し。今時の衲子、德薄く垢

㋡圓明。明州德山の緣密、雲門に嗣ぐ。
㋢抽顧。顧の字をぬくと云ふこと。
㋣漫汗。人を馬鹿にすること、蔑視すること。
㋤瞠目。目をみはる。
㋥悞。誤と同じ。
㋦水牯牛。めうし。
㋧普會塔。修行の雲水の亡僧の塔と同一の石塔にといふ事、普く會まるの意なり。
㋨咦。喝、咄等と同樣に用ふ。

重く、志願衰劣にして、多く厭退を生ず、是れ大いに憫笑すべきなり。」師既に化す、衆終に忍びず、已むことを得ずして、水中に投ず、故に泐潭に今復、英禪師の塔あることなし。

㊇舜老夫、天資英特にして、叢林に飽く。初め棲賢より移つて雲居に居る。牒を授け㊁陞座、衆に白して杖を曳いて去る。暮年に身を以て、衆を律して尤も謹嚴なり。嘗て少しく不安なれば、卽ち維那に白して、㊈涅槃堂に下る、病愈ゆれば、卽ち方丈に入る。惜むらくは其の㊉傷慈なることを、開示する所有れば、但曰ふ「本自ら無事、我れに從つて何をか求めん。」と南禪師、時に已に積翠に居る、之を聞いて侍者に謂ふて曰く、「老夫㊋耄せり、何んぞ有事を無事ならしめ、無事を有事ならしめざる、是れを淨佛國土成就衆生と謂ふ。」と。

三祖大師、信心銘を作りて曰く、「至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。洞然明白。毫釐有レ差。天地懸隔。」と。故に知る古の得道の者、一切舊に仍らずといふこと莫し。僧あり、㊌永明和尚に問ふ、「衆生と佛と既に同體と曰ふ、何故に苦樂殊なることある。」答へて曰く、「諸佛は法性に悟達して皆自心の原を了ず、妄想生ぜず、正念を失はず、我所の心滅す、故に生死を受けず、卽ち究竟して、常に寂滅、寂滅を以ての故に、乃ち樂み自ら歸す。一切衆生は、眞性に迷ふて、本心に達せず、種々の妄想を以て、正念を得ず、故に

㊈舜老夫。雲居老夫曉舜、洞山聰に嗣ぐ、雲門五世。
㊁陞座。大殿の說法する座にのぼる式。
㊈涅槃堂。病僧の入る寮なり、延壽堂とも云ふ。
㊉傷慈。慈悲すぎるを云ふ、慈悲にきずがつくことなり。
㊋耄。わするといふて、八十九十を云ふ、おいぼれといふこと。
㊌永明。智覺。

卽ち憎愛す。憎愛を以ての故に、心器破壞し、卽ち生死を受け、諸苦自ら現ず、法要を知らんと欲せば、心を守るを第一とす、若し一人も眞心を守らざれば、成佛を得ること、是の處り有ることなし。」

㊍悅禪師、妙年にして奇逸なり、氣諸方を壓す。雪竇に至る時、壯歲なり、之と辨論す、雪竇常に之に下る。茶を會する每に、必ず其の中に㊎特榻せしめ、以て之を尊異す。是に於て、悅首座の聲價、東吳に照映す。悅公出世するに及んで、道大いに光耀す。蘭上座といふ者あり、雪竇の法窟より來る。悅公之を㊏勸詰す、大いに驚き、且つ衆に譽あり、相從ふこと、年を彌りて後去る。前輩の後進を㊐推轂す。其の公なること此くの如し、初めより未だ嘗て雲門臨濟を以て、其の心を二つにせず、今は則ち然らず、始は名位を以て惑ひ、卒に宗黨を以て㊑膠す、固に里巷無知の俗の如し。古聖の道、復興らんことを求むるも、亦難からざらん哉。

舜老夫、初め洞山より、武昌に如いて、㊒行乞す。先づ一の居士の家に至る、居士高行あり、郡の爲に敬せらる、意に與奪する所、之に從はざるは莫し。故に諸方の乞士、至れば必ず之に謁す。舜老夫、方に年少うして、其の他參なることを知らず、頗る之を易る。居士の曰く、「老漢一問あり、上人語相奕はゝ則ち㊓疏を開き、如し契はずんば卽ち請せん。却りて新豐に還れ。」

㊍悅。雲峰。
㊎特榻。上座にいすたまうける。榻は椅子なり。
㊏勸詰。かんがへなじる、商量するなり。
㊐推轂。車のこしきをおす、人をおしすすむるを云ふ。
㊑膠。につちもさつちもゆかぬ、ゆうづうのつかぬこと。
㊒行乞。僧家の托鉢、こーうなり。
㊓疏。請待の文章、又は趣意をのべる文章。

と。問ふ、「古鏡已に磨する時如何。」對へて曰く、「天を照し地を照す。」「未だ磨せざる時如何。」曰く、「黑きこと漆の如し。」居士曰く、「却りて請ふ山に還れ。」舜卽ち馳せ歸つて、聰禪師に㋙擧似す。聰㋚代語を爲す、舜卽ち趍つて問うて曰く、「古鏡未だ磨せざる時如何。」聰曰く、「此漢陽を去ること遠からず」、「磨して後如何。」曰く「黃鶴樓前鸚鵡洲。」舜言下に於て大悟す。聰公機鋒觸るゝべからず、眞の雲門の孫なり。嘗て自ら松を植ゑて、口に金剛經を誦すること、輟ます、今洞山の北嶺を、金剛嶺と號す、松皆天に參す、乃ち師手づから植ゆるなり。筠の守㋛許公式、詩を以て贈つて曰く、「語言全不レ滯。高躡二祖師蹤一。夜坐二連レ雲石一。春栽二帶レ雨松一。鑑分二金殿燭一。山答二月樓鐘一。有レ問二西來意一。虛堂對二遠峰一。」

南禪師、久しく渤潭の澄禪師に依る。澄已に其の悟解を稱す。分座說法せしむ。南書記の名、一時に㋜藉甚なり。其の慈明の席下に、夜參を聞くに及んで、氣已に奪はる。往いて咨詢せんと謀る、三たび㋝寢堂に至つて三たび進まず。因つて慨然として曰く、「大丈夫、疑あり、斷せずんば、何をか爲さんと欲する乎。」と卽ち入室す。慈明左右を呼び、榻を進めしむ。且く坐せしむ。「南公某實に疑あり、願はくば、誠を投じて決せんことを求む、惟だ大慈悲の故に、法施を惜まざれ。」慈明笑つて曰く、「公已に衆を領じて行脚す、名諸方に傳ふ。未だ透らざる處ありて、以商略すべき爾、何んぞ必らず復入室せんや。」南公再三懇求することこと已まず、慈明の曰く、「雲門三頓の棒の因緣、且く道へ、洞山當時、實に棒を喫するの分ありや、棒を喫するの分なしや。」對へて曰く、「實に棒を喫するの分あり。」慈明の曰く、「㋟書記の解識此に止まる、老僧固に汝が師と作るべし。」卽ち禮拜せしむ。南公平生の負ふ所、此に至りて伏膺す。予嘗て靈源禪師に聞く、曰く、「昔晦堂老人、親しく積翠に從つて聞く所なり。」因つて舊說に同す、併せて此に錄す。

福州の㋠善侍者は、慈明の高弟なり。當時の㋡龍象は、㋢道吾の眞、㋣楊岐の會を數ふ。然も皆之に推服す。嘗て金鑾に至る、眞、㋤點胸自ら親しく慈明に見ゆることを負み、天下に意に可なる者、有ること莫し。善と與に語る、其の未だ徹せざるを知りて之を笑ふ。一日山行す、眞の擧論㋥鋒發す、善、一の瓦礫を取つて石上に置く。曰く、「若し者裏に向つて、㋦一轉語を下し得ば、倆に許す曾て老師に見ゆることを。」眞、左右を視て之に對へんと擬す、善喝して曰く、「佇思停機、㋧識情未だ透らず、何んぞ曾て夢にだも見え去らん。」眞大いに愧悚して、且く㋨霜華を還らんことを圖る。慈明、來るを見て曰く、「本色行脚の人、必らず時節を知る、什麼の忙はしき事ありてか、㋩解夏未だ久しからず、早く已に此に至る。」對へ

㋙擧似。あげしめす。
㋚代語。代りてその主意を拈弄す。
㋛許式。洪州太守、舜老夫と同參、洞山聰に嗣ぐ。
㋜藉甚。熾なること。
㋝寢堂。住持正寢の堂なり。
㋞書記。黃龍南をさす、書記の役を命ぜらる、五侍者の外の役僧。
㋠侍者。禪宗の役僧名、住持の左右に給事するもの、善侍者は福州資福に住す。
㋡龍象。すぐれた學者たちを云ふ。
㋢道吾。吾眞、慈明に嗣ぐ。
㋣楊岐。方會、慈明に嗣ぐ。
㋤點胸。むねをうつ、眞のあざ名。
㋥鋒發。意氣するどきこと。
㋦一轉語。禪宗では評語を、一てんごと云ふ。

て曰く、「善㋐兄の毒心を以て、終に人を礙塞せらる、故に復來りて、和尚に見ゆ。」慈明の曰く、「如何なるか佛法の大意。」對へて曰く、「無雲生嶺上。有月落波心。」慈明、目を瞋して喝して曰く、「頭白く齒豁に猶ほ此れ等の見解を作す、如何んが生死を脫離せん。」眞、敢て仰ぎ見ず、淚顙に交ぶ。久しうして進んで、曰く、「知らず如何なるか、是れ佛法の大意。」慈明の曰く、「無雲生嶺上。有月落波心。」眞、言下に㋑大悟す。眞公、爽氣逸出、機辨迅拙なり、叢林之を憚る。法を翠嵓に開く。嘗て曰く、「天下の佛法、一隻の㋒舡の如し。」㋓大寧の寬師兄、頭に坐し、㋔南福頭其の中に在り、㋕可眞搭を把る、東を去る也我に由る、西を去る也我に由る、善公尋いで七閩に遁る。佯狂垢汚なり、世に之を識る者あることなし。或は聞く晩に鳳林に住すと。

楊岐の會禪師、慈明に從つて游ぶこと最も久し、至る所の叢林に、師必ず寺主と作る。慈明㋖化し去つて、迹を九峰に託す、忽ちに宜春より㋗移檄して、命じて楊岐に居らしむ。時に㋘長老勤公、驚いて曰く、「會㋙監寺、何ぞ曾て禪に參せん、萬か一も之を受けば、恐くは州郡の望を失はん、私かに之を憂ふ。」會、請を受け、卽ち座に升り、機辨逸格、一衆爲に傾く。下座、

㋐嶺。ほんなう、まうざう。
㋑霧嶺。慈明禪師の居りし地。
㋒解夏。夏は九十日づつ冬と夏に守る、九十日の禁足日なはりて。
㋓兄。唐音にてよむ、卽ちぴん也。
㋔大悟。己事を諦め了すこと。
㋕舡。船の俗字。
㋖大寧。道寬、大寧は寺の名、洪州に在り。
㋗南福頭。黃龍南。
㋘可眞。翠嵓、慈明下。
㋙化。僧の死を化と云ふ、死ぬ。
㋚移檄。急書を發して。
㋛長老。禪僧の住階の一。
㋜監寺。禪宗の役僧の名、そうとりしまりするやく。

勤、前んで其の手を握つて曰く、「且く箇の同參を得たり」と。曰く、「如何なるか是れ同參底の事。」勤曰く、「楊岐㋚犂を牽き九峰㋛把を拽く。」と曰く、「正當㋜與麼の時、楊岐前に在る耶、九峰前に在る耶。」勤、㋝擬議す、會、喝して曰く、「將に謂へり同參却つて同參にあらず」と。是れより㋞道價諸方に重し、衲子其の門を過ぐれば、伏膺せずといふこと莫し。嘗て雪に因つて衆に示して曰く、「楊岐午住屋壁跡。滿床盡布雪眞珠。縮却項一暗嗟吁。翻憶古人樹下居。」と、其の活計風味の類此くの如し。

㋚犂。からすき、農家の田を耕すに用ふ。
㋛把。爬と同じ、手がきの道具。
㋜與麼。そんなら。
㋝擬議。いきつまる。
㋞道價。德力のねうち。
㋟仰山。潙山に嗣ぐ。

㋐仰山和尙に僧問ふ、「尋常和尙人に示すに、多く圓相を作し字を畫き作す、意旨如何。」山曰く、「此れ亦閑事、汝若し會するも、外より來らず、會せざるも亦失はず。吾れ今汝に問はん、汝參禪學道の時、諸方の老宿、汝が身上に向つて、那箇か是れ汝が佛性と指さば、語底是耶、默底是耶、總に是耶、總に不是耶。若し語底是なりと認むれば、旨の象の耳鼻牙を摸着する者の如し。若し默底是なりと認むれば、是れ無思無念、象の尾を摸する者の如し。若し總に是と道はば、象の四足を摸する者の如し。若し總に不是と道はゞ本象を拖いて、空見に落在す。正當の諸盲皆云ふ、象を見る安ぞ止だ象上に於て名貌差別することを知らん耶。若し汝、六句を透得せば、象を摸することを要せず。最も第

一と爲す。如今の鑒覺是なりと道ふ莫れ、亦不是と道ふ莫れ。」所以に祖師の曰く、『菩提本無是。亦無レ非二菩提一。更 寛二菩 提一處。終レ身 累 劫迷。』又曰く、『本來無二一物一。何處 有二塵 埃一。』と、其の弟❹香嚴老、亦曰く、『㊁的々無二兼帶一。獨 立何依賴。路 逢二達 道人一。莫下將二語默一對上』と、予嘗て僧に問ふ、「既に語默を將つて對せず何を以てか之に對せん。」僧未だ答ふるに及ばず、忽ちに㊅板鳴る。予曰く、「子が答話を謝す。」と。

龍勝菩薩曰く、「若し先きに生ありて後に老死あらしめば、老死せずして、生あり、生は老死あらず、若し老死あらしめて、而して後に、生ある者は、是れ則ち無因と爲す、生せずして老死あり。」此の偈を以て、衆生の生死の際を觀ば、㊀環の上に始末を尋ぬるが如く。是の處り有ることなし。吾れ是を以て知んぬ、古の此の意を得る、去住の間に於て、了に留礙せざることは、特に其れ物に不二なる耳。

維摩經に曰く、「㊆善來文殊師利、不來の相にして來り、不見の相にして見よ。」と、文殊師利の言く、「是くの如く居士、若し來り已らば、更に來らず、若し去り已らば、更に去らず。所以は者何、來る者は從來する所なし、去るもの所至なし。見るべき所の者は、更に見るべからず。」と、起信論に曰く、「若し心に見あらば、則ち不見の相あり。心性は見を離る、卽ち是れ法界を徧照す

❹香嚴。潙山に嗣ぐ、仰山の法弟也。
㊁的的。あきらかなること。
㊅板。禪宗の叢林には進退を報するに木板をつるして之を鳴らす開板と云ふ、朝夕にならす、金板をつるす、之を雲板と云ふ、飯の時、朝午に鳴す。
㊀環。たまき。
㊆善來。ようおいでたな。

○義、故に乃ち知る、心外に法なし。」と徧照の義、成ず。苟くも去來の相見あらば、則ち正義を遺るゝ人の、風性本動くと言ふが如きは、是れ大いに然らず。風本動かず、能く諸物を動す。若し先きに動あらば、則ち自體を失して、復た更に動かす、則ち動を知る者は、乃ち其の未だ嘗て動せざることを明す所以なり。去來の相見も亦復是くの如し。

洞山の聰禪師は、韶の曲江の人なり、文殊の應天の眞和尙に見え、初め廬山に游ぶ。之を知る者あること莫し。時に雲居の法席、最も盛なり、師㊇燈頭と作る。僧衆の泗州の㊈僧伽、近く楊州に於て出現すと談ずるを聞いて、問を設くる者あり、曰く、「既に是れ泗州の大聖、什麼としてか、楊州に向つて出現す。」聰曰く、「君子は財を愛す之を取るに道あり。」一衆大いに笑ふ。僧あり、蓮華峰の㊉祥庵主の所に至り、之を擧似す。祥公大いに驚いて曰く、「雲門の兒孫、猶ほ在り。」と、中夜に雲居を望んで之を拜す、聰の名遂に叢林に重んぜらる。祥公は奉先の㊋深禪師の嗣なり、知見甚だ高うして、氣諸方を壓す。嘗て衆に示して曰く、「是れ此の事の如きは最もこれ急切、須らく是れ明取して、始めて得べし。若しこれを明らめ得ば時中、拘繫を被ることを免る、便ち處に隨つて安閑なることを得ん。亦心を將つて㊌捺伏することを要せざれ。須らくこれ自然に、他の㊍古轍に合し去つて、始めて得べし。纔かに學處の分

㊇燈頭。火をともす役。
㊈僧伽。印度の人、唐睿宗景雲元年三月寂、年八十三。
㊉祥菴主。奉先深に嗣ぐ、雲門三世。
㊋深禪師。奉先道深融照、寺の名は金陵、雲門に嗣ぐ。
㊌捺伏。おしふくする。
㊍古轍。むかしよりの佛祖の說話などをいふ。

齊に到つて、使ち須らく箇の道理を路布すべし、以て佛法の爲めに、幾ばく時か、心地休歇し去ることを得ん。」と、上座却りて請ふ、與麼に相委せば好し、臨終に上堂、拄杖を擧げて衆に問うて曰く、「汝道へ、古佛㋐者裏に到つて、什麼としてか肯て住せざる。」衆對ふる者あること莫し。乃ち自ら曰く、「他の途路に力を得ざるが爲めなり。」復曰く、「作麼生か力を得去らん。」拄杖を肩上に横たへて曰く、「柳、樑、横、擔不レ顧レ人。却入二千峰萬峰一去。」と、言ひ訖つて化す。嗟乎、今の學者、其の識趣前輩と何んぞ其れ相遠き耶。祥公の聰燈頭の一語を聞いて、其の雲門の兒孫たるを知るが如き、其の後、能く其の言を逃るゝ莫し。今對面して終身論辨すと雖も、邪正を辨ずる者あることなし。其の故は何んぞや、其の死生の際に臨んで、超然として、自ら得ること、此くの如くなるを以て、則ち其の平生、養ふ所高妙なること知るべし。惜いかな、之を嗣ぐ者あること莫きことを。師㋑西峰雲豁禪師と㋒兄弟なり。

㋐者裏。このうち。
㋑西峰。赤先深に嗣ぐ、雲門三世。
㋒兄弟。でしさやうだい。

㊂百丈山の第二代㋓法正禪師は、大智の高弟なり。其の先に嘗て涅槃經を誦して、姓名を言はず、時に呼んで涅槃和尚と爲す。住して法席を成す、師の功最も多し。衆をして田を開かしめ、方に大義を說く者は、乃ち師なり。㋔黃檗、㋕古靈の諸大士、皆之を推尊す。唐の文人武翊黃、其の碑を撰して甚だ詳かなり。柳公權が書、妙なること古今に絕す。傳燈に載する所、百丈の惟政禪師、又馬祖の法嗣の列に係くるは、誤れり。正宗記を觀るに則ち惟政法正あり、然も百丈の第代數ふべし。㋖明敎、但だ皆其の名を見て、辨ずること能はずして、俱に存す。今當に柳が碑を以て正と爲すべし。

㊂百丈山。洪州に在り、南昌府大雄山大智院。
㋓法正。百丈涅槃とも云ふ、大智に嗣ぐ。
㋔黃檗。希運、百丈大智に嗣ぐ。
㋕古靈。神贊、同上。

古佛の偈に曰く、「人の路土を掘りて、私に人造を像と爲すが如き、愚人は像生ずと謂ふ、智者は路土と言ふ。後時に官行かんと欲す、還りて像を將て路に塡つ、像本生滅なし、路亦新故に非ず。」又偈に曰く、「諸色心現時。如二金銀隱起一。金處異名生。與レ金無二前後一故。」と。文殊師利の言く、「此の會の諸の善事、本より未だ曾て爲す、一切の法も亦然り、悉く前際に等し、所以に正に作の時無作なり、作者なきを以ての故に、爲す時に當つて、爲す。自性なきを以ての故に、㋗任、從、萬法縱横、常に無生の際に等し。乃ち知る磁石は、決して鐵を吸はざることを。無明諸行を緣せず。」と」㋘龐公臨終の偈に曰く、「空花落レ影。陽燄翻レ波。」永明和尚、其の言を嘆味して曰く、「此れ有無の見に墮せず、妙に無生の旨を得たり、學者深く之を觀ずべし。」と。

㋖明敎。契嵩、正宗記を作る。
㋗任從。さうあらうとままよ。
㋘龐公。蘊居士、馬祖に嗣ぐ、唐の人。
㋙大智度論。龍樹の造るところ百卷あり。

㋙大智度論に曰く、「復次に人あり、地を堅牢と爲し、心を形質なしと謂ふ、皆是れ虛妄なり。是を以ての故に、佛心力を大と爲すと說きたまふ。般若波羅蜜を行ずるが故に、此大地を散じて、以て微塵と爲すと。地は色香味觸の重き故に、自ら所作なし。水は香を少くが故に、動作地に勝つ。火は香味を少くが故に、勢ひ水に勝つ。風は色香味を少くが故に、動作火に勝つ。心は四事なきが故に、爲す

所の力大なり。又心に煩惱㊃結使の繫縛多きを以ての故に心力をして、有漏の善心を少がしむ。煩惱なしと雖も、心諸法の相を取するを以ての故に、其力亦少し。二乘㋐無漏の心、相を取せずと雖、智惠量あるを以て、無漏の道を出づる時に及んで、六情俗に隨ひ、分別して諸法の相を取す、故に心力を盡さず。諸佛及大菩薩は、智惠無量無邊にして常に禪定に處し、世間の涅槃に於て、分別する所なし。諸法は實相、其れ實に異ならず、但智に優劣あり。般若波羅蜜を行するもの、究竟清淨にして、罣礙する所なし。一念の中能く十方一切の恒河沙等の如き、三千大千國土の大地、諸山微塵を散ず。故に知る其心に、此大力ある衆生は、妄に隔てられ自ら覺知せず。我願はくば、此の法を聞く者、禪定に隨順して、而も自ら修行して、覺體本來清淨なりと稱せしむ。此れ興役功用の難に非ず、㊅第之を心に約する耳。今、家山十方に徧く、衣食老を終ふべく、人生憂ふべきもの、皆已に免離す。此に於て、以て意を爲さゞるは、則ち佛祖の恩德を背負するに非ずや。」

㊃結使。むすびつかはる、しばられる。
㋐無漏。煩惱なきを云ふ。
㊅第。ただ。
㋑勤渠。つとめ、かしらの意か。
㋒母德。母の如くなづく。
㋓圓通居訥。洞山衆に嗣ぐ、智門祚の孫、雲門四世。
㋔大覺蓮。育王に住す、勅諡澄に嗣ぐ、雲門五世。
㋕剎。寺といふこと、梵剎のるゞ。

景福の順禪師は西蜀の人なり。遠識あり、人と爲り、㋑勤渠、叢林の後進、皆之を㋒母德とす。法を老黃龍に得たり。昔蜀を出づるとき、㋓圓通訥と偕に行く、已にして又㋔大覺蓮と游ぶこと甚だ久し。其の像に贊する者あり、曰く、「與レ訥偕行。與レ璉偕處。得二法於南一。爲二南長子一。」と、然も緣薄く居る所、皆遠方の小㋕刹なり。學者其の門に過ぎて、能く識るなし、師亦超然として自ら樂しむ。世境を視ること、飛埃の目を過ぐるが如し。壽八十餘、香城山に坐脫す。顏貌生けるが如し。平生潘延之と善し、將に終らんとす、人をして延之を要せしむ、別れを叙ぶ、延之至りて師去る。其の衆に示すに、多〻偈を爲る、皆德言なり。偈あり、曰く、「夏日人人把レ扇搖。冬來以レ炭滿爐燒。若能於レ此全曉知。塵劫無明當下消。」又趙州勘婆の偈を作つて曰く、「趙州問二路婆子一。答云直與麽去。皆云勘破老婆。婆子無二爾雪處一。」と、同道のもの相共に擧す。又黃龍三關の頌を作つて曰く、「長江雲散水沼沼々。忽爾狂風浪便高。不レ識二漁家玄妙意一。偏於二浪裏一㋖颭二風濤一。」又曰く、「南海波斯入二大唐一。有二人別レ寶便商量。或時遇レ賤或時貴。日到二西峰一影漸長。」又曰く、「黃龍老和尙。有二箇生緣語一。山僧㋗承二嗣伊一。今爲レ君舉。爲レ君舉猫兒。偏解レ捉二老鼠一。」と。

朱顯謨世英、昔南昌に官として、雲庵を識る。未だ幾くならず、移りて江東に漕たり。書を以て來つて佛法の大旨を問ふ。雲庵之に答へて曰く、「書を辱うす、佛法を以て問を爲す。佛法の至妙無二、但だ妙に至らず、則ち手に長短あり。苟し妙に至らば、則ち心を悟るの人、實の如く自心を知る。究竟本來成佛す、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨、而も日用に唯だ自心を用ひよ、自心の變化、把得して便ち用ひよ、是非を問ふこと莫れ。心を擬して思量す已に不是なり、心を擬せず、一一天眞、一一明妙、一一蓮華の水に著かざるが如し。

㋖颭。音せん、なみのうごく聲。
㋗承嗣。法をうけつぐ。

所以に自心に迷ふ、故に衆生と作る、自心を悟る、故に成佛す。衆生即ち佛、佛即ち衆生、迷悟に由るが故に、彼此あり。如今の學者、多く自心を信せず、自心を悟らず、自心の明妙受用を得ず、自心の安樂解脫を得ず、心外に妄りに禪道あり、妄りに奇特を立つ、妄りに取捨を生ず。縱ひ修行するも、外道二乘の禪寂斷見の境界に落つ。」と雲庵の言、蓋し一時の弊を救ふ。然かも其の旨要、曉然として以て、人の㊁昧昧を發くべし。故に私に之を識す。

大本禪師、詔を被りて、大相國寺慧林禪院に住す。㊂引對を將つて、有司儀を習はしめ、日を累ぬ。神宗皇帝、便殿に御して之を見る。師既に見えて但だ山呼す。即ち趍りて殿に登り、坐を賜ふ、即ち榻に就いて、足を㊃槃し㊄跏趺を作す。侍衛驚き相顧る。師自如たり、茶を賜ふ、盞を擧げて長吸し、又之を㊅蕩漱するに至る。上、問ふ、㊆「受業何の寺ぞ。」對へて曰く、「承天の永安。」蓋し蘇州の承天寺の永安院のみ。上大いに喜び語論甚だ久し、既に辭退す。之を目送して左右に謂ふて曰く、「眞の福僧なり。」侍者問ふ。「和尚官家に見ゆと如何。」對へて曰く「喫茶相問ふ耳。」其の天資粹美にして、辭を吐く㊇簡徑なり、眞に超然たること仰ぐべし。

㊁昧昧。くらきこと、愚を云ふ。
㊂引對。天子に拜謁せしむる禮儀。
㊃槃。槃礴など云ふて、兩足を前へ出し、箕の如く坐る、俗に、いたびらかくのるぬか。
㊄跏趺。坐禪のかたち。
㊅蕩漱。茶碗をゆすりうごかす。
㊆受業。僧の師匠どりするを云ふ。
㊇簡徑。
㊈涿州尅符。臨濟に嗣ぐ、紙衣道者といふ。

㊉涿州尅符道者、臨濟に見ゆ、機辨逸格なり。宗門に四料簡あり、佛祖の旨要を定むるを以て、偈を作りて之を發明して曰く、「奪人不奪境。緣自帶誦訛。擬欲求玄旨。思量反責麼。驪珠光粲爛。蟾桂影婆娑。覿體無差㊋。還應滯網羅。」「奪境不奪人。尋言何處眞。問禪禪是妄。究理理非親。日照寒光淡。山遙翠色新。直饒玄會得。也是眼中塵。」「人境兩俱奪。從來正令行。不論佛與祖。那說聖凡情。擬犯吹毛劍。還如値木盲。進前求妙會。特地斬精靈。」「人境俱不奪。思量意不偏。主賓言不異。問答理俱全。㊌踏被澄潭月。穿開碧落天。不能明妙用。淪溺在無緣。」と。洞山悟本禪師、五位君臣を作りて網要を標準し、又自ら偈を作りて、其の下に系く。曰く、「正中偏。三更初夜月明前。莫怪相逢不相識。隱隱猶懷昔日嫌。」「偏中正。失曉老婆逢古鏡。分明覿面更無他。休更迷頭猶認影。」「正中來。無中有路出塵埃。但能莫觸當今諱。也勝前朝斷舌才。」「偏中至。兩刃交鋒不須避。好手還同火裏蓮。宛然自有衝天氣。」「象中到。不落有無誰敢和。人人盡欲出常流。折合還歸炭裏坐。」臨濟洞上の二宗相須つて、大法を發揮す。是の偈語、世俗傳寫して、多く之を更易し、以て其の私に徇へて、㊍先德の意を失ふ。予竊かに之を惜む。今古本を此に錄して、諸傳の悞を正す。

㊋乎。五の俗字。
㊌踏破。たつぱとよむべし。
㊍斷舌才。前に出づ。
㊎先德。臨濟、洞山の二大師を指す

㊐報本の元禪師は孤硬にして風度甚だ高く、威儀端重にして危坐終日。南禪師の門弟子、能く其の行藏を蹤迹するもの、唯だ師のみ。師初め開法、嗣書至る、南公其の名を視て曰く、「吾れ此の僧を忘る。」專使に謂ふて曰く、「書未だ開くことを欲せず、親しく來つて、老僧に見えしむべし。」と、專使命を反す、師卽日包腰して來り、豫章に至る。南公化し去ると聞き、因つて留つて嘆息す。適々晦堂老人、城を出でて相會し、與に語つて之を奇とす。恨むらくは老師見ゆるに及ばざることを。師の道、東吳を化す、人之に歸する者雲の如し。嘗て自ら乞食して、舟に載せて還る。夜盜あり、舟人絕叫して白刄前に交錯す、師、安坐自若、徐に曰ふ、「有る所、盡く以て奉施す、人の命は害ふべからず。」と、盜既に去る、旦に達し、人來りて舟を視て、師死すと意ふ、而も貌和かに神凝ること它日の如し。其の生死禍福に臨むに、能く脫然として、累ひなきこと此くの如し。

延慶洪準禪師は桂林の人、南禪師に從つて、游ぶこと年あり、天資至純にして、未だ嘗て物に忤はず、人の善を聞いて、己より出づるが如し、喜々津々として眉宇の間に生ず。人の惡を聞いて、必ず合掌して空を叩いて追悔する者の如し、見るもの之を笑はざること莫し、其の眞誠此くの如し。終始一如、暮年に院事を領せず、迹を寒溪寺に寓す。壽已に八十を逾え、平生日夕に、他の營爲なし。眠食の餘、唯だ㊆梵音を吟じ、觀世音を贊するのみ。臨終の時門人弟子、皆檀越の飯に赴く、唯だ一の僕夫のみ在り、師、

㊐報本惠元。黃龍南に嗣ぐ、報本は湖州に在る寺。
㊆梵音。經文。

磬を携へて、㊇土地の祠前に坐し、孔雀經を誦むこと、一徧して別を告ぐ。卽ち安坐して瞑目す。三日傾かず、鄉民來り觀る者堵立す。師忽ちに目を開き見て、笑つて地に坐せしむ。頃らくありて、門弟子還る、師呼んで其の右に立つて、手を握るに、炊熟の久しきが如く、寂然たり。之を視て去る、神色變せず、頰紅にして生けるが如し。道俗其の像を塑し、之を龕す。予嘗て其の席を過ぎて拜瞻す。其の平生、潛行密用多くして、妄りに世に知らるるを求めざるを嘆ず。死生の際に至りて、乃ち能く超然たること是くの如し。眞の大丈夫なり、八地の菩薩、㊀無生法忍を證し、一切の法を觀ずること、虛空の性の如し。猶ほ是れ漸くに無心を證す。十地の中に至つて、尙ほ二愁あり、等覺に入り已つて、則ち一分の無明、未だ盡ず、猶ほ微煙の如し。尙ほ能く懺悔す。準の梵讃其れ亦自治する者歟。

南禪師、積翠に居る時、一夕燕坐す、光屋廬に屬す、侍者に誡め、外に言ふこと勿らしむ。嵩明敎既に化して、之を火浴す。頂骨眼睛齒舌耳㊁毫、男根、數珠、皆壞せず。世尊の言ふ如く、比丘生身壞せず、無垢の智光を發することは、善根功德の力、如來知見の力なり。故に㊂行住坐臥、須らく內外淸淨なるべし。彼の二大老は乃ち今耳目の接する所にして異世に非ず、而も獨り爾り、殊勝なることは、平生踐履の明驗に非ず歟。予嘗て二偈を作りて曰く、「如來功德力。內外悉淸淨。念起勿隨之。自然心無病」「形與佛祖等。道致人天護。戒淨福人

㊇土地の祠。寺院守護の神を祀る所。
㊀無生法忍。拔苦與樂の修行。
㊁毫。細毛。
㊂行住坐臥。是を四威儀といふ

天一心空同二佛祖一。

予嘗て數僧と、雪峰の悅禪師の塔に謁し、拜起して之を指つて曰く、「生耶死耶。」久しうして自ら答へて曰く、「㊁塔子を推倒し去るべからず。」旁僧の曰く、「今日の時節、正に道吾の因緣に類す。」因とつて偈を作つて、之に示して曰く、「不レ知 卽 問。不レ見 卽 討。圓滿現前。何須更道。維堅密身。生死病老。面前塔子。不レ可二推倒一。」

南安嵩の儼和尙、世に定光佛の應身と傳ふ。異迹甚だ多く、亦た自傳あり。然るに傳に、其の得法の師の名字を載せず、但だ西峰と曰ふのみ。西峰は、廬陵の眞廟に在る時、雲豁禪師といふものあり、㊃奉先の深公の高弟なり。深は雲門に見ゆ、當時の龍象、其の右に出づる者あることなし、獨り㊄清涼の明禪師、之と名を齊しうす、之を深明の二上座と謂ふ。儼和尙、多く偈を以て人に示す、偈の尾に必ず、四字を題して曰く、「贈以之中」と。世に能く測ることなし。臨終に衆に謂ふて曰く、「汝等當に知るべし、妙性廓然として、本と生滅なし、去來あることを示す、更に何事をか疑ふ、吾れ此の日生ず、今正に其の時なり。」と、乃ち右脇にして臥す。予曰く、「其の入滅に方りて、乃ち曰く、吾れ此の日生ず、今正に其の時なり。」

予嘗て東吳に游び、西湖の㊆淨慈寺に寓る。寺の寢堂の東西の㊇廡に、兩閣を建つ、甚だ崇麗なり。

㊁塔子。雪峯の石塔を指す。
㊃奉先道深。上に出づ。
㊄清涼智明。雲門に嗣ぐ。
㊅淨慈。支那禪宗五山の第四位にして杭州臨安府にあり。
㊇廡。廡廊と熟語しろふかなり
㊈永明。智覺延壽、天台の德韶に嗣ぐ、清涼三世。
㊉冰炭。冰と炭とは性質に反對なれども、ちやんぽんしての意、君子と小人にたとへる。

寺に老衲あり、予が爲に言ふ、「㊈永明和尙、賢首慈恩天台の三宗、手に相㊉冰炭して、大全に達せず、故に其の徒の法義に精しき者を兩閣に館せしむ。㊋義海を博閱して、更に相質難す。和尙則ち心宗の㊌衡準を以て、之を平ぐ。又大集經論六十部、西天此土賢聖の言、三百家を集め、唯心の旨を證成して、書一百卷を爲り、世に傳ふ。名づけて㊍宗鏡錄と曰ふ。其の法施に利ある、博大殊勝と謂ふべし。今天下の名山、之を有せずといふこと莫し。學者身を終はるまで、未だ嘗て卷を展べざる者あり、唯だ飽まで食ひ橫に眠り、無根に游談するのみ。之を佛恩を報ずると謂はんか、佛恩に負かん乎。

㊍同安察禪師、十玄談を作り、大いに正中妙挾の旨を宏む。其の言妙麗にして、叢林に照映す。然も歲月寖遠く、多く其の眞を失す。今傳燈に載する所、題目同じからず、獨り㊎達觀の編する所の五家の宗派に之を叙ぶ、頗る詳かなり。予嘗て舊本を得、五家の宗派に載する所と少しく差ふ耳。傳燈に師を系けて、㊏九峰虔の嗣と爲す。達觀師を標して、雲居膺の子と爲す、省せず、達觀何くよりしてか、其の實を得る耶。然るに清涼の㊐法眼、師の世を去ること遠からず、贊詞を作りて、其の叙ぶること、傳燈に載する所の如し。則ち五家の論、又疑ふべし。十玄の詞、其の次叙當に其の題目を視るべし。皆連聯して作す、前の五首は、其の旨要を示し、後の五首は之を履踐せしむ。然も八首

㊈義海。經文の奧義。
㊋衡準。はかりものさし、御手本となること。
㊌宗鏡錄。永明和尙の撰、百卷あり。
㊍同安常察。九峰虔に嗣ぐ、同安は寺名、洪州にあり。
㊎達觀。百十四頁の脚注に出づ
㊏九峰。道虔大覺、石霜廣諸に嗣ぐ、馬祖六世。
㊐法眼。文益。法眼宗の祖

は皆兩字を題と爲す。意相貫くと雖も、詞句璀璨で起復を爲す。初めに心印と曰ふ、偈の末に曰く、「無心猶隔一重關」故に又祖意を作す。偈の首に曰く、「眞機爭喧二有無功」と、故に又眞機を作す。偈の首に曰く、「豈與二塵機一作二繫留一」と、故に又塵異を作す。偈の中に曰く、「三乘分別强安レ名」と、故に又三乘の次第を作す耳。此れ乃ち其示す所の旨要なり。其六に至つて則ち反本と曰ふ。偈の末に曰く、「還鄉曲調如何倡」と、故に又還鄉の偈を作す。其末に曰く、「更無二一物獻二尊堂一」是爲二正位一坐却則非二妙挾一」と、故に又回機を作す。機妙なれば、則ち宗を失す。尙ほ知見を存す。是れを大病と謂ふ。故に又轉位を作す。轉位は則ち所謂異類中行なり、異類は全く偏なり。却りて須からく正に歸して、血脈をして斷せざらしむべし。故に又一色過後を作す。此れ乃ち之をして履踐せしむるの意なり。五家の宗派、亦一色過後と云ふ、但だ塵異を塵中に異ありと爲すのみ。

南禪師、風度㋐凝遠なり、人其の量を㋑涯ること莫し。故に其の門下の客、多く光明偉傑にして、名叢林に重く、身を終るまで、未だ嘗て其の破顏を見ざる者あり。予聞く、義に厚き者は、仁に薄しと、師の道なり。師は尊んで親しからず、仁に厚き者は義に薄しと、親の道なり。親は親しうして尊まず、南公の意、豈是れを以てせずや。

醉里に狂僧あり、戒道者と號す、聚落に依止して、日として醉はずといふことなし。然るに詞を吐くこと恠奇なり、世能く之を凡聖すること莫し。飲しむるに酒を以てする者あれば、自ら祭文を爲り、

㋐凝遠。かたくるしきことか。
㋑涯。かぎる。

戒、祥に應じて曰く、「惟れ靈生れて㋒閻浮に在り、曠らず妬まず、愛して酒子を喫す。街に倒れ路に臥し、直に㋓兜率陀天に生ずることを得ん。」と、爾の時方に酒を喫せず、故は何を以ての故に、淨土の中には、酒を沽ふことを得ること無ければなり。金剛般若經は、無住を以て宗と爲す、無住を以て宗と爲すは、則ち宜しく、其の所談皆、相を蕩し有を破し、纖塵も立せざるべし。而るを經に、福勝の者を贊け、之を半ばにす。持戒修福の者は、有爲の事のみにして、世尊の能く此の經に於て、信心を生ずる者は、必ず此の人と答ふる者は何ぞや。

王文公、相を罷めて老鐘山に歸り、裙子を見れば必ず其の道學を探り、尤も㋔首楞嚴に通ず。自ら其の義を疏す、其の文節にして㋕肆なり。諸師の詳なるを略して、諸師の略を詳かにす。識妙なる者に非ずんば、能く窺ふこと莫し。每に曰ふ、「今凡そ此の經を看る者、其示す所の㋖本覺妙明、性覺明妙を見、根身器界の生起、我が心を出でずといふことを知る。竊かに自ら疑ふ、今鐘山の山川一都會耳、而も其の中に游ぶ、無慮千人、數千人の內心、一外境を共にする有らんや。借如千人の中に一人忽ちに死すとも、則ち此の山川、何ぞ常に隨つて滅せん、人去り境留むといふは、則ち經に、山河大地、生起の理を言ふ、然らずんば、何を以てか、會通して佛の本意に稱ふ耶。」と。

㋒閻浮。浮提なるこの土。
㋓兜率天。彌勒菩薩の淨土にして、三十三天にあり。
㋔首楞嚴。唐の般若秘帝の譯十卷。
㋕肆。集の義、義の博く深きないふ。
㋖本覺。人の本源本心の體ないふ。

國譯石門洪覺範林間錄下　終

國譯新編林間後錄

❶釋迦出山畫像贊

秦越人の醫に於ける、望み見て生死を知り、㊁老潘の墨に於ける、摸索して精粗を知る、蓋し其の不傳の妙なり。語默を寄するに地なし。㊄歐陽文忠公が曰く、「小字㊂遺敎經は、書するものゝ名を著はさずと雖も、然も㊅羲之に非ずんば能く作ること莫けん。」と、予、錢樂道の家に蓄ふる所の㊆釋迦文佛の出山の像を閲するに、名を主とせずと雖も、然も㊇道子に非ずんば作ること能はず。其の筆意の著はるゝを以てなり。樂道、人品甚だ高し、㊈鐵書㊉血食の後、其の㊋忱信痛敬の致す所、像の㊌寄寓決して㊍苟然に非ず。拜手稽首して、之が贊を爲りて曰く、

徧大海咏具ニ於一滴一。盡法界身足ニ於㊎纖埃一。佇思則㊏燈王之坐。不レ能レ入ニ㊐毘耶之室一。斂レ念則㊑彌勒之門㊒弾指卽開。唯我鼻祖釋迦和尚。初出ニ雪山一卽示ニ此像一。以ニ㊓千百億微塵數身㊔九十七大人之相一。頓入ニ筆端一二味一而臣。

❶釋迦出山。釋尊が雪山に於て六年端坐の曉、成道せられ、山を出て給ふ圖、この像は遺敎經を上に贊のかはりに書きしものか。

㊁老潘。筆墨の巧者也。

㊄歐陽文忠公。歐陽修、宋の名臣。

㊂遺敎經。釋尊入涅槃のとき說き給ふところ。

㊅羲之。今蘇に作るはいかがにや、晉の王右軍のごとならん。

㊆釋迦文佛。文の字は牟尼のなまりより出でし字。

幻ニ此幅紙之上一。㊗垂手跣足頂螺頷絲超然靜深出ニ三界癡一。如㊘浩蕩春寄ニ于纖枝一。如㊙清涼月印ニ于盆池一。㊚鑠レ冰琢レ雪我作ニ贊詞一。㊛闕レ空鏁レ夢夫子其牢蓄レ之。

小字㊜金剛經贊

僧子瓊、毫を束ねて纖筆と爲す、其の鋭きこと菱芒の如し。紙に臨み肘を運し、快きこと風雨に等し。金剛般若經を寸を象ぬる環輪の中に書す。之を望むに、㊝團團として珠の薄霧の間に在るが如し。卽いて之を視るに、其の行布、人の髮を梳つて煙㊞鬟と作すが如し。思力の精微なるに非ざるよりは、何を以てか此に臻らん。之が贊を爲りて曰く、

昔有ニ佛子一根猛利。能觀ニ空性卽是色一。欲ニ頭空色不思議一。仰レ空書ニ此金剛句一。至レ今風雨被ニ原野一。諸樵木者集ニ其下一。乃知肉眼不レ能レ見。譬如ニ水中有ニ鹽味一。唯道人瓊思の精特。能觀ニ色性卽是空一。視ニ此㊟纖管一大如レ椽。揮レ翰如レ行ニ九軌道一。故於ニ象レ寸環輪中一。備ニ足㊠廣大言說身一。世人可レ見不レ可讀。譬如ニ嬰兒視ニ崖蜜一。我於ニ此經一能證ニ入初中後善三法門一。忽然落レ筆如㊡建レ瓴。不ニ復現行生一倒想一。猶下色空觀入ニ諸境一。奏ニ刀肯綮一無ニ全牛一。盡持ニ此法一施ニ羣生一。甚微細㊢智願

同證。

㊣六世祖師贊 幷序

予、海上に竄せられ、三年にして還つて筠の石門寺に舍す。㊤叢林の㊥荒寒を悲み、㊦祖宗

㊝團團。まんまるとしたかたに書きたるを形容す。
㊞鬟。もとどほり。
㊟精特。精進綿妙に同じ。
㊠廣管。ほそき筆、細書のこと。
㊡大如椽。たるさの大さほどあるふで、大文詞の才をほめて云ふ。
㊢九軌道。きはめてひくきところ。

はだしなり、以下出山の形容なつられる。
㊤浩蕩春。佛心を形容せる也。
㊥清涼月。菩薩心を形容す。
㊦鑠冰琢雪。釋尊の苦行にたとへる。
㊧闕空鏁夢。奇哉、一切衆生、悉有ニ佛性一。草木國土、悉皆成佛の意歟。
㊨金剛般若波羅蜜經。一卷。鳩摩羅什の譯するところ、大般若では五百七十七卷目、能斷金剛分と云ふ。

㊩風雨。はげしき形容。
㊪諸樵木者。諸人の意。
㊫肉眼。凡眼。
㊬嬰兒。赤子。
㊭崖蜜。ゆすらうめの異名、又は峻崖にあるはちみつ。
㊮此經。金剛經を指す也。
㊯三法門。初善、中善、後善の三法門。
㊰建瓴。かめの水をくつがへす、下に向ふ勢のつよきを云ふ。
㊱倒想。倒惑の苦の思を生ずるなし。
㊲奏刀。奏は來るなり、刀を振り上げるの意。
㊳全牛。牛刀割雞のるぬにて、大事を處理するに智力を以て容易にするを云ふか。
㊴羣生。一切衆生。
㊵智願。般若は智惠と譯するを以て、甚深の大智惠をともにさとらんと云ふこと。
㊶六世祖師。六祖慧能大師。
㊷叢林。諸方の禪宗寺の風儀。
㊸荒寒。衰へてものさびし。
㊹祖宗。祖師達磨の宗旨。
㊺標致。總旨をあらはし示すなり。
㊻崖蜜。器世界の略。
㊼哆和。言語の舌の廻らぬこと。
㊽頂峯。少林寺のあるところの熊耳をさすか。
㊾神光。二祖可大師の名。
㊿上乘。佛法の最上乘。
(51)雙中斫臂。二祖安心の故事。
(52)竪毛呵手。寒毛卓竪し、手足のおきどころもない。
(53)六道。人間、天上、地獄、餓鬼、畜生、修羅等の六道。
(54)赤頭鼎。三祖僧璨大師なり、姓氏を云はず。
(55)破頭峰。五祖弘忍大師の居る山。
(56)龍象雜還。宗旨淵邃の雲衲が澤山居るとの意。
(57)衣付小兒。傳法衣は。

の㊀標致を念じて、自ら涕の流るゝことを知らず。六祖師の畫像の贊を作つて以て照默禪師に寄せて、以て其の志を見はすと云ふ。

安想無レ性。證不レ滅レ受。前聖所知。轉相授手。風烟花開。㊁器界以形。霜露果熟。王子乃生。謎二持佛聚一。指二示心體一。俱遮二其非一。不レ言二其是一。嬰兒索レ物。意正語偏。㊂哆和之中。語意俱捐。

㊃頂峰朝露。㊄神光夜升。堪二任單傳一。擔二荷㊅上乘一。自尋二其心一。不レ見二歸宿一。如下視二環輪一。求其斷續。用レ獄除レ間。履レ瘦知レ肥。嬉坊酒肆。盡二其塵機一。㊆雪中斫レ臂。願レ續一佛壽一。兒孫今聞。㊇竪レ毛呵レ手、

㊈六道暗昏。不レ碍二明潔一。毫釐弗レ差。證二甘露滅一。但㊉赤頭顱。特諱二姓氏一。翩然往來。被レ褐懷レ寶。精二一其身一。身名俱捨。後世丘墳。猶無二知者一。

㊋破頭峯下。㊌龍象雜還。㊍衣付二小兒一。㊎道傳二懶禿一。乃爾相違。求レ人爲レ法。㊏天書至レ門。堅臥不レ答。念二諸衆生一。捕レ風捉レ影。十地治レ之。由未二蘇醒一。師微笑曰。何必㊐眩瞑。但勿二強名一。自然無レ病。

㊑觀二前後身一。兩鏡一面。左右對レ之。三者頓現。今非昔是。增レ金以レ黃。昔非今是。謗レ沈無レ香。已絕二死生一。豈纏二老少一。全機現前。當レ明而妙。夜江佐レ舟。吾今汝渡。

句中之眼。如二水有一乳。

㊒是風幡動。眼目遮護。非二風幡動一。心則現露。是爲二曹溪顯決要旨一。勿レ流二汝意一。暫時斂レ念。妙寂了然。汝自受用。㊓密非二我邊一。㊔負石春レ糧。㊕趂レ獐逐レ兎。鏡中之空。欲レ尋無レ路。

㊖棗栢大士畫像贊并序

易の深渺なること義を以て得べからず。故に象の象を立てゝ以て其の旨を蘊す。心の精微言を以て傳ふべからず。故に事法を指して以て其の妙を示す。唯棗栢大士のみ深く此の三昧門に入る、謹んで拜手稽首して之が贊を爲りて曰く、

㊗須眉如レ畫。㊘頎而美。風神如レ秋氣奇偉。平生歸二宿東北方一。塵勞動中寂而止。㊙俯然跳レ足散レ衣行。智智用中不レ乖レ體。帝王家生得二自在一。壽量不レ書絕二終始一。虎受二使令一心境空。女爲二伴助一憎愛弃。㊚冠巾傳レ心卽レ俗。㊛眞。方隅示㊜レ法卽レ事理。只將二棗栢一㊝薦二齋鉢一。我來二閻浮一非レ着レ味。自然光明生二齒牙一。我談二詞章一皆實義。佛子授レ汝以二顯決一。一言便足レ超二十地一。隨二順無明一起二諸有一。若

㊀道傳懶禿。道法は懶禿の惠能といふ米つき坊主に傳へられた。
㊁天書至門。天子さまが御召の綸旨がありても。
㊂眩瞑。めがくらむ。
㊃觀前後身。六祖前世の身と現在身との意也。
㊄是風幡。是れ仁者が心動く、幡のうごくのではない、この話、曹溪の要旨なり。
㊅密。この話は明上座が太庾嶺で密語密意の外になんぞ佛法のあるあるかと、自己の面目を返照せば密は却つて汝が邊に在りとさとされた、
㊆負石。六祖が修行中米つきばつたをなされたが、遂に傳法はこの行者に歸した。
㊇趂獐。獐はおほしかぢや。とほの昔に傳法していつた程に。
㊈棗栢大士。傳大士のことなり

不ニ隨順一諸有離。聖賢酪生ニ凡乳中一。只由ニ觀ニ照戒定慧一。是謂ニ大士同體悲一。令ニ我頓入ニ一切智一。作ニ大佛事一徧ニ㋐塵刹一。㋑華藏界中容レ㋒頓レ襟。以レ空爲レ座禮ニ㋓十身一。以レ願爲レ舌說ニ此偈一。如ニ以レ花說ニ無邊春一。如ニ以レ滴說ニ大海味一。稽首世間妙蓮華。常願清淨出ニ泥滓一。

㋔百丈大智禪師眞贊并序

㋕馬祖大寂禪師、已に化して海昏の石門に塔す。師其の傍に庵することすでに久し、弟子相尋で日に增す。是に於て山の淺を厭ふて乃ち馮水に沿ふて上つて、車輪峰の下に至り、㋖希運㋗惟政と㋘火種刀耕して食す。遂に法蓆を成す。予㋙崇寧四年の春、山中に至つて、遺像を㋚瞻る。冰の如く枯れ、雪のごとく老いて、衣に勝へざるが若しと雖も、神峻氣邁にして未だ世を度らざるが如し。謹んで拜手稽首して之が贊を爲りて曰く、

以レ實問答。空可ニ青黃一。以レ意求レ道。神落ニ陰陽一。陰陽豈レ測。脫ニ略陰界一。虛空莫レ盡。㋛因果不レ昧。我有ニ大機一。佛無ニ密語一。如ニ獅子王一。露地方踞一。稱レ性文字。隨レ身㋜叢林。如下以ニ妙旨一。發和雅音。同レ世之㋝波。壽九十二。謹ニ持心宗一。謚曰ニ大智一。

雲庵眞贊

㋞雲庵は黃龍の門に出づ、臨濟九世の孫たり。種性殊勝にして契悟廣大なり。心要を指示して辯㋟曹溪の如く、敎乘を決擇して論㋠棗栢の如く、偶句を作爲して詞㋡志公の如く、履踐の明驗精しきこと永嘉の如し。雲庵を退居す、時に已に七十餘、幻滅都て盡き、慧光渾て圓なり、以て其の遺風餘烈を想見すべし。門人㋢德洪、謹んで拜手稽首して、之が贊を爲りて曰く、

於ニ自住境一。見與ニ見緣一。如ニ夢能所一。如ニ蜜中邊一。唯具ニ正眼一。入ニ此三昧一。如ニ妙蓮華。出ニ緣生海一。祖師活意。如來密機。成ニ就衆生一。如ニ㋣鵠鵬飛一。使ニ其自化一。不ニ由レ他悟一。秀ニ出叢林一。光ニ于佛祖一。趨ニ滅㋤陝右一。誕ニ生㋥江南一。暗中五色。天下雪庵。

㋦明極齋銘

太原㋧王健伯强は名臣㋨惠公の子なり、皇叔嘉王の婿、壯年に方つて則ち能く官を弃て道を學ぶ。㋩首楞嚴を閱し、「㋪餘塵は尙ほ諸學、明極れば卽ち如來」といふに至つて、嘆じて曰く、「此れ如來の訓なり、予が志な

㋐須眉。ひげまゆ。
㋑頓。音キ。たけたかき。
㋒峭然。長けたかき。
㋓冠巾。俗人のままにて。
㋔俗眞。眞諦、俗諦。
㋕法。法界の略にて、法は無爲自然の大道也。
㋖事理。事法界、理法界互に圓融す、事は宇宙の現相、理は眞如の理で、事理不二なり。
㋗麤齋鉢。大齋會をやりて、大勢の僧衆を供養したとの意。
㋘十地。菩薩修行の階級。
㋙塵刹。俗世界、斯土等と同義。
㋚華藏界中。蓮華藏世界。
㋛頓響。「たづなをとどむ」とよむ。
㋜十身。華嚴には佛を十種の方面から觀察して、十種の名稱を附せり。
㋝百丈大智。
㋞百丈の師。
㋟馬祖。百丈第二代。
㋠懷政。百丈第二代。
㋡火種刀耕。山の木をきりやいてものをうゑてとるを云ふ。
㋢崇寧四年。宋哲宗の年號、日本の堀河天皇の長治二年。
㋣嚇。のぞみみる。
㋤因果不昧。百丈禪師、野狐の公案あり、不落不昧の話を參照すべし。
㋥叢林。叢林の清規が百丈和尙が始められたゆゑ。
㋦波。「あと」とよむ。
㋧雲庵。謚は克文、寧峯眞淨に住す、宋の禪宗名僧にして黃龍南に嗣ぐ、覺範の師なり。
㋨曹溪。六祖大師。
㋩棗栢。一四九頁脚注㋠を見よ。
㋪志公。梁の寶誌公。
㋫德洪。覺範の諱。
㋬鵠鵬飛。かぎりなく弘法するにたとふ。
㋭陝右。地名、師は陝府の閿鄉

り、願はくば明極を以て其齋に名づけん。」と、銘を予に乞ふ。銘して曰く、

有而尋求。癡暗所レ㉓囿。得而驚異。智濁之咎。濁澄暗徹。

自覺成就。如㉔人目精。一塵不レ受。開レ睫㉕生。明發寄レ根。

斂レ睫㉕死。暗不レ能レ昏。㉖聖師真慈。開二此妙門一。睥睨不レ入。

夫豈知レ恩。㉗枵然丈室。中置二㉘匡牀一。㉙經行宴坐。㉚晨燈夕香。

勿レ使下邪念。蔽㊀常寂光上。

㊁小字華嚴經偈幷序

蜂房梁間に於て、漆液を以て其の蔕を固うす。鵲木杪に巣ふ、百日を累ねて而して後に成る。彼曾て何を知つてか經營の妙、積累の功、藝を習ふの神の若くなるや。蓋し其の靈明㊂廓徹不思議の力なり。飛搖の中に昧略すと雖も、而も具足成就して毫末を差へず、況んや萬物に首出し、物に應じて而も能く言ふ者をや。昔梵僧あり、五天より來りて、晉の宮闕の崇麗を見て嘆じて曰く、「是れ㊃兜率の内院と何ぞ異ならん。但彼は道力の成す所なり、而も此れは直に業力のみ。」予嘗て之を笑ふ、是れ安ぞ我が此の妙力太虛を出生し寰宇を容受することを知らんや。曾て何の天上人間樓

一五二

㊀鄭氏に出づ。
㊁江南。地名。
㊂明極。楞嚴經の句にとる。
㊃王健伯。强は諱か。
㊄惠公。王惠公。
㊅首楞嚴經。十卷あり。
㊆餘塵。もろもろの煩惱。
㊇囿。限られたる區域、則ち範圍なり。
㊈人目精。人のひとみ。
㊉聖師真慈。佛祖の御慈悲。
㊊餘塵。もろもろの煩惱。
㊋枵然。大いなること。文選に出づ。
㊌匡牀。ねどこ。
㊍經行。僧家に「きんひん」とよむ、運動の意にてへめぐるなり、坐禪の中に退屈を慰するがために行ふ、或は經をよみてまはる。
㊎晨燈夕香。あさには佛に燈明をあげ、夕べには香を焚いて讃佛禮敬する。
㊏小字華嚴偈。小字は筆寫の意。

觀の云ふに足るならんや。道人栖公、世の迫隘を愍んで、其の所欲に就いて、大方廣佛華嚴經を㊄方冊の中に書す。其の輕妙一掌を以て置くべし。編を開けば㊅蠕蠕として行蟻の如し、熟視すれば、其の衡斜曲直重交反側、曲げて其妙を盡す。翅㊆擘窠の大書の如きのみ、觀るもの門に闔つ、未曾有なりと嘆ず。子、是の無作の功を稱贊せんと欲して、普く大衆に告げて偈を說いて言く、

我聞尊者㊇龍勝師。應レ供曾入二娑竭海一。龍宮微塵妙章句。
目所二一瞥一輒能誦。流二於五天及震旦一。爲二熱惱中甘露門一。
維道人栖出二其後一。願力猛利思精特。能於二方冊紙墨間一。
書二此大經㊈十萬偈一。誦二於蝸舍巢庵中一。了然如下在二龍宮一見上
觀者種性有二差別一。愛慕皆生殊異想一。要當諦㊉觀一塵中。
亦有二無邊妙經卷一。昔有二智人破二此塵一。十方世界一切說。
以レ名レ塵故非二斷空一。而可レ破故非實有一。了二此兩字妙法門一。
亦攝二一切㊋契經海一。譬如下困臥俄頃際一。夢中所レ歷更千載上
乃知一念圓二古今一。眞實際中法如レ是。一塵微妙不レ可レ測。

偈は律字して詠ずる也。
㊇龍勝。龍樹尊者。應供は無上の福田あり、故に人天より供養せらるべきの義、佛十號一なり。
㊈十萬偈。華嚴經はもと十萬偈なり。
㊉一塵中。これより以下は華嚴の功德を讃歎す。
㊋契經。一切藏經卷。
㊌奚方冊。是より以下はこの寫經を功力の廣大なりとほむるなり、奚は、とふ、はかる、謀也。
㊍蠕。開く、書を蠕くなり、此

當レ知一一塵亦然。譬如ニ天帝網明珠。珠體瑩然俱照徹一。一珠具ニ足諸網珠一。一一珠中同徧入。我今以ニ此金剛句一。壞ニ滅彼衆下劣想一。使レ悟ニ塵中含ニ此經一。㋐奚方冊中乃驚異。咨ニ爾山君河樹神一。各各當レ憶ニ本願力一。要當ニ勇猛勤守護一。勿レ令ニ邪念輙蠹侵一。毘藍風吹ニ須彌盧一。劫火焚ニ燒大千界一。爲㋑攤ニ此經一切處一。使ニ其涼曙各得レ所。我此現前佛子等。作ニ此觀一者名ニ正觀一。稽首十方調御師。刹刹塵塵爲作レ證。

㋒慈氏菩薩栴檀像讃

金陵の華藏禪寺、慈氏菩薩の㋓栴檀の像、相好の工天下に妙なり。而も神異靈感、未だ一二を以て數へ易からず。㋔景德寺の後殿に居く。㋕王文公嘗て像の居を易ふるを求むること甚だ切なりと夢みる、既に覺めて之を忘れず、復た夢に前事を理る。公、夢中に固く之を留む。像則ち泣下る、起きて之を視る、眞に涙の處あり。因つて大いに驚異して卽ち迎へて華藏の㋖大殿に置く。俄かに景德寺一夕にして燼す。嗚呼三災彌綸し大千滅壞す、像豈久しく人間世に留ることを得んや、痛く自ら㋗彈免して、此の兒戲狹劣の相を爲さんや。是れ蓋し護法諸天像の靈瑞を以て之を佑することの則ち然り、菩薩の意に非ず、以て辨せざるべからず。稽首して之が贊を爲りて曰く、

何人寄ニ逸想一。游ニ戲浮漚間一。以ニ如幻之力一。刻ニ此栴檀像一。坐令衆妙相。秀發千光中。天冠束ニ紺髮一。㋘銖衣絡ニ華鬘一。種種妙莊嚴。成ニ此功德聚一。當時億萬衆。感極則悲號。樓觀出ニ談笑一。秘ニ護百寶櫝一。如レ登ニ㋙覩史天一。如レ集ニ㋚龍華會一。嗟哉像數末。㋛羽嘉成ニ百鳥一。㋜棘生ニ㋝蕩蔔林一。龍神爲ニ悲動一。王臣寇外護。異夢非ニ意思一。願推ニ明月輪一。出ニ此㋞蓬勃煙一。願回ニ紫金山一。安ニ置清涼處一。至レ今百福相。儼然臨ニ天人一。神力吁莫レ測。拜瞻涕㋟汍瀾。我謫觀ニ十方一。寔無ニ心外境一。自然離ニ依他一。及與ニ徧計執一。卽今目所レ見。非レ有亦非レ無。如ニ像現ニ鏡中一。非レ鏡亦非レ面。願入ニ此三昧一。識心自然明。

於ニ十方國土一。而作ニ大佛事一。稽首大悲尊。證ニ我如レ是說一。

第十五祖眞贊幷序。

㋠迦那提婆尊者十五祖として、佛の心印を傳ふ。猶ほ衆生の其の言を信受すること能はざるを憂と爲して、乃ち大自在天の像に訴へて曰く、「願はくは神、我に言をして虛りに設けざら使むることを賜へ」と。嗟乎、道の行ひ難きこと、獨り今のみに非ず。稽首して贊して曰く、

石彪肉醉。木駒夜嘶。我此三昧。非ニ識情知一。應レ緣而現。不レ落ニ思惟一。是故鉢水。以レ針投レ之。如ニ仲尼韶一。如ニ子期琴一。又如蕭何。而

㋐奚。何。㋑攤。敷。㋒慈氏。彌勒菩薩。㋓栴檀。香木。㋔景德寺。支那五山の二、杭州臨安府にあり。㋕王文公。王陽文公、詩人也。㋖大殿。佛殿。㋗彈。音タ。ひろし、あつしなど云ふ訓あり、たれさがるの意か。

㋘銖衣。朱衣と同じさか。㋙覩史天。兜率天。㋚龍華會。龍華三會。㋛羽嘉。嘉はうるはしいの意か。㋜蕩蔔。くちなしのはな。㋝蓬勃煙。氣のさかんなること、白雲の蓬勃などといふに用ふることば。㋞汍瀾。汍はかなしんでなみだのながるること。

識に淮陰。無言可寄。無跡可尋。粲然現前。傳之以心。㉔穴に像之目。我不護神。指樹之耳。我知其因。物我如故。所立皆眞。隨其妙用。㊁見我全身。稽首眞慈。爲僧中王。如萬星月。見者清凉。倘以衆生。不信爲傷。蓋盲者咎。非光掩藏。哉。

㊂翠巖眞和尚眞贊

我方㊃涇渭同流。笑中軟頑滑頭。爲君人境俱奪。闇裏㉖白拈巧偸。如水洗水。㊄相樓打樓。從來脫略無窠臼。接得南泉嗣趙州。

㊅照默和尚眞贊

辯如㊆玄沙。有邊幅。韻如㊇睦州。出風骨。默而說珠自照。㊈八荒光明寄。㊉毛粟。獨立南榮山岳峻。臨濟欲傾不敢覆。笑橫㊋玉麈。氣如春。一堂嚴冷天魔哭。

㊌空生贊幷序

漳南の僧、愼修、吳中に游び、此の畫を敗垣破壁の間に得たり。埃翳を

㉓迦那提婆。龍樹尊者に嗣法す。
㉔穴。うがつなり。
㊁見。あらはす。
㊂翠巖眞。慈明に嗣ぐ。
㊃涇渭。涇水は清、渭水は濁、區別の明かなるを定むるに用ふ。
㉖白拈。眼の白黑、公然となすの聚、ちぼ、すりのるゐ、たくみにぬすむ也。
㊄相樓打樓。箋の字が正しいといふことである、箋は目のちらいかごである、つまり言へば人のまれなーて居ては、いつまでもちちあかぬと云ふことに用ふ。
㊅照默。傳未詳。
㊆玄沙。師備禪師、睦州、名は陳。
㊇八荒。國の八方のはてなり。
㊈毛粟。こく小さきことか。
㊉玉麈。ほつす、拂子。
㊋空生。須菩提、釋尊弟子の中

拂除すれば、神觀清深なり。維摩大士に從つて心解脫を得る時の如し。出して以て予に示す。之が贊を爲つて曰く、

以空寂身。無所依住。而捉杖梨。以靈知心。不在散攝。而玩㊌貝葉。不捨聲色。而證眞空。與我日用。能所心同。於一切處。寂入法海。如風行空。無有妨礙。但脫㊍二執。圓成普會。當愼以修。入此三昧。

㊎永明和尚畫像贊幷序

永明の智覺禪師、悲願力に乘じて、生を震旦に示して佛心宗を傳へ、法の檀越と爲る。其の家に辯才と名づく、學者依つて以て聲を揚ぐ。議論言句浩きこと山海の如し。予其の間に漁獵することを二十年に餘る。其の妙處に至れば、輒ち能く之を識る。鵝王の乳を擇ぶに遺餘あることなきが如し。蓋し嘗て自ら鄙陋を忘れ、禪師の逸駕を追ひ之が伴侶と爲つて、以て十方國土に游び、大佛事を作さんと欲す。倘ほ才だ晩からず。稽首して之が贊を爲りて曰く、

㊏二界種性。有萬姸醜。生順死逆。夢寐想畫。往復無間。聲度垣墉。皆依㊐末那。㊑戲論成就。而末那體。無作無受。譬如空花。實無而有。一念了知。光明通透。我如是

㊌貝葉。經文といふこと、印度はばいたらの葉に書くを以てなり。
㊍二執。人我、又は煩惱愚痴。
㊎永明和尚。諱は延壽、天台韶國師に嗣ぐ、年二十八にして出家す、靈隱第一世なり、永明では二世、唐開寶八年十二月二十六示寂。
㊏二界。此界他界、唯識や三界などから立論するので。
㊐末那。此に意と譯す、意識なり。
㊑戲論。妄情則ち色等なり、戲論滅せず菩理現ぜざれば、則ち至道顯はれず。

見。無レ有ニ錯謬一。是爲ニ心宗一。祖佛授レ手。孰振ニ頹綱一。秀傑奇茂。稽首永明。月臨ニ星斗一。

㋐永嘉和尚畫像贊

永嘉尊者初め維摩經を閲して、心要を發明し宗旨を定めんと欲して、遂に㋑曹溪に造つて祖師に印可せられ一宿して去る。世咸く㋒一宿覺を以て之に名づく。予其の歌詞を讀み、其の履踐を究むるに、㋓尺圍の鑰合するが如し。未だ嘗て卷を置いて長嘆せずんばあらず。公の人となりを想ふに、㋔碩大光明、壁立萬仞、而して今の學者を視るに、㋕塞酸㋖鏁細㋗紛紛㋘蠢蠢たり。宗教の興衰茲に於て知んぬべし。之が贊を爲りて曰く、

情根無レ功。意識無作。現量圓成。見聞知覺。如ニ鏡受レ燈。光無ニ壞雜一。烈火焚燒。河流㋙湍逝。谷風㋚怒號。大地㋛依止。俱無ニ知思一。亦復如レ是。此㋜涅槃門。如ニ鼓塗レ毒。曹溪搥レ之。聞者儼仆。以レ槌授レ公。萬象驚縮。光明之語。粲如ニ日星一。精嚴之行。清如ニ玉冰一。唯不傳者。與レ空相應。我初學レ道。如レ握如レ拳。晚乃覺レ之。如ニ手安然一。有時而用。拽ニ取大千一。

㋝清涼大法眼禪師畫像贊 并序

㋐永嘉。眞覺禪師、諱は玄覺。曹谿に細を訪れ、法を問ひ、後、溫州に回る。證道歌を作り學者に示す。先天二年十月十七日亡す、無相大師と謚し、潛光と塔銘す。

㋑曹溪。六祖惠能大師の居る所。

㋒一宿覺。玄覺といひしを以てなり。

㋓尺圍鑰合。物指(尺)鑰(圍)のよく合して違はざること。

㋔碩大。おほいなる。

㋕寒酸。一味の寒酸など云ふ語あり、一生のなりゆき。

㋖鏁細。くさりのほそき。

㋗紛紛。みだるることなり。

㋘蠢蠢。うごつく。

㋙湍逝。急流なり。

㋚怒號。いかりさけぶ。

㋛依止。たよる。

㋜涅槃門。永嘉を指して稱ふ。

予㋝元符の初、臨川の承天寺に至る、寺基宏壯にして㋞萬指を集むべし。食堂愴然として殘僧三四輩のみ。舊碑を讀んで、大法眼禪師開法の㋟故基たることを知る。影堂の壁間畫像存す、神宇靖深にして眉目㋠淵然たり。英特の氣沒せず、豈大法を荷負し、四生を㋡提挈する者、其の表、故と是くの如くなるをや。稽首して之が贊を爲りて曰く、

非二風幡動一。非二風鈴語一。見聞起滅。了無ニ處所一。何以明レ之。俱寂靜故。此㋢光明藏、平等顯露。由ニ本無明一。愛欲怪妬。如ニ隔レ日瘧一。痛自遮護。有ニ能了者一。卽同ニ本悟一。㋣索爾隨レ緣。閑居靜住。一切仍レ舊。自無ニ染汚一。爲レ物作レ則。險崖之句。㋤不レ可ニ犯干一。㋥如ニ大火聚一。

㋦雲門禪師畫像贊 并序

㋧富鄭公が家に蓄ふる所の雲門禪師の像、僧原靜、其の本を移寫して㋨蔣山に藏す。㋩大觀三年六月に、予拜觀することを獲たり。稽首して之が贊を爲りて曰く、

見流滔天。公㋪峙如レ山。壁立萬仞。捍ニ其狂瀾一。可ニ望而却一。不レ可ニ

㋝元符。宋の哲宗の年號、日本堀川天皇承德康和の頃。

㋞萬指。指の數、萬なれば千人に當る。

㋟故基。ふるき遺跡。

㋠淵然。水の深靜にたとふるなり、ふかくしづかなること。

㋡提挈。たがひにたすけあふこと。

㋢光明藏。人々自己の光明藏なり、神通光明にて因果異なく、凡聖源を同じうするを藏とするか。

㋣索爾。不安のこと、おそるるの體。

㋤不可犯干。おかすべからず、天眞にして妙なるをいふ。

涅槃は宗旨の歸趣にして悟の畢竟地也。

㋥清涼大法眼。文益といひ、希覺律師に從弟し、羅漢の環に嗣ぐ。清涼に住し、周の顯德年中終る壽七十四、私に大法眼と謚す、その宗を法眼宗といふ。

㋦元符。宋の哲宗の年號、日本堀川天皇承德康和の頃。

㋧萬指。指の數、萬なれば千人に當る。

㋨故基。ふるき遺跡。

㋩淵然。水の深靜にたとふるなり、ふかくしづかなること。

㋪提挈。たがひにたすけあふこと。

㋫光明藏。人々自己の光明藏なり、神通光明にて因果異なく、凡聖源を同じうするを藏とするか。

㋬索爾。不安のこと、おそるるの體。

㋭不可犯干。おかすべからず、天眞にして妙なるをいふ。

攪拳。犀顱虎眸。美髯遶レ頰。雲詞電機。霹靂爲レ舌。邪宗墮傾。魔膽破裂。須臾清明。光風霽月。叢林驚慄。蹴踏龍象。不レ可ニ係羈一。逸氣邁往。我不レ得レ濟。大地是浪。忽然現前。清機歷レ掌。

玄沙備禪師畫像贊

根門有レ功。則是心外見レ法。用處換レ機。則是問時有レ答。問答交馳。摸ニ索大道一。心法對峙。破ニ碎眞如一。異哉此老。超ニ出兩途一。亡僧面前。波全露レ水。猛虎鬚畔。光自照レ珠。衲僧不レ解。如ニ井觀レ驢。

栴檀大悲贊

予四十二臂の觀世音菩薩の像を蓄ふ。目精を護するが如く、毎に戴いて以て ㋓ 行道す。今以て其の友、李天輔に授く。之が贊を爲りて曰く、

汝意有レ言。枯杌作レ鬼。我心不レ生。觀髏卽水。乃知 ㋔ 妄覺。一法成レ二。湛然圓明。百千一耳。稽首大士。應レ物而形。隨ニ其大小一。如ニ谷答レ聲。千臂執持。千目觀照。以ニ無心一故。受用俱妙。譬如ニ青春。藏ニ於花身一。因ニ其枝葉一。㋕ 踈密精神。唯此瑞相。四十二臂。不レ越ニ徑寸一。莊嚴畢備。清淨寶目。或慈或威。如欲レ擧レ足。華輪承レ之。碧螺之間。有ニ備儼容一。如下蚊蝱蟲。巢中蚊睫中。隱ニ于石間一。顯ニ出蚌蛤一。以ニ無礙慈一。不レ擇ニ淸濁一。我觀ニ震旦一。種性猛利。由ニ聞慧一入ニ甘露滅地一。願加ニ被我一。障盡心開。如ニ觀世音一。無礙辯才。我說ニ此偈一。萬像合掌。何以無礙。蔽レ空作レ響。

㋖ 源禪師贊

十年積翠侍立。學ニ得眼橫鼻直一。平生氣壓ニ叢林一。問着左科背聽。一庵深藏ニ霹靂舌一。從教萬像自分說。百非四句無レ處レ蹲。孤風照レ人衆星月。

㋗ 明白菴銘 并序

予、世緣深重にして、㋘ 夙習 ㋙ 羈縻にして、好んで古今の治亂是非成敗を論ず。交遊多く之を譏呵す。獨り陳瑩中曰く、「道に於て初より相妨げず、之を山川の烟雲あり、草木の華滋あり、所謂秀媚精進なるに譬ふ。」と、予、心に其戲なるを知るも、然も之を爲すこと已まず。大觀元年の春、菴を臨川に結び、名づけて明白と曰ふ。痛く自ら治めんことを欲す。瑩中之れを聞いて、偈を以て寄せらるゝに曰く、「庵中不レ着毗耶座。亦許ニ靈山問レ法人一。便謂世間憎愛盡。㋚ 揮レ眉出レ社有レ誰瞋。」是に於て隄岸輙ち決す。又復た袞袞として言多し。然も竟に此に坐して ㋛ 罪を得て九死を出でゝ僅かに生ず。恨らくは識微を知らず、道習に勝へざることを。乃ち魂魄を收招し、初心を料理す。之が銘を爲りて曰く、

㋖ 源禪師。四明、定水の人、徑山愚に嗣ぐ。

㋗ 明白庵銘。洪覺範の庵室、臨川府にあり。

㋘ 夙習。前世からの業緣に。

㋙ 羈縻。縻ははなづらで、まとはれること。

㋚ 揮眉。眉を揮ふ。覺範流竄せられたことがある。

㋐ 如火火聚。火火のあつまりじやほどに、背觸ともに非也。

㋑ 雲門。匡眞。

㋒ 富鄭公。此の傳、前に出づ。

㋓ 蔣山。太平興國禪寺、鍾廉上元府にあり、十刹第一、開山は寶誌和尙。

㋔ 大觀三年。宋徽宗の年號、日本鳥羽天皇天仁二年。

㋕ 峙。高き丘なり。

㋖ 行道。看經行道。

㋗ 妄覺。妄想迷覺にて、煩惱有爲の根本也。

㋘ 踈密。あらきとこまやかなる。と。

雷霆發レ聲。萬國春曉。聞者不レ言。心得意了。木落霜清。水歸沙在。忽然震驚。聞者駭怪。合二妙日用一。如二春雷震一。背二覺塵勞一。如二冬震驚一。萬機俱罷。隨レ緣放曠。尙無二了知一。安有二倒想一。永惟二此恩一。妍二味其旨一。一庵收レ身。以レ時臥起。語默不レ昧。絲毫弗レ差。㊅蒙雜而著。隨乎二于嘉一。

延福㊁鐘銘幷序

㊀梁武帝、㊁寶公の神力を假りて地獄の相を見て問ふ、「何を以てか之を救はん。」寶公の曰く、「衆生の定業は卽ち滅すべからず、唯鐘聲を聞けば其の苦暫く息む耳。」武帝是に於て天下の佛廟に詔して、鐘を擊たしむ。其聲の㊂舒徐するに當つて、以て苦を佇めんと欲するなり。宜豐の李某、弟の某と、延福院に大鐘を施して、母夫人某氏の㊃壽祺を資延し、且つ夙障を雪がんことを願ふ。予施す所を知れりと以謂へり。晉の許遜、白日に仙し去る。天の詔書に曰く、「汝が先祖に事へざるの罪を赦す、藥を施し水を呪するの功を佳とす、夫れ藥を施し水を呪するは、人を苦より脫するものなり。」と。唐の崔祐甫、本とより貴くして且つ壽あり、情に任せて煞戮囚繫して釋さざるを以て、遂に壽せず囚繫煞截す、人を苦に置くものなり。嗚呼、壽は固に象なし、人の苦を脫すれば則ち增す、人を苦に置けば則ち損す。鐘の功利、博大㊄昭著なるもの

㊅蒙雜。蒙昧と同じ、道理にくらく、雜用心の意か。
㊁鐘。鐘に三種あり、大鐘、殿鐘及び堂鐘也。大鐘は闔山の諸堂に號令する也。今はこの大鐘ないふ歟。
㊀梁武帝。嘗つて、達磨に問法して有名なり。
㊁寶公。誌公和尙。
㊂舒徐。ぼんぼんとなるひびき。
㊃壽祺。壽はいのち長きなり、祺はさいはひなり、安樂たたすけのばすことをいのる也。

なり。之を以て施を爲す。某の人、罪滅し壽延ぶると、理に固に然るものなり。之が銘を爲りて曰く、

衆生大夢營二黑業一。玲瓏擊撞與開レ睫。功德之大吾敢喋。願移二慈母一離二障結一。如二聲度レ垣卽超越一。孝哉㊆伯仲但勇逸。依二仗佛力一等痛切。如下取二㊇寓物一執㊈卷牒。願壽慈母春在レ㊉脥。如二鐘常撞無二盡竭一。政和甲午夏五月、誰爲二之銘一㊋甘露滅。

梅檀白衣觀世音像贊幷序

筠州太平寺の泗州院の僧元鑑が苦ふる所の觀世音菩薩の像、慈嚴妙麗にして靈異殊勝なり、上天竺に見る所の者の如し。問ふ、「何れよりしてか之を得たる。」鑑の曰く、「始め客あり舟に載せて至る、數家に傳ふるに家輒ち禍至る、滅亡するもの皆畏れて敢て迎へず、獨り吾れ迎へて之に事ふるに而も異なし。」予曰く、「昔廬山の文殊師利の像、肯て寒溪に留らずして、㊌遠公に隨つて東林に歸ることを喜び、金陵の彌勒の像、肯て景德に留らずして夢に舒王に見えて、居を華藏に求む。今此の像、乃ち獨り鑑に寓する、是れ皆菩薩と大因緣あり、然らずんば聖心豈擇ぶところありて之を避就せんや。」之が贊を爲りて曰く、

㊆昭著。明らかにあらはれる。
㊇伯仲。兄弟。
㊈寓。ことをよせるなり、寓意などのるねか。
㊉卷牒。卷は書册也、牒は度牒也。共に書類の意。
㊋脥。頰の俗字なり、ほほ。
㊌甘露滅。覺範の齊號なり。
㊍遠公。惠遠法師。

我聞菩薩昔因地。所ニ供養一佛名ニ觀音一。從ニ㋐聞思修一而悟レ心。心精遠レ聞而得レ道。見聞覺知不レ可レ易。譬如ニ西北輿ニ東南一。而此乃曰ニ聞可レ遺。令ニ人惘然墜ニ疑惘一。龍本無レ耳聞以レ神。蛇亦無レ耳聞以レ眼。牛無レ耳故聞以レ鼻。螺蟻無レ耳聞以レ身。六根手用乃如レ此。聞不レ可レ遺豈理哉。彼於ニ異類昧劣中一。而亦精妙不ニ間斷一。況我自在慈忍力。無礙解脫獨不レ然。鼓鐘俱擊聲不レ同。知ニ其不レ同是生滅。而二種聲不ニ相參一。卽是同時寂滅法。稽首淨智功德聚。廣大莊嚴悲願海。憫ニ我心明力不レ迨。時時種子發ニ現行一。如下人因レ酒而發狂。誡レ飲輙復逢㋑佳醞。願滅ニ顚倒癡暗障一。願獲ニ辯才智慧藏一。游ニ戲十方微塵刹一。亦施ニ無畏一利ニ衆生一。凡曰ニ有レ心能聞一者。同入ニ圓通三昧海一。

照默眞贊一首

衲子無レ處ニ摸索一。畫師筆筆畫着。山僧醉眼難レ憑。付ニ與衆人一彈駁。似則打ニ煞靈源一。不レ似輕子燒却。

㋒觀音菩薩畫像贊并序

大觀四年の春二月戊子の夕、病比丘慧洪㋓纍然として縲紲の中に臥す。夢に一處に至る、庭宇㋔闃然たり。僧あり、導いて密室の中に入る。燭を擧げて壁間を視るに、鐘山の寶公菩薩の像あり、意に忻然として之を得んことを欲す。而して像輙ち自ら手中に墮つ。復た展べて之を視れば、則ち化して十二面の觀音慈嚴の相と爲る、心に大に驚異す、遂に覺れば三鼓なり。三月甲辰、南州の德逢上人書を以て來訊し、且た曰く、「我れ衣鉢を以て僧を遣はして漣水に詣し、觀世音の像を畫く。其の莊嚴に至つては天下に妙なるの手なり。」慧洪前の事を追憶して、其の像を遣はすの日を問へば、乃ち其の夢を得るの夕なり。因つて自ら菩薩大悲等慈を以て、哀憐照臨是くの如く昭著なることを感嘆す、其れ何の恩何の德か能く之を報せんや、唯、筆舌言辭を以て海の深きに喩へ、日の明かなるに誇らんのみ。謹んで稽首して之が贊を爲りて曰く、

稽首淨聖甘露門。無量聖身徧ニ沙界一。應ニ諸衆生心所求一。譬如ニ春色花㋕萬卉一。西方肅然憂愁地。故住ニ㋖寶陀落迦山一。此方敎體在ニ音聞一。故稱レ名者得ニ解脫一。一切衆生煞心盛。瘂暗不レ見不ニ發心一。故現ニ鷹巢蚌蛤中一。亦作ニ畫師一畫ニ其像一。菩薩豈有ニ種種心一。皆其悲願力如レ是。何人毫端寄ニ逸想一。幻ニ出百福莊嚴身一。屹然欲レ動千光集。譬如レ將レ回ニ紫金山一。湛然欲レ瞬㋗衆好生。譬如レ欲レ拆ニ青蓮華一。蠻奴水王來獻レ誠。想見細雨天花落。衆生五濁熱惱中。色欲愛見所ニ熏蒸一。忽然覩ニ此寶月相一。一切毛孔皆清涼。成ニ此不思議功德一。皆因ニ上人心所獻一。願我早熏知見香一。願我恒被ニ慈忍服一。願

㋐聞思修。この三つは觀音の三昧なり。
㋑觀音。觀音は阿婆盧吉帝濕代羅といひ、觀自在、觀世音と譯す。補所の大士なり。
㋒纍然。とらはれのみを云ふ、つなぐの意なり。
㋓闃然。しづかなること。
㋔蕪。草木の總名。
㋕寶陀落迦山。又は補陀落山、觀音の住し給ふ淨土。
㋖衆好生。衆生のこと。

魔障山速崩裂。願大智慧常現前。心精遺レ聞證二圓通一。自然淨極光通達。我當定如二觀世音一。一切衆生願如レ我。

甘露滅齋銘并序

政和四年の春、予海外より還り衡岳を過ぎ、方廣の寒禪師に謁して、靈源閣の下に館す。因つて其の居を名づけて甘露滅と曰ふ。道人法太、其說を曉さんことを請ふ。予の曰く、「㊀三祖は北齊の㋐天平二年、法を少林に得て皖公に隱る、身を終るまで姓氏を言はず。老安は隋の文帝㋑開皇七年、天下私度の僧尼を括つて驗勘す。安曰く『本と名なし、』遂に嵩山に遁る。二老名迹の累を厭ひ、其の道を精一にすること、蓋し此くの如し。予寔に之を慕ふ。」乃ち之が銘を爲りて曰く、

吾聞甘露。食レ之長生。而寂滅法。乃有二此名一。寂滅而生。

❶谷レ神不レ死一。唯佛老君。其意二謂此一。我本超放。憂患纏レ之。今知レ脫矣。鬚髮㋒伽梨。安遁二嵩山一。㋓粲逃二潛霍一。是故覺範。老二于衡岳一。山失二孤峻一。玉忘レ無レ瑕。當下令二舌本一。吐青蓮華上。

漁父六首

玉帶㋔雲袍㋕童頂露。一生笑傲知何故。萬里廻來方㋖旦暮。休二漁父六首一。

㊀三祖。僧璨大師。
㋐天平二年。日本の宝亀天皇元年に當る。
㋑開皇七年。日本の崇峻天皇元年に當る。
❶谷レ神不レ死。谷は養ふなり。老子經に出づる語。
㋒伽梨。袈裟の梵語なり、僧伽梨といふの略。
㋓粲。僧璨大師。

鼓一。忽共二老安一相耳語。還推去莫二來㋗闌一。我毬門路一。

野鶴神情雲格調。逼レ人氣韻霜天曉。松下殘經看未了。當二斜照一蒼煙風掀流泉繞。閑閣珍奇徒照耀。光無二滲漏一方靈妙。活計現成誰管紹。孤峰表一聲月下聞二清嘯一。

來二往獨龍崗下路一。杖頭落索閑家具。後事前觀如二目覩一。非二識語一須レ知。一念無二古今一。長笑老簫多二病苦一。笑中與レ藥皆狼虎。蠟炬一枝非二囑付一。聊戲レ汝。熱來脫二却孃生袴一。

❷講處天花隨二玉麈一。波心月在那能取。旁含老師偷嘗注。廻レ頭覷虛空特地能言語。歸對二學徒一重自訴。從前見解都欺レ汝。隔レ岸有レ山橫二暮雨一。飄然去千巖萬壑無二尋處一。

❸畫餅充レ飢人笑レ汝。一花歸捕二南陽塢一。擊レ竹作レ聲方惺悟。徐回顧本來面目無二藏處一。却望二潙山一敷二坐具一。老師頭角渾呈露。珍重此恩遙二父母一。須二薦取一堂堂密密聲前句。

❹不レ怕二石頭行路滑一。歸來那受二駒兒踏一。言下百骸俱潑撒。無二剩法一靈然晝夜光通達。古寺天寒還惡發。夜將二木佛一齊燒殺。炙レ背橫眠眞快活。悲抹搓從敕院主無二鬚髮一。

㋗闌。さへぎる。
㋘この偈は恩生嚴畔の句を本として諷したるなり。
㋙この偈は香嚴の擊竹投機を諷したるなり。
㋚この偈は丹霞燒佛を諷したるなり。

國譯新編林間後錄 終

石門洪覺範林間錄序

臨川謝逸撰

洪覺範得自在三昧於雲庵老人、故能游戲翰墨場中、呻吟聲欬皆成文章、每與林間勝士、抵掌清談、莫非尊宿之高行、叢林之遺訓、諸佛菩薩之微旨、賢士大夫之餘論、每得一事、隨卽錄之、垂十年間得三百餘事、從其游者本明上人、外若簡率、而內甚精敏、燕坐之暇、以其所錄析爲上下秩、名之曰林間錄、因其所錄有先後、故不以古今爲詮次、得於談笑、而非出於勉强、故其文優游平易、而無艱難險阻之態、人皆知明之有是錄也、所至之地、借觀者成市、明懼字畫漫滅而傳寫失眞、於是刻之於板、而俾余爲序以壽後世焉、余謂斯文之作、有補於宗敎、如儉歲之粱稷、寒年之繒纊、豈待余序然後傳哉、願託斯文以傳不朽、此余所以欲默而不能也、昔樂廣善清言、而不長於筆、請潘岳爲表、先作二百語、以述己之志、岳取而次比之、便成名筆、時人咸云、若廣不假岳之筆、岳不假廣之旨、無以成斯美也、今覺範口之所談、筆之所錄、兼有二子之美、何哉、大抵文士、有妙思者、未必有美才、有美才者、未必有妙思、惟體道之士、見亡執謝、定亂兩融、心如明鏡、遇物便了、故縱口而談、信筆而書、無適而不眞也、然則覺範所以兼二子之美者、得非體道而然耶、余是以知、士不可不知道也、覺範、名慧洪、筠陽人、今住臨川北景德禪寺、蓋赴

顯謨閣待制朱公之請云、大觀元年十一月一日序。

石門洪覺範林間錄卷上

杭州興教小壽禪師、初隨天台韶國師、普請聞墮薪而悟、作偈曰、撲落非他物、從橫不是塵、山河及大地、全露法王身、國師頷之而已、及開法、衲子爭師會之、御史中丞王公隨出鎮錢塘、往候壽、至湖上、去騶從、獨步登寢室、壽方負暄、衣自若、忽見之、問曰、官人何姓、王公曰、隨姓王、即拜之、壽推蒲團、籍地而坐、語笑終日而去、門人見壽讓之曰、彼王臣來、柰何不爲禮、此一衆所係、非細事也、壽唯唯、佗日王公復至、寺衆橫撞大鐘、萬指出迎、而壽前趍立于松下、王公望見、出與握其手、曰、何不如前日相見、而遽爲此禮數耶、壽顧左右、且行且言曰、中丞即得、柰知人也。

白雲端禪師有逸氣、少游湘中、時會禪師新自楊岐來居雲蓋、一見心奇之、與語每終夕、會忽問曰、上人落髮師爲誰、對曰、茶陵郁和尚、會曰、吾聞其過溪有省、作偈甚奇、能記之否、端即誦曰、我有神珠一顆、久被塵勞關鎖、今朝塵盡光生、照破山河萬朶、會大笑而去、端愕然左右視通夕不寐、明日求入室、咨詢其事、時方歲旦、會曰、汝見昨日作夜狐者乎、對曰、見之、會曰、汝一籌不及渠、端又大駭曰、何謂也、會曰、渠愛人笑、汝怕人笑、端因大悟於言下。

魏府老元華嚴示衆曰、佛法在日用處、在行住坐臥處、喫茶契飯處、語言相問處、所作所爲、舉心動念、又却不是也、又曰、時當減減、人壽少有、登六七十者、汝輩入我法中、整頓手脚未穩、早

是三四十年、須臾衰病至、衰病至則老至、老至則死至、前去幾何、尙復恣意、何不初中後夜純靜去、文潞公鎭北京、元公來謁別、潞公曰、法師老矣、復何往、對曰、入滅去、潞公笑謂其戲語、目送之歸、與子弟言、其道韻深穩、談笑有味、非常僧也、使人候之、果入滅矣、大驚嘆異久之、及閱維、親往臨觀、以瑠璃餅置坐前、祝曰、佛法果靈、願舍利塡吾瓶、言卒煙自空而降、布入瓶中、烟滅舍利如所願、潞公自是竭誠內典、恨知之暮也、

棲賢諶禪師、建陽人、嗣百丈常和尙、性高簡、律身精嚴、動不違法度、暮年三終藏經、以坐閱爲樂、尙定從天人中來、叢林標表也、雪竇顯禪師嘗自淮山來依之、不合乃作師子峰詩、而去曰、踞地盤空勢未休、爪牙安肯混常流、天敎生在千峰上、不得雲雷出頭。

李肇國史補曰、崔趙公問徑山道人法欽、弟子出家得否、欽曰、出家是大丈夫事、非將相所爲、趙公嘆賞其言、贊寧作欽傳、無慮千言、雖一報曉雞死、且書之、乃不及此何也、

大覺禪師璉公、以道德爲仁廟所敬、天下想望風采、其居處服玩可以化寶坊也、而皆不爲獨於都城之西、爲精舍容百許人而已、棲賢舜老夫爲郡吏臨以事民、其衣、走依璉、璉館於正寢、而自處偏室、執弟子禮甚恭、王公貴人來候者皆惟之、璉具以實對、且曰、吾少嘗問道於舜、今不當以像服之殊而二吾心也、聞者嘆服、　仁廟知之、賜舜再落髮、仍居栖賢、

唐宣宗微時、武宗疾、其賢數欲殺之、官者仇公武保佑之、事迫公武、爲薙髮作比丘、使逸游、故天下名山多所登賞、至杭州鹽官、禪師安公者、江西馬祖之高弟、一見異之、待遇特厚、故宣宗留鹽官最久、及即位、思見之、而安公化去久矣、先是武宗盡毀吾教、至是復興之、雖法之隆替系於時、然庸詎知其力非安公致之耶、仇公武之德不愧漢邴吉、而新書略之、獨班班見於安禪師傳、爲可嘆也、嘗有贊其像者曰、已將世界等微塵、空裏浮華夢裏身、勿謂龍顏便分別、故應天眼識天人、

贊寧作大宋高僧傳、用十科爲品流、以義學冠之、已可笑、又列嵩頭陀禪師爲苦行、智覺壽禪師爲與福雲門大師僧中王也、與之同時、竟不載何也、

長沙岑禪師因僧亡、以手摩之曰、大衆此僧却眞實爲諸人提綱商量、會麽、乃有偈曰、目前無一法、當處亦無人、蕩蕩金剛體、非妄亦非眞、又曰、不識金剛體、却喚作緣生、十方眞寂滅、誰在復誰行、雪峰和尙亦因見亡僧作偈曰、低頭不見地、仰面不見天、欲識金剛體、但看髑髏前、玄沙曰、亡僧面前正是觸目菩提、萬里神光頂後相、有僧問法眼、如何是亡僧面前觸自菩提、答曰、是汝面前、又問、遷化向什麽處去、答曰、亡僧幾曾遷化、進曰、爭奈卽今何、答曰、汝不識亡僧、近代尊宿不復以此旨曉人、獨晦堂老師時一提起、作南禪師圓寂日偈曰、去年三月十有七、一夜春風掀籌室、三角麒麟入海中、空餘片月波心出、眞不掩僞、曲不藏直、誰人爲和雪中吟、萬古知音是今日、又曰、昔人去時是今日、今日依前人不來、今既不來昔不往、白雲流水空悠悠、嗟、誰云秤尺平、直中還有曲、誰云物理齊、秤麻還得粟、可憐馳逐天下人、六六元來三十六、

南禪師居積翠時、以佛手驢脚生緣語問學者、答者甚衆、南公冥目如入定、未嘗可否之、學者趨出竟莫知其是非、故天下謂之三關語、晚年自作偈三首、今只記其二、曰、我手佛手齊舉、禪

流直下鷹取不動干戈道處自然超佛越祖我脚驢脚並行步步皆契無生直待雲開日現此道方得從橫雲蓋智禪師嘗爲予言曰昔日再入黃檗至坊塘見一僧自山中來因問三關語兄弟近日如何商量僧曰有語甚妙可以見意我手何似佛手曰月下弄琵琶或曰遠道擎空鉢我脚何似驢脚曰鷺鷥立雪非同色或曰空山踏落花如何是汝生緣處曰某甲某處人時戲之曰前途有人問上座如何是佛手驢脚生緣意旨汝將遠道擎空鉢對之耶鷺鷥立雪非同色對之耶若俱將對則佛法混濫若揀擇對則機事偏枯其僧直視無所言吾謂曰雪峰道底

夾山會禪師初住京口竹林寺升座僧問如何是法身答曰法身無相如何是法眼答曰法眼無瑕時道吾笑於衆中會遙見因下座問曰上座適笑笑何事耶道吾曰笑和尚一等行脚放複子不著所在會曰能爲我說否對曰我不會說秀州華亭有船子和尚可往見之會因散衆而往船子問曰大德近住何寺對曰寺則不住住則不寺船子曰不寺似箇什麼對曰不是目前法船子曰何處學得來對曰非耳目所到船子笑曰一句合頭語萬劫繫驢橛嗟乎於今叢林師授弟子例皆禁絕悟解推去玄妙唯要直問直答無則始終言無有則始終言有毫末差誤謂之狂解使船子聞之豈止萬劫繫驢橛而已哉由此觀之非特不善悟要亦不善疑也善疑者必思三十三祖授法之際悟道之緣其語言具在皆可以理究以智知獨江西石頭而下諸大宗師以機用應物觀其問答冥涬然令人坐睡其道異諸祖耶則嗣其法其不異耶則所言乃爾不同故知臨濟大師曰大凡舉論宗乘須一句中具三玄一玄中具三要有玄有要者蓋明此也不知者指爲門庭建立權時語言可悲也

天衣懷禪師說法於淮山三易法席學者追崇道顯著矣然猶未敢通名字于雪竇雪竇已奇之僧有誦其語至曰譬如鴈過長空影沈寒水鴈無遺蹤之意水無沈影之心因搏髀嘆息即遣人慰之懷乃敢一通狀問起居而已潙山眞如禪師從眞點胸游最久叢林戶知之然對客未嘗一言及其平昔見聞之事至圓寂日展畫像但薦茶果而已二大老識度甚遠退託涼薄以諷後學可謂善推尊其師者也

雲庵和尚居洞山時僧問華嚴論云以無明住地煩惱使爲一切諸佛不動智一切衆生皆自有之只爲智體無性無依不能自了會緣方了且無明住地煩惱如何便成諸佛不動智理極深玄絕難曉達雲庵曰此最分明易了解時有童子方掃除呼之回首雲庵指曰不是不動智却問如何是汝佛性童子左右視惘然而去雲庵曰不是住地煩惱若能了之即今成佛又嘗問講師曰火災起時山河大地皆被焚盡世間空虛是否對曰敎有明文安有不是之理雲庵曰如許多灰燼將置何處講師舌大而乾笑曰不知雲庵亦大笑曰汝所講者紙上語耳其樂說無礙之辨答則出人意表問則學者喪氣蓋無師自然之智非世智可當眞一代法施主也

二祖大師服勤累年至於立雪斷臂而達磨僅以一言語之牛頭懶融枯禪窮山初無意於有聞而四祖自往說法祖師之於師弟子之際其必有旨耶

楊文公談苑記沙門寶誌銅牌記讖未來事云有一眞人在冀川開口張弓在左邊子子孫孫萬萬年江南中主名其子曰弘冀吳越錢鏐諸子皆連弘字期以應之而　宣祖之諱正當之

也。又記周世宗悉毀銅像鑄錢。謂宰相曰。佛教以謂頭目髓腦有利於衆生。尚無所惜。寧復以銅像愛乎。銅州大悲甚靈。應當擊毀。以斧擊其胸。鑿破之。太祖親見其事。後世宗北征病疽發胸間。咸謂其報應。太祖因信重釋教。歐陽文忠公歸田錄首記太祖初幸相國寺。問僧錄贊寧。可拜佛否。寧奏曰。不拜。問其故。寧曰。見在佛不拜。過去佛。因以爲定制。二公所記皆有深意。決非苟然。予聞君子樂與人爲善。雖善不善謂之矜。文忠公每恨平心難。豈眞然耶。

唐僧元曉者海東人。初航海而至將訪道名山。獨行荒陂。夜宿塚間。渴甚。引手掬水于穴中得泉甘涼。黎明視之。髑髏也。大惡之。盡欲嘔去。忽猛省嘆曰。心生則種種法生。心滅則髑髏不二。如來大師曰。三界唯心。豈欺我哉。遂不復求師。卽日還海東。疏華嚴經。大弘圓頓之敎。予讀其傳至此。追念晉樂廣酒盃蛇影之事。作偈曰。夜塚髑髏元是水。客盃弓影竟非蛇。箇中無地容生滅。笑把遺編篆縷斜。

棗栢大士。淸涼國師。皆弘大經。造疏論。宗於天下。然二公制行皆不同。棗栢則跣行不濯。超放自如。以事事無礙行。心淸涼則精嚴玉立。畏五色蠱。以十願律身。評者多喜棗栢。坦宕。笑淸涼縛束。意非華嚴宗所宜爾也。予曰。是大不然。使棗栢薙髮作比丘。未必不爲淸涼之行。蓋此經以遇緣卽宗。合法。非如餘經有局量也。

晉鳩摩羅什兒時。隨母至沙勒。頂戴佛鉢。私念鉢形甚大。何其輕耶。卽重失聲下之。母問其故。對曰。我心有分別。故鉢有輕重耳。予以是知。一切諸法隨念而至。念未生時。量同大虛。然則卽今見行分別者。萬類紛然。何故靈驗不等。曰。是皆亂想虛妄。如困夢中事。心力昧畧。微劣故也。

嗟乎。人莫不有忠孝之心也。而王祥臥冰則魚躍。耿恭祝井則泉何冽也。蓋其養之之專故。靈驗之應速如影響。

菩提達磨初自梁之魏。經行於嵩山之下。倚杖於少林。而壁燕坐而已。非習禪也。久之人莫測其故。因以達磨爲習禪。夫禪那諸行之一耳。何足以盡聖人。而當時之人以之爲史者。又從而傳。玆習禪之列。使與枯木死灰之徒爲伍。雖然聖人非止於禪那。而亦不違禪那。如易出乎陰陽。而亦不違乎陰陽。

舊說四祖大師居破頭山。山中有無名老僧。唯植松。人呼爲栽松道者。嘗請於祖曰。法道可得聞乎。祖曰。汝已老。脫有聞。其能廣化耶。儻能再來吾尙可。遲。汝。乃去。行水邊見女子浣衣。揖曰。寄宿得否。女曰。我有父兄。可往求之。曰。諾。我卽敢行。女首肯之。老僧回。策而去。女周氏季子也。歸輒孕。父母大惡。逐之。女無所歸。日庸紡里中。夕於衆館之下。已而生一子。以爲不祥。棄水中。明日見之。泝流而上。氣體鮮明。大驚。遂舉之。成童。隨母乞食。邑人呼爲無姓兒。四祖見於黃梅道中。戲問之曰。汝何姓。曰。姓固有。但非常姓。祖曰。何姓。曰。是佛性。祖曰。汝乃無姓耶。曰。姓空故無。祖化其母。使出家。時七歲。衆館今爲寺。號佛母。而周氏尤盛。去破頭山。佇望間。道者肉身尙在。黃梅東禪有佛母塚。民塔其上。傳燈錄定祖圖記。忍大師姓周氏者。從母姓也。大宋高僧傳乃曰。釋弘忍姓周氏。其母始娠。移月光照庭室。終夕若晝。異香襲人。舉家欣駭。安知衆館本社屋生時置水中乎。又曰。其父偏愛因令誦書。不知何從得此語。其敘事妄誕大率類此。開元中文學閭丘均爲塔碑。徒文而已。會昌毀廢。唐末烽火。更遭蹂踐。愈不可考。知其書謬者。母氏周

而曰有父故也無爲子嘗贊其像曰人孰無父祖獨有母其母爲誰周氏季女濁港滔滔入大江門前依舊長安路。

斷際禪師初行乞於雒京吟添鉢聲一嫗出棘扉間曰太無厭足生斷際曰汝猶未施反責無厭何耶嫗笑掩扉斷際異之與語多所發藥辭去嫗曰可往南昌見馬大師斷際至江西而大師已化去聞塔在石門遂往禮塔時大智禪師方結廬塔傍因叙其遠來之意願聞平昔得力言句大智舉一喝三日耳聾之語示之斷際吐舌大驚相從甚久暮年始移居新吳百丈山考其時嫗死久矣而大宋高僧傳曰嫗祝斷際見百丈非也。

雲居佛印禪師曰雲門和尚說法如雲絕不喜人記錄其語見必罵逐曰汝口不用反記我語佗時定販賣我去今對機室中錄皆香林明敎以紙爲衣隨所聞隨卽書之後世學者漁獵文字語言中正如吹網欲滿非愚卽狂可嘆也。

玄沙備禪師薪於山中傍僧呼曰和尚看虎玄沙見虎顧僧曰是儞靈潤法師山行野燒迅飛而來同游者皆避之潤安步如常曰心外無火火實自心謂火可逃無由免火火至而滅嚴陽尊者單丁住山蛇虎就手而食歸宗常公刈草見蛇芟之傍僧曰久聞歸宗今日乃見一龐行沙門常曰儞龐我龐耶吾聞親近般若有四種驗心謂就事就理入就事理出就事理之外宗門又有四藏鋒之用親近以自治藏鋒之用以治物。

荊州天皇寺道悟禪師如傳燈錄所載則曰道悟得法於石頭所居寺曰天皇葵州東陽人姓張氏年十四出家依明州大德披剃年二十五杭州竹林寺受具首謁徑山國一禪師服勤五年大歷中抵鍾陵謁馬大師經二夏乃造石頭元和丁亥四月示疾壽六十臘三十五及觀遠觀禪師所集五家宗派則曰道悟嗣馬祖引唐丘玄素所譔碑文幾千言其略曰師號道悟渚宮人姓崔氏卽子王後胤也年十五於長沙寺禮曇翥律師出家二十三詣嵩山律德得尸羅謁石頭扣寂二年無所契悟乃入長安親忠國師三十四與侍者應眞南還謁馬大師大悟於言下祝曰他日莫離舊處故復還渚宮元和十三年戊戌歲四月初示疾十三日歸寂壽八十二臘六十三考其傳正如兩人然玄素所載曰有傳法一人崇信住澧州龍潭南嶽讓禪師碑唐閑人歸登撰列法孫數人于後有道悟名圭峰答裴相國宗趣狀列馬祖之嗣六人首曰江陵道悟其下注曰兼稟徑山今安以雲門臨濟二宗競者可發一笑。

草堂禪師牋要曰心體靈知不昧如一摩尼珠圓照空淨都無差別之相以體明故對物時能現一切色相色自差而珠無變易如珠現黑時人以珠爲黑者非見珠也離黑覓珠者亦非見珠也以明黑都無爲珠者亦非見珠也馬祖說法卽妄明眞正如以黑爲珠神秀說法令妄盡方見覺性者離妄求眞正如離黑覓珠牛頭說法一切如夢本來無事眞妄俱無正如明黑都無爲珠獨荷澤於空相處指示知見了了常知正如正見珠體不顧衆色也密以馬祖之道如珠之黑是大不然卽妄明眞方便語耳略知敎乘者皆了之豈馬祖應聖師遠讖爲震旦法主出其門下者如南泉百丈大淺歸宗之徒皆博綜三藏熟爛眞妄之論爭服膺師尊之而其道乃止於如珠之黑而已哉又以牛頭之道一切如夢眞妄俱無者是大不然觀其作心王銘曰剎際如空知處迷宗分明照境隨照冥濛從橫無照最微最妙知法無知無知知要一一皆治

知見之病、而荷澤公然立知見、優劣可見、而謂其道如明黑都無爲、珠者、豈不重欺吾人哉、至如北秀之道、頓漸之理三尺童子知之、所論當論其用心、秀公爲黃梅上首、頓宗直指從曰機器不逮、然亦飫聞佗參矣、豈自甘爲漸宗徒耶、蓋祖道于時疑信半天下、不有漸何以顯頓哉、至於紛爭者皆兩宗之徒、非秀心也、便謂其道止如是、恐非通論、吾聞、大聖應世成就法道、其權非一、有顯權有冥權、冥權卽爲異道、爲非道、顯權則爲親友、爲知識、庸詎知秀公非冥權也哉。

唐僧復禮有法辯、當時流輩推尊之、作眞妄偈、問天下學者曰、眞法性本淨、妄念何由起、從眞有妄生、此妄何所止、無初卽無末、有終應有始、無始而無終、長懷懵玆理、願爲開玄妙、析之出生死、清涼國師答曰、迷眞妄念生、悟眞妄卽止、能迷非所迷、安得長相似、從來未曾悟、故說妄無始、知妄本自眞、方是恒妙理、分別心未忘、何由出生死、圭峰禪師答曰、本淨本不覺、由斯妄念起、知眞妄卽空、知空妄卽止、止處名有終、迷時號無始、因緣如幻夢、何終復何始、此是衆生源、窮之出生死、又曰、人多謂眞能生妄、故妄不窮盡、爲決此理、重答前偈曰、不是眞生妄、妄迷眞而起、悟妄本自眞、知眞妄卽止、妄止似終末、悟來似初始、迷悟性皆空、皆空無終始、生死由此迷、達此出生死、予味二老所答之辭、皆未副復禮問意、彼問眞法本淨、妄念何由而起、但曰迷眞不覺、則孰不能答耶、因爲明其意、作偈曰、眞法本無性、隨緣染淨起、不了號無明、了之卽佛智、無明全妄情、知覺全眞理、當念絕古今、底處尋終始、本自離言詮、分別卽生死。

雲庵和尙嘗曰、諸佛隨宜說法、意趣難解、如起信曰、若有衆生來求法者、隨己能解方便爲說、不應貪著名利恭敬、唯念自利利他、回向菩提、故者爲弘法太峻者、言之也、圓覺曰、末世衆生欲修行者、應當盡命供養善友、事善知識、彼善知識欲來親近、應斷瞋恨、現逆順境、猶如虛空者、爲求道不精進者、言之也、雖然爲弟子者、能不忘精進、則爲師者不害於太峻、方今學者未能盡致敬之禮、而責以慳法、則過矣、侍者進曰、然則三世如來法施之式、可得聞乎、曰、法華曰、於一切衆生、平等說法、以順法故、不多不少、乃至深愛、法者亦不爲多說、此佛之遺意也。

達觀穎禪師初出東吳、年纔十六七、泊舟秦淮宿、奉先寺、時寺皆講人、見其禪者、又少之、不爲禮、穎讓曰、佛記、比丘惡客比丘、至者、法將滅、爾輩安爲之耶、有答者曰、上人卽主、此敬客未晚、穎笑曰、我願未暇、居此、然能易道行者、使飯十方僧、報佛恩耳、時內翰葉公清臣守金陵、穎袖書謁之、葉公曰、昨晚至此、何以知建寺始末之詳、如此乎、對曰、夜閱舊碑知之、因極言律居之弊敗傷風化、葉公大奇之、奉先緣是乃爲禪林、吳中講師多譏諸祖傳法、偈無譯人、禪者與之辨失其眞、適足以重其謗、穎諭之曰、此達磨爲二祖言者也、何須譯人耶、如梁武初見之卽問、如何是聖諦第一義、答曰、廓然無聖、進曰、對朕者誰、又曰、不識、使達磨不通方言、則何於是時便能爾耶、講師不敢復有辭、其挫服魔外之氣、無師自然之智發、自妙齡而遇事則應無所疑畏、天性則然、後爲石門聰之嗣、首山嫡孫也。

涅槃經迦葉菩薩白佛言、世尊如佛所說、諸佛世尊有秘密藏、是義不然、何以故諸佛世尊唯有密語無密藏、譬如幻主機關木人、人雖覩見屈伸俯仰、莫知其內而使之然、佛法不爾、咸令衆生悉得知見、云何當言佛世尊有秘密藏、佛讚迦葉善哉善哉善男子、如汝所言、如來實無

秘密之藏、何以故如秋滿月處空、顯露清淨無翳、人皆觀見、如來之言亦復如是、開發顯露清淨無翳、恐人不解謂之秘藏、智者了達則不名藏、又曰、又無語者、猶如嬰兒言語未了、雖復有語實亦無語、如來亦爾、語未了者卽秘密之言、雖有所說、衆生不解、故名無語、故石頭曰、乘言須會宗、勿自立規矩、藥山曰、更須自看、不得絕却言語、我今爲汝說者箇語、顯無語底、長慶曰、二十八代祖師皆說傳心且不說傳語、且道心作麼生傳、若也無言啓蒙、何名達者、雲門曰、此事若在言語上、三乘十二分教豈是無說、因什麼道教外別傳、若從學解機智得、只如十地聖人說法如雲如雨、猶被佛呵見性如隔羅縠、以此故知、一切有心天地懸殊、雖然如是、若是得底人、道火何曾燒着口耶、予每曰、衲子於此徹去、方知諸佛無法可說、而證言說法身、如何是言說法身、自答曰、斷頭船子下楊州。

王文公曰、佛與比丘辰巳間應供名爲齋者、與衆生接不可不齋、又以佛性故等視衆生、而以交神之道見之、故首楞嚴曰、嚴整威儀、肅恭齋法、又曰、梵語三昧、此云正定、正定中所受境界謂之正受、異於無明所緣受、故圓覺曰、三昧正受、釋者謂、梵語三昧、此云正受、而寶積云、三昧及正受、則此釋非也。

曹溪大師將入涅槃、門人行瑤超俗法海等問、和尙法何所付、曹溪曰、付囑者二十年外於此地弘揚、又問、誰人、答曰、若欲知者大庾嶺上以網取之、圭峰欲立荷澤爲正傳的付、乃文釋之曰、嶺者高也、荷澤姓高、故密示之耳、欲抑讓公爲、旁出則曰、讓則曹溪門下旁出之汎徒、此類數可千餘、嗚呼逐鹿者不見山、攫金者不見人、殆非虛語、方密公所見唯荷澤、故諸師不問是非、例皆毀之、如大庾嶺上以網取之之語、是大師末後全提妙旨、而輒以意求、讓公僧中之王、而謂之汎徒、詳味密公之意、可以發千載之一笑。

老安國師有言曰、金剛經云、應無所住而生其心、無所住者、不住色不住聲、不住迷不住悟、不住體不住用、而生其心者、卽一切法而顯一心、若住善生心卽善現、若住惡生心卽惡現、本心卽隱沒、若無所住、十方世界唯是一心、信知、曹溪大師云、風幡不動是心動、脩山主有偈曰、風動心搖樹、雲生性起塵、若明今日事、暗却本來人。

有僧問晦堂老人曰、五祖前身栽松道者、嘗託周氏女而生、彼三緣不和合、何從而生耶、老人笑曰、汝聞樹提伽生火中、伊尹生於空桑乎、對曰、聞之、汝於彼二人乃不疑、其生不由三緣、而獨疑五祖耶、方今士大夫之留意宗乘者、皆以此爲疑、及聞此語、莫不釋然、予以謂、老人所示未欲極教乘之本意、第就其機息狂情耳、馬大師曰、佛是能仁、有智慧善機宜、能破一切衆生疑網、出離有無等縛、其斯之謂歟。

宗鏡錄曰、雖然心卽是業、業卽是心、旣從心生還從心受、如何現今消其妄業報、答曰、但了無作自然業空、所以云、若了無作惡業一生成佛、又曰、雖有作業而無作者、卽是如來秘密之教、又凡作業悉是自心橫計外法、還自對治安取成業、若了心不取境、境自不生、無法牽情、云何成業、予嘗作偈釋其旨曰、舉手炷香、而供養佛、其心自知、應念獲福、舉手操刀、恣行殺戮、其心自知、死入地獄、或殺或供、一手之功、云何業報、罪福不同、皆自橫計、有如是事、是故從來、枉沈生死、雷長芭蕉、鐵轉磁石、俱無作者、而有是力、心不取境、境亦自寂、故如來藏、不許有識。

維摩經曰、入不思議境、如借座燈王取飯香土、促演其日劫大小之相容、可以神會妙旨、至曰、一切聲聞、聞是不可思議解脫法門、皆應號泣聲震三千大千世界、極難解通、首楞嚴曰、一人發眞歸源、十方虛空悉皆消殞、見道者妄盡覺明、自見空殞可也、而下文乃又曰、一切魔王見其宮殿無、故坼裂、爲難和會、古諸法師俱有注釋、校其所論未容無說。

臨濟大師建立四賓主、今徒問其語、竟莫能分辨之、知之者未必眞、不知者以爲苟然、又有四喝、一喝如金剛王寶劍、一喝如踞地師子、一喝如探竿影草、有時一喝不作、一喝用、如踞地師子探竿影草、後學往往不省其何等語、安能識其意耶、不過曰、此古人一期建立之辭耳、何足問哉、然則臨濟之言遂爲虛語也、今係其偈於此曰、金剛王劒、覿露堂堂、才涉唇吻、即犯鋒鋩、踞地師子、本無窠臼、顧佇之間、即成滲漏、探竿影草、莫入陰界、一點不來、賊身自敗、有時一喝、不作喝用、佛法大有、只是牙痛。

予游長沙、至鹿苑、見岑禪師畫像、想見其爲人、作岑大蟲贊、并序曰、如來世尊語阿難曰、汝元不知一切浮塵、諸幻化相、當處出生、隨處滅盡、幻妄稱相、其性眞爲妙覺明體、龍勝菩薩曰、諸法不自生、亦不從他生、不共不無因、是故說無生、以佛祖之辯、談心法之妙、其清淨顯露如掌中見物、無可疑者、而末世衆生卒不明了者、蓋其迷妄之極、非其所聞之習、故也、禪師憫之、故於所習之境、譬之曰、若心是生、則夢幻空華亦應是生、若身是生、則山河大地、森羅萬象亦應是生、大哉言乎、與首楞嚴中觀論相終始也、禪師大寂之孫、南泉之子、趙州之兄、開法於長沙之鹿苑、當時衲子倔强如仰山者、猶下之、而呼以爲岑大蟲云、爲之贊曰、長沙大蟲、聲威甚重、獨眠空林、百獸震恐、寂子兒癡、見不知畏、引手捋鬚、幾缺其耳、大空小空、是虎是爾、如備與覺可、撩其尾、嗟今衲子、眼如婁晏、但見其彪、安識虎眞、我拜公像、非存非沒、百尺竿頭、行塵勃勃、白雲端禪師曰、天下叢林之興、大智禪師力也、祖堂當設達磨初祖之像於其中、大智禪師像西向、開山尊宿像東向、得其宜也、不當止設開山尊宿、而略其祖宗耳、雲居祐禪師曰、吾觀諸方長老示滅、必塔其骸、山川有限、而人死無窮、百千年之下、塔將無所容、於是於宏覺塔之東作卵塔、曰、凡住持者、自非生身不壞、火浴雨舍利者、皆以骨石塡於此、其西又作卵塔、曰、凡乘僧化皆藏骨石於此、謂之三塔、二大老識度高遠、可爲後世法、然孤論難持、犯衆難成、卒必有賞音者、吾將觀焉。

東京覺嚴寺有誠法師、講華嚴經、歷席最久、學者依以揚聲、其爲人純至少緣飾、高行遠識近世講人莫有居其右者、元祐初高麗僧統、航海至上表、乞傳持賢首宗教、歸本國流通、奉聖旨下兩街舉可以授法者、有司以師爲宜、上表辭勉曰、臣雖刻意講學、識趣淺陋、特以年運已往、安爲學者所推、今異國名僧航海問道、宜得高識博聞者爲之師、竊見杭州慧因院僧道源、精練教乘、旁通外學、舉以自代、實允公議、奉聖旨依所乞、勑差朝奉郎楊傑、館伴至錢塘受法。

予建中靖國之初、故人處獲洞山初禪師語一編、編嚴良雅所集、其語言、宏妙眞法窟爪牙、大略曰、語中有語名爲死句、語中無語名爲活句、未達其源者、落在第八魔界中、又曰、言無展事、語不投機、乘言者喪、滯句者迷、於此四句語中、見得分明、也作箇脫洒衲僧、根椽片瓦、粥飯因緣堪與人天爲善知識、於此不明、終成莽鹵、雲庵平生說法、多稱初悟門度越格量、偶閱舊記、

見其寄道友偈并序曰昔洞山參雲門悟旨於言下入佛正知見所有炙脂帽子鶻臭布衫皆脫去以四句偈明其悟蓋得展事自在之用投機善巧之風故其應機接物不乘言不滯句如師子王得大自在於哮吼時百獸震駭蓋法王法如是故也又世所傳見雲門者皆坐脫立亡何哉以無佛法知見故也因隨句釋以奉寄曰大用現前能展事春來何處不開花放伊三頓參堂去四海當知共一家又曰千差萬別解投機明眼宗師自在時北斗藏身雖有語出群消息少人知又曰游山翫水便乘言自己商量物不偏鶻臭布衫脫未得且隨風俗度流年又曰滯句乘言是瞽聾參禪學道自無功悟來不費纖毫力火裏蝍蟅吞大蟲

宗道者不知何許人往來舒蘄間多留於投子性嗜酒無日不醉村民愛敬之每餉以醇醪居一日方入浴聞有尋宗者度其必送榼至裸而出得酒徑去人皆大笑而宗傲然不怍嘗散衣下山有逆而問者曰如何是道者家風對曰袈裟裹草鞋問意旨如何曰赤脚下桐城陳退夫初赴省幃過宗戲問曰璀此行欲作狀元得否宗熟視曰無時即得莫測其言也而退夫果以第三名上第時彥作魁方悟無時之語宗見雪竇而超放自如言法華之流也

雪竇初在大陽玄禪師會中典客與僧夜語雌黃古今至趙州栢樹子因緣爭辨不已有行者立其旁失笑而去客退雪竇呼至數之曰對賓客敢爾耶對曰知客有定古今之辯無定古今之眼故敢笑曰且趙州意汝作麼生會因以偈對曰一兎橫身當古路蒼鷹纔見便生擒後來獵犬無靈性空向枯樁舊處尋雪竇大驚乃與結友或云即承天宗禪師也予謂聞此可以想見當時法席之盛也

晦堂老人嘗以小疾醫寓彭江轉運判官夏倚公立往見之因劇談妙道至會萬物爲自己及情與無情共一體時有犬臥香桉下以壓尺擊又擊香桉曰犬有情即去香桉無情自住情與無情如何得成一體去夏不能答晦堂曰縱入思惟便成剩法何曾會物爲己耶老黃龍入滅道俗請繼主道場法席之盛初不減平時然性真率不樂從事五求解去乃得謝事閑居而學者益親謝景溫師直守潭州虛大濫以致之三辭弗往又囑江西彭汝礪器資請所以不應長沙之意晦堂曰願見謝公不願領大濫也馬祖百丈已前無住持事道人相求於空閑寂寞之濱而已其後雖有住持王臣尊禮爲人天師今則不然掛名官府如有戶籍之民直遣伍伯追呼耳豈可復爲也器資以斯言反命師直由是致書願得一見不敢以住持相屈遂往長沙蓋於四方公卿意合則千里應之不合則數舍亦不往也開法黃龍十二年退居庵頭二十餘年

天下指晦堂爲道之所在蓋末世宗師之典刑也

圓通祖印訥禪師告老於郡乞請承天端禪師主法席郡可其請端欣然而來自以少荷大法前輩讓善叢林責己甚重故敬嚴臨衆以公滅私於是宗風大振未幾年訥公厭闃寂郡守至自陳客情太守惻然目端端笑唯唯而已明日登座曰昔日大法眼禪師有偈曰難難難是遣情難情盡圓明一顆寒方便遣情猶不是更除方便太無端大衆且道情作麼生遣喝一喝下座包腰而去一衆大驚遮留之不可叢林至今敬異之

南禪師住廬山歸宗火一夕而燼大衆譁譟動山谷而黃龍安坐如平時桂林僧洪準欲掖之而走顧見叱之準曰和尚從厭世間慈明法道何所賴耶因徐整衣起而火已及座榻矣坐是

入獄郡吏發其私忿考略百至絕口不言唯不食而已兩月而後得釋鬚髮不剪皮骨僅存眞點胸迎於中塗見之不自知泣下曰師兄何至是也黃龍叱曰者俗漢眞不覺拜之蓋其不動如山類如此。

漕山耽章禪師初辭洞山悟本本曰吾在雲巖先師處親印寶鏡三昧事窮的要今付受汝汝善護持無令斷絕遇眞法器方可傳委直須秘密不得影露恐屬流布喪滅吾宗夫末法時代人多乾慧若要辨認向去之人眞僞有三種滲漏當機直須具眼一見滲漏者機不離位墮在毒海二情滲漏者智常向背見處偏枯三語滲漏者體妙失宗機昧終始濁智流轉於此三種子宜知之又綱要三偈初敲倡俱行曰金針雙鎖備挾路隱全該寶印當空妙重重錦繡開其次金鎖玄路曰交手明中暗功齊轉覺難力窮尋進退金鎖網鞔鞔又其次理事俱不涉曰理事俱不涉回照絕幽微背風無巧拙電火爍難追孰子當機能如電火難追則方透三種滲漏圓覺曰衆生爲解礙菩薩未離覺故知脫生死於言下自非上根大智何以臻此大愚以黃檗爲老婆良有以也黃檗每曰決定不流至第二念就中方入我宗門蓋宗乘有旨趣下流不悟安生同異欲望大法之興不亦難乎。

龍牙和尚作半身寫照其子報慈匡化爲之贊曰日出連山月圓當戶不是無身不欲全露二老洞山悟本兒孫也故其家風機貴回互使不犯正位語忌十成使不墮今時而匡化匠心獨妙語不失宗爲可貴也餘杭政禪師嘗自寫照又自爲之贊曰貌古形疎倚杖黎分明畫出須菩提解空不許離聲色似聽孤猿月下啼政公超然奇逸人也故其高韻如光風霽月詞致清婉而道味苦嚴古今贊偈甚多予尤愛此二篇。

圭峰日用偈曰作有義事是惺悟心作無義事是散亂心散亂隨情轉臨終被業牽惺悟不由情臨終能轉業偶閱唐史李訓之敗被綠衣詭言黜官走終南依密密欲匿之其徒不可乃奔鳳翔爲盩厔吏所執訓死仇士良捕密詰之怡然曰與訓遊久吾法遇難則救初無愛憎死固吾分予謂比丘於唐交士大夫者或見於傳記多犯法辱教而圭峰獨超然如此爲史者亦欣然點筆疾書蓋其履踐之明也觀其偈則無不欲透脫情境譬如香象擺壞鐵鏁自在而去豈若蠅爲唾所涴哉。

雲菴住歸宗時方送法眼大師茶毘時雨新霽泥方滑道忽蹉倒大衆爭掖而起舉火把曰法眼茶毘歸宗遭攔呈似大衆更無可說。

石頭大師作參同契其末曰謹白參玄人光陰莫虛度法眼禪師注曰住住恩大難酬法眼可謂見先德之心矣衆生日用以妄想顚倒自蔽光明故多遺時失候謂之虛度光陰有道者無他能善用其心耳故趙州曰一切但仍舊從上諸聖無不從仍舊中得大智度論曰衆生心性猶如利刀唯用割泥泥無所成刀日就損理體常妙衆生自麁能善用之卽合本妙首楞嚴曰佛謂阿難譬如琴瑟箜篌琵琶雖有妙音若無妙指終不能發汝與衆生亦復如是寶覺眞心各各圓滿如我按指海印發光汝暫舉心塵勞先起華嚴偈曰若人欲識佛境界當淨其意如虛空遠離妄想及諸見令心所向皆無礙。

大智禪師曰夫教語皆是三句相連初中後善初直須教渠發善心中破善後始明善菩薩卽

非菩薩、是名菩薩、法非法、法非非法、總與麽也、若卽說一句答、令人入地獄、若三句一時說、渠自入地獄、不干教主事、故知、古大宗師說法皆依佛祖法式、不知者以謂苟然語、如無着所釋金剛般若、是此意也、洞山安立五位、道眼明者視其題目十五字排布、則見悟本老人、如曰正中偏偏中正、正中來偏中至、兼中到、是也、汾陽頌曰、五位參尋切要、知纎毫纔動卽差違、金剛透匣誰能解、唯有那吒第一機、舉目便令三界淨、振鈴還使九天歸、正中妙挾通回互、擬議鋒鋩失却威。

金剛般若曰、如我說法如筏喻者、法尙應捨、何況非法、西天此土聖賢釋者無慮千餘人、然莫如無着得佛之意、雙林大士又從而申明之、無着於此判爲言說法身、意以謂、筏者言說也、雖與人俱、然亦不類、如筏行水中、而實不住、非法者二邊也、在筏且不類、豈於二邊而止住耶、故曰何況非法、大士偈曰、渡河須用筏、到岸不須舡、人法俱名執、悟理誰勞詮、中流仍被溺、誰論在二邊、有無如取一、卽被污心田、故曹洞宗旨有混不得類不齊之語也。

雲峰悅禪師再游沸潭、重會南禪師、叙別講舊相得甚懽、久之更使一見石霜慈明老人、既至石霜憩於山前莊、聞其坦率之風、悔來、因不復過門、徑造南岳福嚴、未期月掌記室、俄長老賢公化去、郡以慈明來居之、初聞夜參貶剝諸方異解、皆其平生艱難而得者、於是嘆服卽投誠問道、三往三被罵、而退不勝忿、業已歸之、明日復往、慈明罵如故、因啓曰、某唯以不解故來問、善知識宜施方便、不靳開示、專以罵爲、豈從上所以授法之式耶、慈明驚曰、南書記我謂汝是箇人、乃作罵會耶、黃龍聞其語、如桶底脫、拜起汗下、從容論趙州因緣、呈偈曰、傑出叢林是趙州、老婆勘破沒來由、如今四海淸如鏡、行人莫與路爲讐、慈明聞之笑曰、偈甚佳、但易一字、曰、老婆勘破有來由、其機智妙密又如此、黃龍辭去白曰、大事畢竟如何、慈明訶曰、著衣喫飯不是畢竟、屙屎送尿不是畢竟、予嘗游福嚴、覽其山川之形勝、讀思大所記曰、此山增人之志力、居之者多得道、故祖宗授法莫不因之、雖大法之興必依之人、然馬祖於此受讓公記莿、其道大振於江西、今慈明黃龍事迹復相類、亦足怪也。

生法師曰、敲空作響、擊木無聲、法眼禪師忽聞齋魚聲、謂侍者曰、還聞麽、適來若聞如今不聞、如今若聞適來不聞、會麽。

有僧嘗登三生藏取思大平生所持錫、立之、疑慮橫生、終不能定、忽自念曰、當一切放下、却卽舉錫置之、錫卓然不傾、以問予、其故何哉、予曰、非特於錫則然、凡事若有心卽成差悞、試觀兒輩剪紙、擬心卽失、不擬心徑往無難、故道人不可須臾忘照也。

首楞嚴曰、汝元不知一切浮塵、諸幻化相當處出生、隨處滅盡、涅槃曰、譬如猛火不能燒薪、火出木盡名爲燒薪、般若燈論曰、根境理同然、智者何驚異、衲子於此見徹、方入阿字法門。

康僧會天竺人、吳赤烏十年初至建業、營立茆茨、設像行道、孫權疑爲矯異、召問曰、有何靈驗、對曰、如來遷迹忽逾千載、遺骨舍利神耀無方、昔阿育王起塔至八萬四千、塔寺之興表遺化也、權曰、若得舍利當爲造塔、如其虛妄國有常刑、會請期七日、乃謂其屬、共結淨室、以銅瓶加瓦燒香禮請、至期無應、會求伸至三七、忽聞瓶中鏘然有聲、果獲舍利、以示權、權與群臣聚觀、五色屬人、權大驚而起曰、希有之瑞也、釋曇諦父彤常爲冀州別駕、母黃氏晝寢、夢一僧呼爲

母寄一塵尾並鐵鏤書鎮二枚、既覺而兩物俱存、因而懷娠生諦、此二物乃諦前身、爲宏覺法師爲姚萇講法華所獻、追釋弘覺捨命、正是寄物之日、會以眞誠之至能生致舍利、諦以大願所持、亦能死將長物、嗚呼、眞誠大願之力、尙能反易生死、如意自在、況守護心城者耶。

莊子言、藏舟於壑、藏山於澤、釋者遺語如流、至曰、藏天下於天下、未有不嗒然危坐置筆而思者。晦堂老人嘗問學者、此義如何、對之甚衆、晦堂笑曰、汝善說道理、予作偈記其意、曰、天下心知不可藏、紛紛嗅迹但尋香、蹠能百尺竿頭步、始見林梢掛角羊、又問列子載兩小兒論日遠近、不決而質於孔子、孔子不答、其意何在、學者皆曰、聖如夫子、亦莫能辨此理、是以無說也、晦堂亦笑之、予作偈釋之曰、涼溫遠近轉增疑、不答當渠痛處錐、尙逐小兒爭未已、仲尼何獨古難知。

歐陽文忠公昔官洛中、一日游嵩山、却去僕吏、放意而往至一山寺、入門脩竹滿軒、霜清鳥啼風物鮮明、文忠休於殿陛、旁有老僧閱經自若、與語不甚顧答、文忠異之曰、道人住山久如對曰、甚久也、又問誦何經、對曰、法華經、文忠曰、古之高僧臨生死之際、類皆談笑脫去、何道致之耶、對曰、定慧力耳、又問今乃寂寥無有何哉、老僧笑曰、古之人念念在定慧、臨終安得亂、今之人念念在散亂、臨終安得定、文忠大驚不自知膝之屈也、謝希深嘗作文記其事、言法華梵相奇古、直視不瞬、時獨語笑、多行市里、褰裳而趨、或舉指畫空、佇立良久、從屠沽游、飲啗無所擇、道俗共目爲狂僧、懷禪師未出家時、師見之撫其背曰、德山臨濟、丞相呂許公問佛法大意、對曰、本來無一物、一味總成眞、僧問、世有佛否、對曰、寺裏文殊、有問師爲凡耶聖耶、舉手曰、我不在此住、將示化、作遺偈、其言不可曉也、已而曰、我從無量劫來、成就近多國土、分身揚化、今南歸矣、語畢右脇而寂、慶歷戊子十一月二十三日也。

照覺禪師元豐之間、革東林律居爲叢林、天下衲子望風而集、咸信敬畏仰、以爲肉身大士、其被賞識者必名聞諸方、然未嘗輕予人、羅漢小南禪師嗣雲居祐公、道眼明白、未爲人知、嘗至東林、照覺鳴鐘集衆出迎于清溪之上、其徒大驚、自是南之名日益顯著、佛印禪師再歸雲居、靈源叟初自龍山來、與衆群居痛自韜晦、佛印陞座白衆請以爲座元、其禮數特異、靈源受之、叢林學者日親、知晦堂老人法道有在矣、嗚呼、先德之成就法器、使增重於世、其法如此、堯非不能誅四凶舉十六子也、留以遜舜耳、雖古聖人所爲莫能外、是二老其亦知此者歟。

古塔主去雲門之世無慮百年、而稱其嗣、青華嚴未始識大陽、特以浮山遠公之語、故嗣之不疑、二老皆以傳言行之自若、其於己甚重、於法甚輕、古之人於法重者、永嘉黃檗是也、永嘉因閱維摩悟佛心宗、而往見六祖曰、吾欲定宗旨也、黃檗悟馬祖之意、而嗣百丈、故百丈嘆以爲不及也。

地藏琛禪師、能大振雪峰玄沙之道者、其秘重大法、恬退自處之效也歟、予嘗想見其爲人、城隈古寺門如死灰、道容清深、戲禪客曰、諸方說禪浩浩地、爭如我此間栽田博飯喫、有旨哉。

予初居黃龍山時、作禪和子十二時偈曰、吾活計無可觀、但日日長一般、夜半子、因如死、被虱咬動脚指、雞鳴丑、粥魚吼、忙繫裙尋襪紐、平旦寅、忽欠申、兩眉稜重千斤、日出卯、自攪炒、眼誦經、口相拗、食時辰、齒生津、輸肚皮虧口唇、禺中巳、眼前事、看見親、說不似、日南午、衣自補、忽穿

針全體露、日昳未、方破睡、洗開面、摸着鼻、晡時申、最天眞、順便喜、逆便瞋、日入酉、壁掛口、鏡中空、日中斗、黃昏戌、作用密、眼開闔烏巢律、人定亥、說便會、法身眠無被蓋、坐成叢行作隊、活鱍鱍無障礙、若動著赤肉艾、本無一事可營爲、大家相聚喫蔥菜。

雲峰悅禪師初至高安大愚、見芝和尙、芝問曰、汝來何所求、對曰、擬學佛法、芝曰、佛法豈可容易、學趁色力强健、爲衆乞飯一遭、學未晚、悅天姿純至信、受其言、卽往行乞、旣還、而芝移居翠嵓、悅又詣芝所、求入室、芝曰、佛法且置之、大衆夜寒須炭、更當乞炭一次、學未晚、悅又行乞、歲晏載炭歸、且求示誨、芝曰、佛法不怕爛却、維那方缺人、子當就職勿辭也、遂鳴犍椎、白衆請之、悅有難色、拜起追悔欲弃去、業已當之、因中休、然恨不曉芝公之意果如何耳、一日束破桶引篾觸、盆墮地、遂大悟、方見芝公用處、走見芝、芝笑呼曰、維那且喜大事了畢、悅未及吐一言、再拜汗如雨而去、故其門風孤峻未嘗有構之者、南禪師嘗語大寧老原曰、渠欲人人悟解如此豈可得哉。

神鼎諲禪師少年時、與數耆宿游南岳、一僧舉論宗乘、頗博敏、會野飯山店中、供辨、而僧論說不已、諲曰、上人言三界唯心、萬法唯識、唯識唯心眼聲耳色何人之語、僧曰、法眼大師偈也、諲曰、其義如何、對曰、唯心故根境不相到、唯識故聲色攞然、諲曰、舌味是根境否、對曰、是、諲以箸挾菜置口含胡而言曰、何謂相入耶、坐者相顧大驚莫能加答、諲曰、路塗之樂終未到家、見解入微、不名見道、參須實參、悟須實悟、閻羅大王、不怕多語。

金剛三昧經乃二覺圓通示菩薩行也、初元曉造疏、悟其以本始二覺爲宗、故坐牛車置几案於兩角之間、據以草文、圓覺經以耆證圓覺無時無性爲宗、故經首敘文不標時處、及考其飜譯之代、史復不實、曉公設事表法、圓覺冥合佛意、其自覺心靈之影像乎。

曹溪六祖大師方其韜晦時、雜居止於編民、混勞旅於商農、十有六年、蠻兒海竪販夫竈婦、得以追呼爾汝、及其德加於人、道信於天下也、雖累朝天子不得而師友之、其行聖賢之分、故莫知貴賤之異也、大宋高僧傳曰、天子累召祖竟不往、曰、吾貌不揚、北人見之必輕法、是果祖師之言乎、不仁者之言也、至人何嘗以形骸爲帥、況其天形道貌、以慈攝物者、其肯不自信耶。

石頭和尙庵於南臺、有年、偶見負米登山者問之曰、送供米也、明日卽移庵下梁端、遂終於梁端、有塔存焉、百丈寺在絕頂、每日力作以償其供、有勸止之者、則曰、我無德以勞人、衆不忍、藏去作具、因不食、故有一日不作一日不食之語、先德卒身多如此、故六祖以石墜腰、牛頭負粮供衆、今少年苾蒭擎鉢盛頷曰、吾臂酸。

雪竇禪師作祖英頌古、其首篇頌初祖不契梁武曰、闔國人追不再來、千古萬古空相憶者、重嘆老蕭不遇詞也、昧者乃敘其事于前曰、達磨既去、誌公問曰、陛下識此人否、蓋觀音大士之應身耳、傳佛心印至此土、奈何不爲禮耶、老蕭欲追之、誌公曰、借使闔國人追亦不復來矣、雪竇豈不知、誌公沒於天鑒十三年、而達磨以普通元年至金陵、予以是知、敘此者非雪竇意也、今傳寫又作蓋國、益可笑、又頌洞山麻三斤曰、堪憶長慶陸大夫、解道合哭不合哭、意用長慶語、長慶聞陸大夫此語、而哭乃問衆曰、且道、合哭不合哭、事見傳燈錄、而昧者易曰、合笑不合哭、失其旨甚矣、王文公見禪者、多問韓退之見大顚事、往往對公妄談者、公嗟惜禪者吐辭多、

臆說不問義理故要誘者多以此有志於宗教者當考證之不可苟也。

僧問予轉八識成四智從上宗師頗有釋其義者乎予曰曹溪有偈最詳曰大圓鏡智性淸淨平等性智心無病妙觀察智見非功成所作智同圓鏡五八六七果因轉但轉其名無實性若於轉處不留情繁興永處那伽定以五識第八親相分故曰成所作智同圓鏡是皆果上方轉等是皆因中轉也。

第六第七無別體故但能了知卽性平等是皆因中轉也。

英邵武開谿明濟之姿蓋從上宗門爪牙也嘗客雲居掩室不與人交下視四海莫有可其意者曰吾將老死於此山偶夜讀李長者十明論因大悟久之夜經行聞二僧擧老黃龍佛手驢脚因緣異之就問南公今何所寓對曰在黃檗黎明徑造南公一見與語自以謂不及又往見翠嵓眞點胸方入室眞問曰女子出定意旨如何英引手掐其膝而去眞笑曰賣匙箸客未在眞自是知其機辯脫略窠臼大稱賞之於是一時學者宗向晚首衆僧於圓通南公見僧自廬山來必問曾依覲英首座否有不識者則曰汝行脚到廬山不識英首座是寶山徒手之說也南公在世不肯開法南公化去師曰大法捨我其誰能荷之耶遂出世住渤潭有偈語甚多今止記其三首可以想見其爲人曰石門路險鐵關牢擧目重重萬仞高無角鐵牛銜得破毘盧海內鼓波濤又曰萬鍛爐中鐵蒺藜直須高價莫饒伊橫來竪去呵呵笑一任旁人鼓是非又曰十方齊現一毫端華藏重重帝網寒珍重善財何處去淸宵風撼碧琅玕。

達觀禪師嘗竊笑禪者不問義理如宗門有四種藏鋒初曰就理次曰就事至理事俱藏則曰入就俱不涉理事則曰出就彼不視字畫輙易就理作袖裏易出就作出袖易入就作入袖就事不可易也則孤令之今德山四家錄所載具存使晚生末學疑長老袖中必有一物出入往來大可笑也晦堂老人見禪者漫汗則笑曰彼出家便依誦八陽經者爲師矣其見聞必有淵源。

南院和尙曰問在答處答在問處夾山曰明中抽橫骨暗中坐舌頭上座玄旨是老僧舌頭老僧玄旨是上座舌頭又曰坐却舌頭別生見解參他活意不參死意達觀曰纔涉唇吻便落意思並是死門故非活路直饒透脫猶在沈淪予嘗恠洞山臨濟提倡旨歸多相同蓋得前聖爲物法式之大要楞嚴曰此方眞教體淸淨在音聞故舊說多言達磨乃觀音應身指楞伽可以印心則其旨蓋嘗曰佛語心爲宗故也又曰南岳讓公亦觀音應身味其意若非苟然者也。

有僧謂予曰如古人問大修行人還落因果也無或答曰不落或答曰不昧問如何是大悲千手眼或答曰通身是有聞之者則曰我則不然曰徧身是或問如何是佛或答曰臭肉等來蠅蠅有聞之者曰我則不然破驢脊上足蒼蠅或問擬借一問以爲影草時如何或答曰何必有聞之者曰何不道箇不必如諸老宿所示何以分其優劣得達其旨於法無礙謂一切語言無用揀擇信手拈來也耶則彼皆輕重問答鏹銖而較之謂臨機直須別辨也耶則彼之理致具在若無可同異者此吾所嘗疑不能釋也予曰我不解子之疑然聞世尊在日有比丘根鈍無多聞性佛令誦苕帚二字日夕誦之言苕則已忘帚言帚則又忘苕每自尅責係念不休忽能言曰苕帚於此大悟得無礙辯才子能如誦苕者當見先德大慈悲故爲物之心僧嚬嚬而去。

法昌倚遇禪師北禪賢公之子住山三十年刀耕火種祀子過門必勸詰之英邵武聖上座皆

黃龍高弟、與之友善、多法句偈叢林、晦堂老人、嘗過之問曰、承聞和尚近日造草堂、畢工否、曰、已畢工、又問曰、幾工可成、曰、止用數百工、遇恚曰、大好草堂、晦堂拊手笑曰、且要天下人疑著、臨終時使人要徐德占、德占偕靈源禪師馳往、至則方坐寢室、以院事什物付監寺、曰、吾自往、此至今日、以護惜常住故、每自莅之、今行矣、汝輩著精彩、言畢舉手中杖子、曰、且道、這箇付與阿誰、衆無對者、擲於地、投床枕臂而化。

首山和尚嘗作傳法綱要偈、曰、咄咄拙郎君、機妙無人識、打破鳳林關、穿靴水上立、咄咄巧女兒、停梭不解織、貪看鬬雞人、水牛也不識、汾陽無德禪師注釋之、然學者猶莫曉、則知古人神悟穎脫之資、今人不可企及遠甚、予嘗嗟誦之、淳化三年十二月五日、謂衆曰、老僧今年六十七、老病相依且過、日今年記取明年事、明年記著今年日、至明年時皆無爽、復謂衆曰、白銀世界金色身、情與無情、共一眞、明暗盡時俱不照、日輪午後示全身、日午安坐而化。

大般若經曰、諸天子竊作是念、諸藥叉等言辭咒句雖復隱密、而當可知、尊者善現於此般若波羅蜜多、雖以種種言辭顯示、而我等輩竟不能解、善現知彼心之所念、便告之言、汝等天子於我所說不能解耶、諸天子言、如是如是、具壽善現復告言、我曾於此不說一字、汝亦不聞、當何所解、何以故甚深般若波羅蜜多、文字言說皆遠離故、由於此中說者聽者及能解者皆不可得、一切如來應正等覺、所證無上正等菩提、其相甚深亦復如是、曹溪大師將入滅、方敢全提此令者、知大乘種性純熟、故、僧問、歸新州意旨、乃曰、葉落歸根來時無口、至江西馬祖南岳石頭、則大振耀之、故號石頭爲眞吼、馬祖爲全提、其機鋒如大火聚、擬之則死、學者乃欲以意思解、不亦悞哉、

嵩明教每嘆、沙門高尚大聖慈蔭之力也、而晚世紛紛者、自卑賤之、其見天子無稱臣禮、臣之爲言、公卿士大夫之職、不當僭越取而有之、唐令瑁暗識首壞其端、歷世因之不疑、彼山林野逸之人、天子猶不得臣之、況沙門乎、故其進正宗記之表、皆首尾言臣某、以存故事、至其間當自叙、則亦止稱名而已、當時公卿閔之重其高識、予昔游湘中、見沙門作道場、至召南岳帝君、則屈躬倡曰、臣僧某、此又何也、

予頃游京淮東吳間、法席至盛、然主法者太謙以壞先德之式、如前輩升堂、攝衣定侍者問訊退、然後大衆致敬、側立肅聽、以重法故、於主法者何有哉、今則不然、長老登座拱立以遲大衆立定、乃敢坐、獨江西叢林古格不易、然予以今日事勢觀之、恐他日有甚於京淮東吳也、

仁宗皇帝與大覺禪師爲法喜游、和宸詞句甚多、然皆蹤迹上語、初不敢出新奇宏妙之言、至觀其平日所作、則驚絕之句甚夥、世疑其爲瓦注、非也、昔宋文帝以鮑明遠爲中書舍人、文帝好文章、自謂、人莫及、明遠識其旨、故爲文多鄙言、世謂其才盡、實不然也、大覺身世兩忘、非明遠委曲事君之比、而　仁宗皇帝生知道妙、涕唾詞章、決非宋文所能髣髴、然予知璉公之智深、而應機之法不得不爾也、

端師子者、東吳人、住西余山、初見弄師子者、遂悟入、因以彩素制爲皮色、或升堂見客則披之、遇雪朝、披以入城、小兒追逐譁之、得錢悉以施飢寒者、歲以爲常、誦法華經有功、湖人爭迎之、開經誦數句、則携錢去、好歌漁父詞、月夜歌之徹旦、時有狂僧、號回頭和尚、鼓動流俗、士大夫

亦安其安方與潤守呂公食肉師徑趨至指之曰正當與麼時如何是佛回頭窘無以對師搥其頭推倒而去又有狂僧號不托者於秀州說法聽者傾城師擒住問如何是佛不托擬議師趨之而去師初開堂俞秀老作疏叙其事曰推倒回頭趨翻不托七軸之蓮經未誦一聲之漁父先聞師聽僧官宣至此以手耶揄曰止乃登座倡曰本是瀟湘一釣客自東自西自南北大衆雜然稱善師顧視笑曰我觀法王法法王法如是下座徑去章子厚請師住墳寺方對食子厚言及之師瞋目說偈曰章惇章惇請我看墳我却喫素偏却喫葷子厚爲大笑呂延安好坐禪而子厚喜鍛師作偈示之曰呂公好坐禪章公好學仙徐六喻擔板各自見一邊圓照禪師方乞身慧林南歸姑蘇見師於丹陽問曰師非端師子耶師曰是圓照戲之曰汝村裏師子耳師應聲曰村裏師子村裏弄眉毛與眼一齊動開卸口肚裏直籠統不愛人取奉直饒弄到帝王宮也是一場乾打閧其意復戲圓照嘗應詔往都城故也

大覺禪師昔居南岳三生藏有年叢林號璉三生文學議論爲時名公卿所敬畏予嘗得其與孫莘老書讀之知其爲天下奇才也其畧曰妙道之意聖人嘗寓之於易至周衰先王之法壞禮義亡然後奇言異術間出而亂俗迨我釋迦入中土醇以第一義示人而始末說爲悲慈以化衆生亦所以趣時也自生民以來淳樸未散則三皇之教簡而素春也及情實日鑿則五帝之教詳而文夏也時與世異情隨日遷故三王之教密而嚴秋也昔商周之誥誓後世學者有所難曉彼當時人民聽之而不違則俗與今如何也及其弊而爲秦漢也則無所不至而天下有不忍聞者於是我佛如來一推之以性命之理教之以慈悲之行冬也天有四時循環以生成萬物而聖人之教迭相扶持以化成天下亦猶是而已矣然至其極也皆不能無弊弊迹也道則一耳要當有聖賢者世起而救之也自秦漢至今千有餘歲風俗靡靡愈薄聖人之教列而鼎立互相詆訾不知所從大道寥寥莫之返良可嘆也予讀之不忍置及觀王文公非韓子其詞意與此相合其文曰人有樂孟子之拒楊墨也而以佛老爲己功嗚呼莊子所謂夏蟲者其斯人之謂乎道歲也聖人時也執一時而疑歲者終不聞道矣夫聖人之言應時而設昔常是者今蓋非也士知其常是也因以爲不可變不知所變者言而所同者道也曰然則孰正曰夫春起於冬而以冬爲終終天下之道術者其釋氏乎不至於是者皆所謂夏蟲也

大般若經曰應觀欲界色界無色界空善現是菩薩摩訶薩作此觀時不令心亂若心不亂則不見法若不見法則不作證又曰如金翅鳥飛騰虛空自在翱翔久不墮落雖依於空戲而不據空亦不爲空之所拘礙昔洞山悟本禪師立五位偏正以標準大法約三種滲漏以辨衲子非意斷苟爲皆本佛遺意今叢林開滲漏之語往往鼻笑雖悟本復出安能爲哉

大般若經曰一切智智淸淨無二無二分無別無斷故古之宗師如臨濟德山趙州雲門之徒皆洞達此意故於一切時心同太虛至於爲物作則則要用便用聊觀其一戲則將搏取大千如陶家手未了證者當以事明鞭草血流頑石吼聲則無情非情之異雪中啼竹筍爲之苞則無今昔之時嚙指悟子而蔡順來歸則無間隔之處自乳猶子而德秀乳流則無男女等相肇公曰傷夫人情之惑也久矣目對眞而莫覺亦以是而已

山谷禪師每曰世以相貌觀人之福是大不然福本無象何以觀之惟視其人量之淺深耳又

曰、觀人之壽夭、必視其用心、夫動入欺誑者、豈長世之人乎、寒山子曰、語直無背面、心眞無罪禍、蓋心語相應爲人之常然者、而前聖貴之有以、見世道交喪甚矣、大潙眞如禪師一生誨門弟子、但曰作事但實頭、雲蓋智禪師有所示、必曰、但莫瞞心、心自靈聖。

予在湘山雲蓋、夜坐地爐、以皮蒙首、夜久聞僧相語、曰、今四方皆誇臨濟兒孫說平實禪、不可隨例虛空中拋筋斗也、須令求悟、悟箇什麼、古人悟則握土成金、今人說悟正是見鬼、彼皆狂解未歇、何日到家去、僧曰、只如問趙州承聞和尚親見南泉是否、答曰、鎭州出大蘿蔔頭、此意如何、其僧笑曰、多少分明、豈獨臨濟下用此接人、趙州亦老婆如是、予戲語之曰、這僧問端未穩、何不曰、如何是天下第一等生菜、答曰、鎭州出大蘿蔔頭、平實更分明、彼問見南泉、而以此對却成虛空中打筋斗、聞者傳以爲笑。

靈源禪師爲予言、彭器資每見尊宿、必問道人命終多自由、或云、自有旨決可聞乎、往往有妄言之者、器資竊笑之、暮年乞守溢江、盡禮致晦堂老人、至郡齋日夕問道、從容問曰、臨終果有旨決乎、晦堂曰、有之、器資曰、願聞其說、答曰、待公死時即說、器資不覺起立曰、此事須是和尚始得、予嘆味其言作偈曰、馬祖有伴則來、彭公死時即道、睡裏亂子咬人、信手摸得革蚤。

余夜與僧問楊大年所作佛祖同源集序、至曰、昔如來於然燈佛所親蒙記莂、實無少法可得、是號大覺能仁、置卷長嘆、大年士大夫、其辯慧足以達佛祖無傳之旨、今山林衲子反仰首從人求禪道佛法、爲可笑也、僧曰、石頭大師曰、竺土大僊心東西密相付、豈其妄言之耶、予謂曰、子讀其文之誤、所謂密付者、非若醫巫家以其術背人相爾汝也、直使其自悟明、爲密耳、故長慶歐禪師曰、二十八代祖師、皆說傳心、且不說傳語、但破疑情、終不於佛心體上答出話頭、如道明上座見六祖於大庾嶺上、既發悟則曰、此外更有密意也無、六祖曰、我適所說者非密意也、一切密意盡在汝邊、非特然也、如釋迦於然燈佛所、但得授記而已、如有法可傳則卽付與之矣、阿難亦嘗猛省曰、將謂如來惠我三昧、前聖語訓具在、可以鏡心、不然、香嚴聞擊竹聲、望溈山再拜、高亭隔江見德山、卽橫趨而去、何以密耳語哉。

曹山本寂禪師牧章曰、取正命食者、須具三種墮、一者披毛戴角、二者不斷聲色、三者不受食、時會中有稠布衲問、披毛戴角是什麼墮、答曰、是類墮、進曰、不斷聲色是什麼墮、答曰、是隨墮、進曰、不受食是什麼墮、答曰、是尊貴墮、因又爲舉其要曰、食者卽是本分事、本分事知有不取、故曰尊貴墮、若執初心知有自己及聖位、故曰類墮、若初心知有己事回光之時、擯却聲色香味觸法、得寧謐、卽成功勳、後却不執六塵等事隨分而昧、任之、卽礙、所以外道六師是汝之師、彼師所墮汝亦隨墮、乃可取食者卽是正命食也、食者亦是却就六根門頭見聞覺知、只是不被佗染污、將爲墮、且不是同向前均他本分事尙不取、豈況其餘事耶、曹山凡言墮謂混不得類不齊耳、凡言初心者所謂悟了同未悟耳。

唐溫尙書造嘗問圭峰密禪師、悟理息妄之人、不復結業、一期壽終之後靈性何依、密以書答之曰、一切衆生無不具覺靈空寂、與佛無殊、但以無始劫來未嘗了悟、妄執身爲我相、故生愛惡等情、隨情造業、受報生老病死、長劫輪廻、然身中覺性未曾生死、如夢被驅使、身本安閑、如水作冰、而濕性不異、若能悟此意、卽是法身本自無生、何有倚託、靈靈不昧、了了常知、無

所從來亦無所去然多生習妄執以性成喜怒哀樂微細流注眞理雖然顯達此情難以率除須長覺察損之又損如風頓止波浪漸停豈可一身所修便同佛用但可以空寂爲自體勿認色身以眞知爲自心勿認妄念妄念若起都不隨之卽臨命終時自然業不能繫雖有中陰所向自由天上人間隨意寄託若愛惡之已泯不受分段之身自然易短爲長易麁爲妙若微細流注一切寂滅圓覺大智朗然獨存卽隨現千百億身度有緣衆生名之曰佛本朝韓侍郎宗古嘗以書問晦堂老師曰昔聞和尙開悟曠然無疑但無始以來煩惱習氣未能頓盡爲之奈何晦堂答曰敬承書中論及昔時開悟曠然無疑但無始以來煩惱習氣未能頓盡然心外無剩法者不知煩惱習氣是何物而欲盡之若起此心翻成認賊爲子也從上以來但有言說乃是隨病設藥縱有煩惱習氣但以如來知見治之皆是善權方便誘引之說若是定有習氣可治却是心外有法而可盡之譬如靈龜曳尾於塗拂迹迹生可謂將心用心轉見病深苟能明達心外無法法外無心心法旣無更欲教誰頓盡邪伏奉來論略叙少答以爲山中之信耳二老古今之宗師也其隨宜方便自有意味初無優劣然圭峰所答之詞正韓公所問之意而語不失宗開廓正見以密較之晦堂所得多矣。

永明和尙曰夫祖佛正宗則眞唯識才有信處皆可爲人若論修證之門諸方皆云功未齊於諸聖且敎中所許初心菩薩皆可比知亦許約敎而會先以聞解信入後以無思契同若入信門便登祖位且約現今世間之事於衆生界中第一比知第二現知第三約敎而知第一比知者且如卽今有漏之身夜皆有夢夢中所見好惡境界憂喜宛然覺來床上安眠何曾是實並是夢中意識思想所爲則可比知覺時所見之事皆如夢中無實夫過去未來現在三世境界元是第八阿賴耶識親相分唯是本識所變若現在之境是明了意識分別若過去未來之境是獨散意識思惟夢覺之境雖殊俱不出於意識則唯心之旨比況昭然第二現知者卽是對事分明不待立況且如現見青白物時物本自虛不言我青我白皆是眼識分與同時意識計度分別爲青爲白以意辨爲色以言說爲青皆是意言自妄安置以六塵鈍故體不自立名不自呼一色旣然萬法咸爾皆無自性悉是意言故曰萬法本閑而人自鬧是以若有心起時萬境皆有若空心起處萬境皆空則空不自空因心故空有不自有因心故有旣非空非有則唯識唯心若無於心萬法安寄又如過去之境何曾是有隨念起處忽然現前若想不生境終不現此皆是衆生日用可以現知不待功成豈假修得凡有心者並可證知故先德云如大根人知唯識者恒觀自心意言爲境此初觀時雖未成聖分知意言則是菩薩第三約敎而知者大經云三界唯心萬法唯識此是所證本理能詮正宗也予嘗三復此言嘆佛祖所示廣大坦夷明白簡易如此而亦鮮有諦信之者何也淸涼國師有言曰行人當勤勇念知顯修之儀以貪等世事無始惡習離之甚難過於世間慈父離於孝子故須精進方能除遣勤則欲勤策勵勇猛不息念則明記不忘知則決斷無悔予願守淸涼之訓以遵永明之旨與諸同志入圓寂道場。

嵩明敎初自洞山游康山託迹開先法席主者以其佳少年銳於文學命掌書記明敎笑曰我豈爲汝一盃茶杏湯耶因去之居杭之西湖三十年閉關不妄交嘉祐中以所譔輔敎編定祖

圖正宗記」詣闕上之、翰林王公素時權開封、爲表薦於朝、　仁宗皇帝加嘆久之、下其書於中書、宰相韓公・參政歐公閱其文、大驚譽於朝士大夫、書竟賜入藏、明敎名遂聞天下、晚移居靈隱之北永安闌若、清旦誦金剛般若經、不輟音、齋罷讀書、賓客至則清談不及世事、嘗曰、客去清談少、年高白髮饒、夜分誦觀世音名號、滿十萬聲則就寢、其苦硬清約之風、足以追配鍾山僧遠、予嘗見其手書與月禪師、曰、數年來欲製紙被一翻、以禦苦寒、今幸已成之、想聞之大笑也、臨終安坐微笑索筆作偈曰、後夜月初明、予將獨自行、不學大梅老、猶貪鼠聲、師得法於洞山聰禪師、而宗派圖、系於德山遠公、法嗣之列、誤矣。

石門洪覺範林間錄卷上　終

石門洪覺範林間錄卷下

大覺禪師皇祐二年十二月十九日、　仁宗皇帝詔至後苑、齋於化成殿、齋畢傳宣、効南方禪林儀範、開堂演法、又宣左街副僧錄、慈雲大師清滿、啓白、滿謝恩畢、倡曰、帝苑春回皇家會啓、萬乘既臨於舜殿、兩街獲奉於堯眉、爰當和煦之辰、正是開揚之日、宣談祖道、上副宸衷、謹白、璉遂陞座、問答罷、乃曰、古佛堂中曾無異說、流通句內誠有多談、得之者妙用無虧、失之者觸途成滯、所以溪山雲月處處同風、水鳥樹林頭頭顯道、若向迦葉門下、直得堯風蕩蕩、舜日高明、野老謳歌、漁人鼓舞、當此之時、純樂無爲之化、焉知有恁麼事、皇情大悅。

杜祁公・張文定公皆致政居睢陽、里巷相往來、有朱承事者、以醫藥游二老之間、祁公勁正未嘗雜學、每笑安道佞佛、對賓客必以此嘲之、文定但笑而已、朱承事乘間謂文定曰、杜公天下偉人、惜未知此事、公有力盡不勸發之、文定曰、君與此老緣熟勝我、我止能助之耳、朱響應而去、一日祁公呼朱切脈甚急、朱謂使者曰、汝先往白相公、但云看首楞嚴未了、使者如所告馳白、祁公默然、久之乃至、隱几揖令坐、徐曰、老夫以君疏通解事、不意近亦例闖其、如所謂楞嚴者何等語、乃爾躭着、聖人微言無出孔孟、捨此而取彼、是大惑也、朱曰、相公未讀此經、何以知不及孔孟、以某觀之似過之也、袖中出其首卷曰、相公試閱之、祁公熟視朱、不得已乃取默看、不覺終軸、忽起大驚曰、世間何從有此書耶、遣使盡持其餘來、徧讀之、捉朱手曰、君眞我知識、

安道知之久、而不以告我何哉、即命駕來見文定、叙其事、安道曰、譬如人失物忽已尋得、但當喜其得之而已、不可追悔得之早晚也、僕非不相告、以公與朱君緣熟、故遣之耳、雖佛祖化人、亦必籍同事也、祁公大悅、

荆州福昌善禪師、明敎寬公之子、爲人敬嚴秘重大法、初住持時、屋廬十餘間、殘僧三四輩而已、善晨香夕燈陞堂說法、如臨千衆、而叢林受用所宜、有者咸修備之、過客至肅然增敬、十餘年而衲子方集、天下向風長想、南禪師與悅公亦在會下、南公曰、我時病寒服藥須被出汗、遣文悅徧院借之、皆無有、百餘人例以紙爲之、今則又不然、重氈之上以褥覆之、一日三覺、可謂快活時世也、

華嚴論曰、若隨法性萬相都無、若隨智力衆相隨現、隱顯隨緣都無作者、凡夫執着用作無明、執障既無、智用自在、永明禪師曰、不離一眞之境、化儀百變、是以箭穿石虎、非功力之所能、醉告三軍、豈麴糵之所造、筍抽寒谷、非陽和之所生、魚躍冰河、豈網羅之所致、悉爲心感顯此靈通、故知萬法施爲皆自心之力耳。

金峰玄明禪師曹山躭章禪師之嗣、道貌奇古機辯冠衆、一日陞座曰、事存函蓋合、理應箭鋒拄、若人道得我分半院與伊、時有僧出衆、明下座約住曰、相見易得好、共事難爲人去。

大本禪師年八十終蘇州靈嵓山、臨行門弟子請曰、和尚道徧天下、今日不可無偈告安坐、本熟視曰、癡子我尋常尚懶作偈、今日特地圖什麼、尋常要臥便臥、不可今日特地坐也、索紙筆大書五字曰、後事付守榮、擲筆悉臥若熟睡、然喊之已去矣。

首楞嚴經二種轉依者、一轉染得淨、二轉迷得悟、菩提是生得、謂二障障不生故、今斷障得名生得、涅槃名爲顯得、本性清淨客塵翳故、今斷而彼顯名爲顯得、然轉位有六、第一損力益能轉、謂初二位以勝解慚愧力、損本識中染種勢力、益淨種功能、漸伏現行、亦名爲轉也、第二通達轉、由見道達眞力、斷二障麁、證一分眞實、轉依故、第三修習轉、謂地地漸斷俱生、證眞轉依也、第四果滿轉、謂究竟位以金剛定、永斷本來一切麁重、頓證佛果圓滿、轉依也、第五下劣轉、謂二乘厭苦欣寂、證眞擇滅無勝堪能故、第六廣大轉、謂大乘位俱無欣厭、通達二空、雙斷二障、頓證無上菩提、有勝堪能故。

唐高僧號懶瓚、隱居衡山之頂石窟中、嘗作歌其畧曰、世事悠悠、不如山丘、臥藤蘿下、塊石枕頭、其言宏妙皆發佛祖之奧、德宗聞其名、遣使馳詔、詔之使者即其窟宣言、天子有詔、尊者幸起謝恩、瓚方撥牛糞火、尋煨芋食之、寒涕垂膺未嘗答、使者笑之、且勸瓚拭涕、瓚曰、我豈有工夫爲俗人拭涕耶、竟不能致而去、德宗欽嘆之、予嘗見其像、垂願瞋目、氣韻超然、若不可犯干者、爲題其上曰、糞火但知黃獨美、銀鉤那識紫泥新、尙無心緒收寒涕、豈有工夫問俗人、

律部曰、昔有一國、大亂民爭逃他邦、道旁室廬皆空、一老兵過之、聞呱呱之聲、入視之、有嬰兒仰視屋梁、老兵隨觀之、乃懸飯籮耳、爲解開示之、則灰也、嬰兒見之即死、蓋其母欲棄去、不忍殺、懸此籮給云、此飯也、故其係念不忘、識其爲灰、則無餘想矣、乃知三界生死留滯皆想所持、故古之達法大士、臨終超然自得者、無別道、但識法根源而已。

叢林相傳、石頭和尙、施身食虎、祝曰、我宗如他日大振、必先食吾足、虎果自足而食、予竊笑之、

紹聖初游南臺、見泰布裕祭石頭明上座文、叙其施身食虎甚詳、乃知後人不能明、遂相傳爲遷禪師也、又曰、清凉法眼禪師臨終以書別李國主、主幸所居、而法眼不去、侍者壓以米纏、乃卒、按本傳、法眼以周顯德五年戊午七月十七日示疾、閏月剃髮沐浴告衆坐逝、未嘗先以書約國主也、而韓希載作悟空禪師碑則曰、師臨終以書別皇帝、中夜聞鐘聲、御昇元閣、泣而送之、又曰、洞山悟本禪師見母行乞、佯爲不識、母竟死於路旁、往視之有米數合、爲投大衆粥鍋中、以薦冥福、悟本獨庵寒溪百結最有年、至住新豐已六十餘、自巖頭・雪峰・欽山三人相尋而至、於是積衆幾千人、則母蓋不翅八十歲矣、借使聞其子顯著、自東吳孤行而來、不亦難乎、又曰、玄沙欲出家、懼其父不從、方同捕魚因覆舟溺死之、玄沙天資高妙、必不爾、獨不知何所據便爾不疑、此直不情者記之以自藏、安知誣毀先德爲罪逆、必有任其咎者、不可不慎也。

香山居士白樂天、醉心內典、與之游者多高人勝士、觀其與濟上人書、鉤深索隱精確高妙、未嘗不置卷長嘆、想見其爲人、恨不見濟公所答耳、因作補濟上人答樂天書一首、并樂天問詞、錄於此、日月弟子太原白居易、白濟上人侍者、昨者頂謁時、不以愚蒙言及佛法、或未了者、許重討論、今經典間未論者其義有二、欲面問答、恐彼此卒卒語言不盡、故粗形於文字、願詳覽之、敬佇報章、以開未悟、所望所望、佛以無上大慧、觀一切衆生、知其根性大小不等、而以方便智說方便法、故爲闡提說十善法、爲小乘說四諦法、爲中乘說十二因緣法、爲大乘說六波羅蜜法、皆對病根、投以良藥、此蓋方便教中不易之典也、何者、若爲小乘人說大乘法、心則狂亂、狐疑不信、所謂無以大海內於牛跡也、若爲大乘人說小乘法、是以穢食置於寶器、所謂彼自無瘡勿傷之也、故維摩經總其義云、爲大醫王應病與藥、又首楞嚴三昧經云、不先思量而說何法、隨其所應而爲說法、正是此義耳、猶恐說法者不隨人之根性也、故又法華經戒云、若但贊佛乘、衆生沒在苦、不能信是法、破法不信、故如此非獨慮說者不能救病、亦恐聞者不信沒在罪苦也、則佛之付囑豈不丁寧耶、何則法王經云、若定根基、爲小乘人說小乘法、爲大乘人說大乘法、爲闡提人說闡提法、是斷佛性、是滅佛身、是說法人當歷百千萬劫墮諸地獄、縱佛出世猶未得出、若生人中缺脣無舌、殘如是報、何以故衆生之性卽是法性、從本已來無有增滅、云何於中分別病藥、又云、於諸法中、若說高下、卽名邪說、其口當破、其舌當裂、何以故、一切衆生、心垢同一垢、心淨同一淨、衆生若病應同一病、衆生須藥應同一藥、若說多法、卽名顚倒、何以故爲妄分別拆善惡法破一切法故、隨機說法斷佛道故、此又了然不壞之義也、金剛三昧經云、皆以一味道、終不以小乘無有諸雜味、猶如一雨潤、又金剛經云、是法平等無有高下、是名阿耨多羅三藐三菩提、據此後三經則與前三經義甚相戾也、其故何哉、若云依維摩詰謂富樓那云、先當入定觀此人心、然後說法、又云、不觀人根不應說法、夫以富樓那之通慧、又親奉如來爲大弟子、尙未能觀知人心、況後五百歲末法中弟子、豈能盡觀知人心、而後說法乎、設使觀知人心、若彼發小乘心、而爲說大乘法、可乎、若未能觀彼心、而率己意說、又可乎、既未能觀、與默然不說、又可乎、若云依義不依語、則上六經之義互相違反、其將孰依乎、若云依了義經、則三世諸佛一切善法皆從此經出、孰名爲不了義經乎、況諸經中與維摩・法華・首楞嚴之說同者非一也、與法王金剛三昧之說同者亦非一也、不可偏舉、故於二義中各舉三經、

此六經皆上人常所講讀者、今故引以爲問、必有甚深之旨焉、今且有人忽問法於上人、上人或能觀知其心、或未能觀知其心、將應病與藥而爲說耶、將同一病一藥而爲說耶、若應病與藥、又是有高下、是有維味、卽反法王等三經之義、豈徒反其義、又獲如上所說之罪報矣、若同一病一藥爲說、必當說大乘、大乘卽佛乘也、若讀佛乘、且不隨應、且不救病、卽反維摩等三經之義、豈徒反其義、又使衆生泥在罪苦矣、六者、皆如來說、如來是眞語者、實語、不誑語、不異語者、今隨此則反彼、順彼則逆此、設有問上人、其將何法以對焉、此其未諭者一也、又五蘊者、色、受、想、行、識是也、十二因緣者、無明緣行、行緣識、識緣名色、名色緣六入、六入緣觸、觸緣受、受緣愛、愛緣取、取緣有、有緣生、生緣老死憂悲苦惱、是也、夫五蘊十二因緣蓋一法也、蓋一義也、略言之則五、詳之則爲十二、雖名數多少或殊、其於倫次轉遷合同條貫、今五蘊中、則色、受、想、行識相次、而十二因緣中、則行、識、色、入、觸、受、想、緣、一則色在行前、一則色次行後、正序之既不類、逆倫之又不同、若佛次第而言、則不應有此雜亂、若謂偶然而說、則不當名爲因緣、前後不倫其義安在、此其未諭者二也、上人者年大德、後學宗師、就出家中、又以說法而作佛事、必能研精二義、合而通之、仍望指陳著於翰墨、蓋欲藏諸篋笥、永永不忘也、其餘疑義亦續咨問、居易頓首、予補其答曰、辱賜書蒙、以教乘爲間、顧惟魯鈍之姿、何足以當天縱之辯、然敢不竭疲陋以塞外護爲法之勤耶、如居士所論六經二義、與夫行色不倫之說爲不通者、在不痛思自所問端方便智三言而已、了此三言、則雖百千妙義無盡法門、可不究而解、矧所謂維摩法王、前後六經相戾之義乎、方便智者、如將將兵、權謀所施、非有定式、其發如雷霆、如機括、故能消過於未然、折衝於千里、在一時耳、豈據典故哉、夫軍勢之虛實、將氣之勇怯、陣形之可否、成敗之先見、或有定論、例吾教三乘、以觀根授法、不可參亂、是也、以勇怯之氣爲虛實之勢、以施其事、則誤矣、例吾法謂不可以大乘之法授小乘之人、而小乘之人終不堪受大乘之法、如維摩、法華等三經、所以丁寧告諭者是也、法王等三經、又明告直指、纖悉蕩除之、亦所當爾、何以知之、如將兵者、意在濟亂以安國、則如來之意、豈非欲開迷以顯智乎、執三乘之語言、爲佛之方便智者失之甚矣、彼特品第衆生根器之說、不能了者反墮常見、卽外道、非佛道也、執衆生佛性自無始來無有是事者、又墮斷見、卽外道、非佛道也、華嚴經曰、凡愚之人、迷佛方便、執有三乘、法華經曰、尋念過去佛、亦應說三乘、來書所疑可以釋矣、涅槃經曰、欲得早成佛者、與早成、欲遲成佛者、與遲成、起信論曰、世尊爲勇猛衆生說成佛在一念、爲懈怠衆生說得果須滿僧祇者、眞方便智之旨、神而明之、則能變通與奪、施之以成就衆生也、一代時教以三宗攝之、所謂法相、破相、性宗也、前之六經二義、乃法相、破相二宗所攝、此二宗自不許相難、以建立蕩除宗異故也、又疑爲法師者不能定觀人之根、過慮誤授人以法、且有罪苦、夫知法比丘、雖凡夫具足煩惱之軀、然其志好明達、慧辯猛利、非果位小乘可比、如迦陵鳥在殼、則聲壓衆鳥、如堅好木苗地、則已秀群木、又況維摩所訶、富樓那自言其過有以也哉、如是而論、恐尙紆疑、請借近事以明之、王公大人之閱天下士、非必龍章玉山、其必先以言語、言語者德行之候、故曰、有德者必有言、又曰、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、雖古之聖人、莫能外此、則知法者觀人之根大小、又豈有他術乎、如居士所疑色、受、想、行、識、與夫十二有支因緣之法、名次不倫、乎有錯繆者、未

辨名目之理故也夫色等五蘊乃三苦已成之軀十二有支乃三世生因之法如華嚴十地品云於第一義不了故名無明所作業果是行行依止初心是識其生四取蘊爲名色等者其叙本末沿襲理固然也般若經則曰色卽是空空卽是色色不異空空不異色受想行識亦復如是者破有法不眞故也且色體尙爾況四蘊但名而已哉般若諸經破有之敎故言五蘊則色居行之前華嚴十地品諸經叙沿襲之因故色在行之後非略言則五詳言則十二也法之所本要本於理而當於義不必守名句以自滯多病久廢講前之所陳者皆敎乘之深旨非敢臆斷意餘至於言謂之不及而可以模鑄魔佛了辨同異者又未可遽言也

斷際禪師嘗與異僧游天台行數日值江漲不能濟植杖久之異僧以笠當舟登之浮去斷際幾罵曰我早知汝定揉折其脛乃快也異僧嘆曰道人猛利非我所及雪峰巖頭欽山自湘中入江南至新吳山之下欽山濯足澗側見菜葉而喜指以謂二人曰此山必有道人可沿流尋之雪峰恚曰汝智眼太濁他日如何辨人彼不惜福如此住山何爲哉古之人擇師結友如是其審哉

法燈泰欽禪師初住洪州雙林乃曰山僧本擬深藏山谷遣日過生緣清涼老人有不了底公案所以出來爲他了却若有人問便說似伊時一僧出問如何是老人未了底欽拽杖擊之僧曰我有何過欽曰祖禰不了殃及兒孫李國主從容問曰先師有什麼不了底公案欽曰現分析底國主驚之欽少年時其悟解已逸格然未爲人知獨法眼禪師深奇之性忽繩墨不事事嘗自淸涼遣化維揚不奉戒律過時未歸一衆傳以爲笑法眼遣偈往呼之既歸使爲衆燒浴一日法眼問大衆曰虎項下金鈴何人解得對者皆不契欽適自外至法眼理前語問之欽曰大衆何不道繫者解得於是人人改觀法眼曰汝輩這回笑渠不得也

王文公方大拜賀客塞門公默坐甚久忽題于壁間曰霜筠雪竹鍾山寺投老歸歟寄此生又元宵賜宴相國寺觀俳優坐客懽甚公作偈曰諸優戲場中一貴復一賤心知本自同所以無欣怨予嘗謂同學曰此老人通身是眼瞞渠一點也不得

臨濟大師曰大凡舉唱宗乘須一句中具三玄一玄中具三要有玄有要諸方衲子多溟涬其語獨汾陽無德禪師能妙達其旨作偈通之曰三玄三要事難分得旨忘言道易親一句明明該萬象重陽九日菊花新非特臨濟宗晉論三玄石頭所作參同契備具此旨竊嘗深觀之但易玄要之語爲明暗耳文二四十餘句而以明暗論者半之篇首便標曰靈源明皎潔枝派暗流注又開通發揚之曰暗合上中言明明淸濁句在暗則必分上中在明則須明淸濁此體中玄也至指其宗而示其意則曰本末須歸宗尊卑用其語故下廣叙明暗之句奕奕聯連不已此句中玄也及其辭盡也則又曰謹白參玄人光陰莫虛度道人日用能不遺時失候則是眞報佛恩此意中玄也法眼爲之注釋天下學者宗承之然予獨恨其不分三法但一味作體中玄解失石頭之意李後主讀當明中有暗注辭曰玄黃不眞黑白何咎遂開悟此悟句中玄爲體中玄耳如安楞嚴破句讀首楞嚴亦有明處予懼學者雷同其旨宗門妙意指趣今叢林絕口不言老師宿德日以凋喪末學小生日以譁誼無復明辯因記先德銓量大法宗趣於此以俟有志者此方敎體以音聞應機故明導者假以語言發其智用然以言遣言以理辨理則妙

精圓明未嘗間斷謂之流注眞如此汾陽所謂一句明明該萬象者也得之者神而明之不然死於語下故其應機而用皆脫略窠臼使不滯影迹謂之有語中無語此汾陽所謂重陽九日菊花新者也三玄之設本猶遣病故達法者貴其知意知意則索爾虛閑隨緣任運謂之不遺時此汾陽所謂得意忘言道易親者也古塔主喜論明此道然論三玄則可以言傳至論三要則未容無說豈不曰一玄中具三要有玄有要自非親證此道莫能辯也

廬山玉澗林禪師作雲門北斗藏身因緣偈曰北斗藏身爲舉揚法身從此露堂堂雲門賺殺他家子直至如今謾度量五祖戒禪師雲門的孫有機辯嘗罷祖峰法席游山南見林間作偈之意林舉目視之戒曰若果如此雲門不直一錢公亦當無兩目遂去林竟如所言而戒暮年亦失一目今妄意測度先德之旨疑悞後生者亦可以少戒

天台宗講徒曰昔智者大師聞西竺異比丘言龍勝菩薩嘗於灌頂部誦出大佛頂首楞嚴經十卷流在五天皆諸經所未聞之義唯心法之大旨五天世主保護秘嚴不妄傳授智者聞之日夜西向禮拜願早至此土續佛壽命然竟不及見唐神龍初此經方至廣州譯譯今市工販鬻徧天下而學者往往有舉生不曾識之者法輕則信種自劣可嘆也

古老衲住山多託物寓意既自游戲亦欲悟人如子湖之畜犬道吾之巫衣端笏獨雪峰歸宗西院皆握木蛇故雪峰寄西院偈云本色住山人且無刀斧痕予元符間至疎山見仁禪師畫像亦握木蛇嘗有僧問曰和尚手中是什麼物答曰是曹家女因嘆其孤韻超拔能清涼熱惱爲作贊曰三支習氣其毒熾然薰蒸識心盤屈糾纏衆生不明橫生疑怖忽然見之輒自驚仆空華世間本離生滅廓然十方露其窟穴惟矮師叔是大幻師與奪萬法自在娛嬉乃知大千皆公戲具手中木蛇是曹家女

永明和尚問曰此根本識心既稱爲一切法體又云常住不動只如萬法即此一心有離此一心有若即心萬法遷變此心云何稱爲常住若離此心復云何得爲一切法體自答曰開合隨緣非即非離以緣會故合以緣散故開開合但緣卷舒無體緣但開合緣亦本空彼此無知能所俱寂故密嚴經偈曰譬如金石等本來無水相與水共和合若水而流動藏識亦如是體非流動流諸識共相應與法同流轉如鐵因磁石周回而轉移二俱無有思狀若有思覺賴耶與七識當知亦復然習繩之所繫無人而若有普徧衆生身周行諸陰趣如鐵與磁石展轉不相知予嘗諦觀一切衆生迷於動轉遷移之中生心執着以爲實然以是橫計有生有死罪行禍行如嬰兒自旋見屋廬轉諸佛大悲爲作方便以無情之類無有心念而亦有遷流爲譬識心本來自寂即入無生太解脫門

潭州道吾山有湫毒龍所蟄墮葉觸波必雷雨連日過者不敢喘慈明與泉大道同游泉牽其衣曰可同浴慈明掣肘徑去泉解衣躍入霹靂隨至腥風吹雨林木掀播慈明蹲草中大驚意泉死矣須臾晴霽忽引頸出波問笑呼曰团又嘗夜坐融峰頂有大蟒繞盤之泉解衣帶縛其腰中夜不見黎明策杖徧山尋之帶纏枯松松之上蓋松妖也又自後洞負一石羅漢像至南臺像無慮數百斤衆僧驚駭莫知其來後洞僧亦莫知其去遂相傳至今號飛來羅漢又過衡山縣見屠者斫肉立其旁作可憐之態指其肉又指其口屠問曰汝啞耶即點頭屠大憐之割巨

樹盛鉢中、泉喜出其望外、連呼曰、感謝、市人皆笑、泉自若而去、後住南嶽芭蕉菴、遭橫逆、民其衣、役郴州牢城、盛暑負土塹城、經通衢、弛擔而坐、觀者如堵、說偈曰、今朝六月六、谷泉受罪足、不是上天堂、便是入地獄、言訖微笑而寂、異香郁然、郴人至今供事之、泉親見汾州無德禪師、南山清源道人、謂予曰、我十餘年、作老黃龍侍者、聞其說、見慈明事甚詳、嘗喟然嘆曰、我平生不得谷泉文悅、又爭識得慈明。

靈源禪師謂予曰、道人保養如人病須服藥、藥之靈驗易見、要須忌口乃可、不然服藥何益、生死是大病、佛祖言教是良藥、染污心是雜毒、不能忌之、生死之病無時而損也、予愛其言、追念圓覺經曰、末世諸衆生、心不生虛妄、佛說如是人現世卽菩薩、法華經曰、若起精進心、是妄非精進、但能心不妄、精進無有涯、南岳思大禪師、悟入法華三昧、卽誦曰、是眞精進、是名眞法供養、汾陽無業大達國師、一生答學者之問、但曰、莫妄想、是謂稱性之語、見道徑門、而禪者易其言、反求玄妙、可笑也。

三祖信心銘、誌公十二時歌、永嘉證道文、禪者不可不誦、退之見大顛事、傳大士四相頌、雖不言於宗門何傷乎。

定上座不知何許人、臨濟會中號稱龍象、初至臨濟、問、如何是祖師西來意、臨濟下座揞住曰、遠道、遠道、定擬議、濟掌之、輒推去、傍僧呼曰、何不禮拜、定拜起汗如雨、因大悟、巖頭雪峰欽山三人、往河北、道逢定鎭府來、問曰、臨濟和尙健否、定曰、已化去也、相顧嘆息、又問、有何言句示衆、定曰、尋常上堂曰、汝等諸人赤肉團上、有一無位眞人、常自面門出入、未證據者看、欽山曰、何不道、赤肉團上非無位眞人、定忽擒住曰、且道無位眞人、與非無位眞人、相去多少、速道、速道、欽色動不能對、巖頭雪峰勸解之、定曰、若不是這兩箇老凍醍、堅殺屎床鬼子、又過橋見三講人方論法義、定倚杖聽之、講者戲問曰、禪者如何是禪河窮到底、定捉住欲拋置水中、兩講人驚抱持之、哀告、定曰、若不是汝輩、且教這漢窮到底、臨濟宗旨、貴直下便見不復留情、定公所用舒卷自在、如明珠走盤不留影迹、可畏仰哉。

南禪師居積翠、時有僧侍立、顧視久之、問曰、百千三昧無量妙門、作一句說與汝、汝還信不、對曰、和尙誠言安敢不信、南公指其左曰、過這邊來、僧將趨忽咄之曰、隨聲逐色有甚了期、出去、一僧知之、卽趨入、南公理前語問之、亦對曰、安敢不信、南公又指其左曰、過這邊來、僧堅不往、又咄之曰、汝來親近我、反不聽我語、出去、其門風壁立、雖佛祖亦將喪氣、故能起臨濟已墜之道、而今人誣其家風、但是平實商量、可笑也。

予常愛王梵志詩云、梵志翻着襪、人皆謂是錯、寧可刺儞眼、不可隱我脚、寒山子詩云、人是黑頭蟲、剛作千年調鑄鐵作門限、鬼見拍手笑、道人自觀行處、又觀世間、當如是游戲耳。

淨業障經曰、世尊謂無垢光曰、寢夢犯欲、本無差別、一切諸法本性清淨、然諸凡夫愚小無智、於無有法不知、如故、妄生分別、以分別故、墮三惡道、古佛同聲說、偈曰、諸法同鏡像、亦如水中月、凡夫愚惑心、分別癡恚愛、諸法常無相、寂靜無根本、無邊不可取、欲性亦如是、然教乘所論開遮不一、故曰、九結十纏、性雖空寂、初心學者且須離之、是以諸佛所說深經、先誡不可、於新發意菩薩說、慮種子習重發起現行、又爲觀淺根淨信解不及故也、道吾眞禪師、孤硬具大知

見、與楊岐會禪師俱有重名於禪林、當時慈明會中、先數會眞二大士、爲龍象、然開法遠方小刹、衆才二十餘輩、諸方來者必勘驗之、往往望崖而退、甚多、眞臥病院主問、和尙近日尊候如何、答曰、粥飯頭不得氣力、良久曰、會麼、對曰、不會、曰、猫兒尾後帶研槌、或問、如何是佛、答曰、洞庭無蓋、予作偈曰、洞庭無蓋、凍殺法身、趙州貧食、牙齒生津。翠巖眞點胸、英氣逸群不虛許可、嘗客南昌章江寺、長老政公亦嗣慈明、性喜講說、學者多尙義學、眞一日見政、則以手掘其衣、露兩脛緩步而過、政恠問之、對曰、前廊後架皆是葛藤、正恐絆倒耳、政爲大笑、又問曰、眞兄我與爾同參、何得見人便罵、我眞熟視曰、我豈罵汝、吾畜一豫、準備罵佛罵祖、汝何預哉、政無如之何、而去見南禪師曰、我佗日十字街頭做箇粥飯主人、有黃檗僧來、我必勘之、南公曰、何必他日、我作黃檗僧、汝今試問、眞便問、近離什麼處、曰、黃檗、眞曰、見說堂頭老子、脚跟不點地是否、曰、上座何處得這消息來、眞曰、有人傳至、南公笑曰、却是汝脚跟不點地、眞亦大笑而去、好問學者魯祖當日見來參者、何故便面壁去、未有契其機者、自作偈曰、坐斷千山與萬山、勘人除却是非難、池陽近日無消息、果中當年不自觀。衡岳楚雲上人、生唐末、有至行、嘗刺血寫妙法蓮華經一部、長七寸廣四寸而厚半、之作柄檀匣、藏於福嚴三生藏、又刻八字於其上曰、若開此經、誓同慈氏、皇祐間有貴人、遊山見之、疑其妄、使人以鉗發之、有血如綫出焉、須臾風雷震山谷、烟雲入屋、相捉不相見、彌日不止、貴人大驚、投誠懺悔、嗟乎、願力所持乃爾異也、予嘗經游往頂、戴之、細看血綫依然、貫休有詩贈之曰、剔皮刺血誠何苦、爲寫靈山九會文、十指瀝乾終七軸、後來求法更無君。

永明和尙曰、今之學者多好求解會、此豈究竟、解但爲遣情耳、說但爲破執耳、情消執盡、則說解何存、眞性了然、寂無存泯、所以若言卽與不卽、皆落是非、暫掛有無、卽非正念、故三祖大師云、纔有是非、紛然失心、時有僧問、凡涉有無、皆成邪念、若關能所、悉墮有無、如何是正念而知、答曰、瑞草生嘉運、林華結早春、此是禪宗之妙、於諸方便中、最爲親語。白雲端禪師作蠅子透窗偈曰、爲愛尋光紙上鑽、不能透處幾多難、忽然撞着來時路、始覺平生被眼瞞、作北斗藏身因緣偈曰、五陵公子游花慣、未第貧儒自古多、冷地看他人富貴、等閑不奈幞頭何、予謂、此老筆端有口、故多說少說、皆無剩語。

道宣律師作二祖傳曰、可遇賊斫臂、以法御心、初無痛苦、蜀僧神清引其說、以左書、予讀之每失笑、且嘆宣暗於辨是非也、既列林法師與二祖聯傳、於林傳則曰、林遇賊斫臂、呼號不已、故人呼爲無臂林、林與二祖友善、一日同飯、恠其亦以一手進、問其故、對曰、我無臂舊矣、豈有游從之人、爲賊斫臂久、而不知反相問者耶、夫二祖以求法故、世無知者、林公以遇賊故、人皆知之、宣雷同之辱、誣先聖過矣、彼神清何爲者也、據以爲書、又可以發一笑、雖然、孟子曰、盡信書不如無書、學者亦可以鑒於此。

慈明老人性豪逸、忽繩墨、凡聖莫測、初弃南源歸省其母、以銀盆爲之壽、其母投諸地、罵曰、汝少行脚負布槖去、今安得此物、吾望汝濟我、今反欲置我作地獄滓耶、慈明色不怍、徐收之、辭去、謁神鼎諲公師叔、諲公首山之子、望高叢林、住山三十年、影不出山、諸方莫有當其意者、慈明通謁稱法姪、一衆大笑、諲公使人問、長老何人之嗣、對曰、親見汾陽來、諲訝之、出與語、應答

如流大奇之會道吾虛席郡移書欲得大禪伯領之謹以慈明應召湘中衲子聞其名聚觀之予謂慈明道起臨濟於將仆而平昔廓落乃如此徵神鼎則殆亦谷泉之流也然至人示現要非有思議心所能知也

敎中有女子出定因緣叢林商畧甚衆自非道眼明白親見作家莫能明也大愚之禪師每問僧曰文殊是七佛之師爲什麼出此女子定不得罔明菩薩下方而至但彈指一聲便能出定莫有對者乃自對曰僧投寺裏宿賊入不愼家予滋愛其語作偈記之曰出定只消彈指佛法豈用工夫我今要用便用不管罔明文殊雲庵和尙見之明日升座用前話乃曰文殊與罔明見處有優劣也無若言無文殊何故出女子定不得只如今日行者擊動法鼓大衆同到座前與罔明出女子定是同是別良久曰不見道欲識佛性義當觀時節因緣亦有偈曰佛性天眞事雖云別有師罔明彈指處女子出禪時不費纖毫力何曾動所思衆生總平等日用自多疑

大愚芝禪師作偈絕精峭予猶及見老成多誦之其作僧問洞山如何是佛答云麻三斤偈曰橫眉讀梵字彈舌念眞言吹火長尖觜柴生滿竈烟又作雲門普字偈曰說佛說法廣鋪舒矢上加尖也太愚明眼衲僧傍觀見一條拄杖兩人捧又示衆曰沙裏無油事可哀翠巖嚼飯餵嬰孩佗時好惡知端的始覺從前滿面灰

李留後端愿問達觀禪師曰人死識當何所歸答曰未知生焉知死對曰生則端愿已知曰生從何來李留後擬議達觀揑其胸曰只在這裏思量箇什麼對曰會也只知貪程不覺蹉路達觀拓開曰百年一夢又問地獄畢竟是有是無答曰諸佛向無中說有眼見空華太尉就有中覓無手捧水月堪笑眼前見牢獄不過心外見天堂欲生殊不知欣怖在心善惡成境太尉但了自心自然無惑進曰心如何了答曰善惡都莫思量又問不思量後心歸何所達觀曰且請太尉歸宅住潤州浮玉山禪者景向嘉祐五年正月元日登堂叙出世始末大衆悲戀下座入方丈趺坐衆復擁至以手揮曰各就壁立勿譁少頃寂然而逝

予讀大宋僧史會要愛隋大臣楊公素識度明正嘗游嵩山見畫壁指問道士曰此何像對曰老子化胡成佛圖楊公曰何不化胡成道而反成佛耶道士不能答傳以爲名言

雪竇通禪師長沙岑大蟲之子也每謂諸同伴曰但時中常在識盡功成瞥然而起即是傷他而況言句乎故石霜諸禪師宗風多論內紹外紹臣種王種借句挾帶直饒未嘗忘照猶爲外紹謂之臣種亦謂之借謂之誕生然不若絲毫不隔如王子生下即能紹種謂之內紹謂之王種謂之句非借也借之爲言一色邊事耳不得已應機利生則成挾帶汾陽無德禪師偈曰士庶公侯一道看貧富賢愚名漸次將知修行亦須具眼予參至此每自嗟笑嗟堂中首座昧先師之意而脫去笑羅山大師不契而識嚴頭及觀聚栢大士之論曰當以止觀力功熟乃證知急亦不得成而緩亦不得但知常不休必定不虛弃如乳中有酪要須待其緣彼緣緣之中本無有作者故其酪成已亦無有來處亦非是本有如來智慧海方便亦如是是以知古老宿行處皆聖賢之言也

幽州盤山積禪師有言曰似地擎山不知山之孤峻如石含玉不知玉之無瑕若能如是是眞出家大法眼禪師曰理極亡情謂如何有喻齊到頭霜夜月任運落前溪果熟衆猿重山長似

路迷舉頭殘照在元是住居西遂導師曰老僧平生自無所解只是日々一般雖住此間隨緣任運今日諸上座與本無異也

古之人有大機智故能遇緣即宗隨處作主巖頭和尚曰汝但識綱宗本無是法予嘗與客論靈雲見桃華偶曰三十年來尋劍客幾回葉落又抽枝自從一見桃花後直至如今更不疑溈山老子無大人相便云從緣入者永無退失獨玄沙曰諦當甚諦當敢保老兄猶未徹在客問予未徹之處安在哉爲作偶曰靈雲一見不再見紅白枝枝不著花尅耐釣魚船上客却來平地攙魚鰕

五祖戒禪師喜勘驗衲子時大岳雪竇號爲飽參且有機辯至東山之下雪竇令大岳先往岳包腰徑入方丈時戒歸自外見之呼云作什麼岳回首以手畫圓相示之戒曰是什麼岳曰胡餅戒曰趁爐竈熱更搭一箇岳擬議曳拄杖趂出門岳曰顯川這關西子無面目休去好戒暮年弃其徒來游高安洞山寶禪師其法嗣也寶好名賣之不爲禮至大悲未幾倚拄杖於僧堂前談笑而化五祖遣人來取骨石歸塔焉

溈山大圓禪師曰道人之心質直無僞無背無面無詐妄心一切時中視聽尋常更無委曲亦不閉眼塞耳但情無附物即得從上諸聖只是說濁邊過患若無如許多惡覺情見想習之事譬如秋水澄渟清淨無爲淡佇無礙喚作道人亦名無事人或問頓悟之人更用修否曰若眞實悟得底他自知時節修與不修是兩頭語今雖從緣得一念頓悟自理猶有無始習氣未能頓淨須教渠淨除現業流識即是修也不可別有一法教渠修行趣向從聞入理聞理深妙心自圓明不居惑地縱有百千妙義抑揚當時此乃得坐披衣自解作活計始得以要言之則實際理地不受一塵萬行門中不捨一法若也單刀直入則凡聖情盡體露眞常理事不二即如如佛今時學者常疑佛性本來具足何須復修設不修行無緣證聖情隨向背終落斷常不知三世如來十方菩薩所有修習皆自隨順覺性而已則大溈所謂修與不修是兩頭語不亦宜乎

法眼禪師之子有慧明道人者知見甚高下視諸方初菴於大梅山有禪者來游明問曰近離何處對曰城都曰上座離城都到此山則城都少上座此山剩上座剩則心外有法少則心法不周說得道理即住不會即去禪者莫能對又遷止天台山有彥明道人者俊辯自負來謁師師問曰從上先德有悟者麼對曰有之曰一人發眞歸源十方虛空悉皆消殞舉手指曰只今天台山巋然如何得消殞去明張目直視遯去又問諸老宿曰雪峰塔銘曰夫從緣而有者始終而成壞非從緣而有者歷劫而長堅堅之與壞即且止雪峰只今在什麼處予謂禪宗貴大機大用不貴知解雲菴每曰汝輩皆知有只是用不得如慧明道人可謂善用者也

予讀傳燈錄愛老安之子所謂破竈墮者深證無生恨不與之同時而生也紹聖中再游廬山見其畫像爲作贊曰嵩山屋老竈有神民爭祠之日宰烹師與門人偶經行即而視之因嘆驚此唯土瓦和合成是中何從有聖靈以杖敲之輒墮傾須臾青衣出笑迎謝師爲我談無生言訖登空如鳥輕門人問之拜投誠伏地但聞破墮聲君看一體情非情皎如朗月懸青冥未證據者以事明鞭草血流石吼升涅槃門開見戶庭老安憐兒爲作名金屑雖貴翳眼睛

金華懷志上座、性夷粹飽經論、東吳學者尊事之、嘗對客曰、吾欲會天台賢首、唯識三宗之義、折中之爲一書、以塞影迹之譏、適有禪者居坐末、曰、賢首宗祖師謂誰、志曰、杜順和尚、禪者曰、順有法身頌、曰、懷州牛喫禾、益州馬腹脹、天下覓醫人、炙豬左膊上、此義歸合天台唯識二宗何義耶、志不能對、禪者曰、何不游方去、志於是罷講南詢至洞山、時雲菴和尚在、焉從之游甚久、去游湘上、菴於石頭雲溪二十餘年、氣韻閑淡、過客謁之多不言、侍者問之、答曰、彼朝貴人多知多語、我粥飯僧、見之自然口吻遲鈍去、僧問、住山有何趣味、答曰、山中住、獨掩柴門、無別趣、三箇柴頭品字煨、不用援毫文彩露、又曰、萬機俱罷付癡憨、蹤迹常容野鹿參、不脫麻衣拳作枕、幾生夢在綠蘿菴、年六十二思歸江南、依故人照禪師、照住龍安、遂徑去、予嘗作偈寄之曰、看徧三湘萬頃山、江南歸去臥龍安、只將一味無求法、留與叢林作樣看、又曰、閘中抛擲亦奇哉、句裏藏身活路開、生鐵心肝含笑面、不虛參見作家來。

杭州上天竺辨才法師元淨、悟法華三昧、有至行、宏天台教、號稱第一、東吳講者宗向之、時秀州有狂人、號回頭、左道以鼓流俗、宜言、當建窣堵波爲吳人福田、施者雲委、然憚入杭境、以辨才不可欺故也、不得已、既來、先以錢十萬詣上天竺飯僧、且遣使通問曰、今以修造錢若干、願供僧一堂、淨答其書曰、道風遠來、山川增勝、誨言先至、喜慰可量、承以營建淨檀、爲飯僧之用、竊聞、教有明文、不許乎用、聖者既遺明誨、不知白佛、當以何辭、佇聞報章、即令撰疏文也、狂人大驚慚、見其徒、然淨之門弟子、亦勸且禮之、以化俗、淨厲語曰、出家兒須具眼始得、彼誠聖者吾敢不恭、如其誕妄、知而同之、是失正念、吾聞、聖者具他心通、今夕當與爾曹虔請於明日就此山與十方諸佛同齋、即如法嚴敬跪讀疏文、焚之、明日率衆出迎、而所謂狂人者竟不至、學者皆服

汾陽無德禪師、見七十一員善知識、前後八請、皆不出世、燕居襄陽白馬寺、并汾道俗千餘人、詣其居、勸請說法、既至宗風大振、迹不越闃、自爲不出院、歌以見志、北地苦寒、因罷夜參、忽有梵僧乘雲而至、問所以不說之意、師以衆僧不可夜立爲詞、梵僧曰、時不可失、此衆雖不多、然中有六人、異日爲大宗師、道廕人天、可開大慈爲法施、不可惜也、言卒而沒、師明日上堂曰、胡僧金錫光、爲法到汾陽、六人成大器、勸請爲敷揚、時大愚芝、石霜圓、瑯琊覺、法華舉諸公、咸在會下。

永嘉禪師偈曰、若以知知寂、此非無緣知、如手執如意、非無如意手、若以自知、亦非無緣知、如手自捉拳、非是不拳手、亦不知知寂、亦不自知、不可爲無知、以性了然故、不同於木石、如手不執物、亦不自作拳、不可爲無手、以手安然故、不同於兎角、智覺禪師曰、斯爲禪宗之妙、故今用之而復小異、以彼但顯無緣眞智、以爲眞道、若奪之者但顯本心、不隨妄心、未有智慧照了心原、故須能所平等等不失、照爲無知之知、此知之於空寂無生、如來藏性方有、妙耳、智覺之意欲偈兼言明悟、永嘉止說悟后之病、二老之言皆是也、然天下之理、豈可以一言盡耶、永嘉之偈、不必奪、亦可也、

正宗記評三祖大師曰、尊者初雖不自道其姓族鄉邑、後之於世、復三十餘載、豈絕口而略不云乎、此可疑也、曰、予視房碑、曰、大師嘗謂道信云、有人借問勿道、於我處得法、此明尊者自絕

之甚也、至人以物迹爲大道之累、乃忘其心、今正法之宗猶欲遺之、況其姓族鄉國俗間之事、肯以爲意耶、予讀至此知明教所得多矣、王文公亦曰、古之有道者功業有不足以累其懷、況身後之名乎、如亮公之逃西山、常公之庵大梅、歸宗之眯其目、法正之不言名姓、是諸老皆能踐其所聞者也、固其化去數百年、凜凜尚有生氣、彼無意於此、世爭以此與之、蓋理之固然。

南禪師住歸宗時、遣化至虔上、化人還白曰、虔有信士劉君、臨行送至郊外、祝曰、爲我求老師偈一首、爲子孫世世福田、明年師以偈寄之曰、虔上僧歸廬岳寺、首言居士乞伽陀、援毫示汝箇中意、近日秋林落葉多、後四十年、雲庵復住歸宗、法席盛於前日、劉君之子持此偈來餅、僧叙其事、雲庵上堂有偈曰、先師昔住金輪日、有偈君家結淨緣、我住金輪還有偈、却應留與子孫傳。

涅槃經中、有聞讚佛爲大福德、怒曰、生經七日母便命終、豈謂大福德相、讚者曰、年志俱盛而不卒暴、打之不嗔、罵之不報、是故我言大福德相、怒者聞而心服、故慈爲無盡福德相、故沙門能世福田者、以慈修身故也。

永明和尚曰、此重玄門名言路絕、隨智所演以廣見聞、唯證方知非情所解、若親證時悉是現量之境、處處入法界、念念見遮那、若但隨文義所解、只是陰識依通、當逆順境時還成滯礙、遇差別問處皆是疑情、如鹽官安禪師問講華嚴大師云、華嚴經有幾種法界、對曰、略而言之有十種法界、廣而言之重重無盡、鹽官舉拂子云、是第幾重法界、大師俛首擬答之、鹽官訶曰、思而知慮而解、是鬼家活計、日下孤燈果然失照、出去、予聞華嚴宗曰、勝熱婆羅門火聚刀山、是般若無分別智、彼疏義者、如葉公畫龍、眞龍忽見、投筆怖走。

洞山圓禪師嗣雪竇、年甚少、開先遐道者舉之以應筠人之請、時南禪師住黃檗、因出邑相見於淨戒寺、南公默無所言、但焚香相向危坐而已、自申時至三鼓、圓公卽起曰、夜深、妨和尚偃息、趍出、明日各還山、南公偶問永首座、汝在廬山識今洞山老否、永曰、不識、止聞其名、久之進曰、和尚此回見之如何人、南公曰、奇人、永退問侍者、汝隨和尚見洞山、夜語及何事、侍者以實告、永笑曰、疑殺天下人。

誌公和尚十二時歌、大明佛祖要妙、然年代寖遠、昧者多改易其語以循其私、其大害意者、如曰、夜半子心住無生、卽生死心法何曾屬有無、用時便用沒文字、乃作生死何曾屬有無、言則工矣、然下句血脈不貫、旣曰生死不屬有無、又曰用時便用何哉。

予在湘山道林、有僧謂予曰、吾初看六祖風幡因緣久之、偶仰首就架取衣、方薦其旨、予戲曰、非舉目見風幡時節耶、僧首肯之、予曰、祖師夜聞二僧微詰、卽謂曰、非風幡動、仁者心動、縱其張目於暗中、二僧何以識之、僧大慍而去、無盡居士嘗爲予言、頃京師見慧林一僧談禪不肯、諸方、吾問、蜆子答祖師西來意、乃曰神前酒臺盤、意旨如何、其僧張目直視曰、神前酒臺盤、無盡戲之曰、廟中是夕有燈則已、不然蜆子佛法遂爲虛施。

靈源禪師謂予曰、吾嘗在龍舒、見龍門顯道人發課、莫有能逃其言者、意有必道、顯曰、但有所見、卽道微入思惟、卽不靈矣、予故人耶溪鄒正臣能言五行、其精妙世以一二數、亦嘗告予以此意、彼術之至者且爾、況有大於此者、而欲以思慮求乎。

鄧峯永庵主、嘗問僧審奇、汝久不見何所爲、奇曰、近見偉藏主、有箇安樂處、永曰、試擧似我、奇因叙其所得、永曰、汝是偉未、是、奇莫測歸語于偉、偉大笑曰、汝非永不非也、奇走質於積翠南禪師、南公亦大笑、永聞之作偶曰、明暗相參殺活機、大人境界普賢知、同條生不同條死、笑倒庵中老古錐、觀其語言、想見當時法喜游戲之逸韻、使永公施於今、則其取詬辱必矣、

臨濟大師臨終付法偶曰、沿流不止問如何、眞照無邊說似他、離相離名如不稟、吹毛用了急須磨、而傳者作急還磨、曹山和尚釋枯木龍吟偈曰、枯木龍吟方見道、髑髏無識眼方明、喜識盡時消息盡、當人那辨濁中清、而傳者作消不盡、二宗兩偈甚微、而一失其旨、則爲害甚大、故不可不辨、所言用了急須磨者、船子曰、直須藏身處沒蹤跡、沒蹤跡處莫藏身是也、喜識盡時消息盡、當人那辨濁中清者、達觀所謂偏正手縱橫、超然忌十成、龍門須要透、鳥道不堪行、石女霜中織、泥牛火裏耕、南頭如脫得、枯木一枝榮、是也、

無盡居士嘗問予曰、悟本大師作五位君臣偶、其正中來曰、但能莫觸當今諱也、勝知朝斷舌才、先德之意雖明妙挾、然知朝斷舌、必有本據而言、前古無斷舌事、矧又曰知朝、尤無謂也、將非後世傳錄之誤耶、予曰、舊本曰、也勝前朝斷舌才、意用隋賀若弼之父敦、爲宇文護所忌害之、臨刑戒之曰、吾以舌死、引若弼舌以錐刺之、出血使慎口、隋與唐之前、前朝刺舌非知朝明矣、然斷舌刺舌意則同耳、無盡屬予記之、

道圓禪師南雄州人、性純至少游方、雖飽參而未大通透、聞南禪師居黃檗積翠庵、往依之、一日燕坐下板、聞兩僧擧百丈野狐因緣、一僧曰、只如不昧因果也未、脫得野狐身、一僧應聲曰、便是不落因果、亦何曾墮野狐身耶、圓悚然異其語、不自覺其身之起、意行上庵頭、過澗忽大悟、見南公叙其事、未終涕交頤、南公令就侍者榻熟寐、忽起作偶曰、不落不昧、僧俗本無忌諱、丈夫氣宇如王、爭受囊藏被蓋、一條柳樑任縱橫、野狐跳入金毛隊、南公大笑、久之又作風幡偶曰、不是風、兮不是幡、白雲依舊覆青山、年來老大渾無力、偷得忙中些子閑、予昔聞雲庵大稱賞之、謂其機鋒不減英邵武、雲庵化去、偶檢故書、見其手疏此二偶、意若欲傳而未果者、於是錄之、或聞圓公住大庾雪峰寺、

皓月供奉問長沙岑禪師曰、永嘉云、了卽業障本來空、未了應須償夙債、只如師子尊者二祖大師爲什麼亦償夙債、長沙曰、大德不識本來空、曰、如何是本來空、長沙曰、業障是、又問曰、如何是業障、長沙曰、本來空是、乃有偶曰、假有元非有、假滅亦非無、涅槃償債義、一性更無殊、龍勝中觀論曰、業不從緣生、不從非緣生、是故則無有、能起於業者、無業無作者、何有業生果、若其無有果何有受業者、問曰、汝雖種種破業報及起業者、現見衆生作業受果報、是事云何、答曰、如世尊神通所作變化人、如是變化人、復作變化人、如初變化人、是名爲作者、變化人所作、是則名爲業、諸煩惱及業、皆如幻與夢、亦如炎與響、以龍勝之意、會長沙之言、達無作妙旨、游此世界、如夢中了了醉裏惺惺、

汾州無德禪師示徒、多談洞山五位臨濟三玄、至作廣智歌、明十五家宗風、豈非視後進惰於參尋得少爲足、警之以徧參耶、今有問知識者、則答曰、吾家自有本分事、彼皆古人一期建立門庭言語耳、何足究哉、正如有不識字者、執卷問屋愚子、屋愚曰、此墨塡紙耳、安用問我哉、三

尺童子莫不笑之昔有僧問雪峰和尚臨濟有四喝意旨如何雪峰曰我初發足便往河北不意中途大師化去因不及見之他家宗旨我所未知汝尋彼兒孫問之僧以問南院且言雪峰嘗遣之之意南院望雪峰再拜曰和尚眞善知識嗚呼今譊譊語人如屋愚子者聞雪峰用處可不面熱汗下耶

雲峰悅禪師見僧荷龐至則曰未也更三十年定乘馬行脚法雲秀禪師開包腰至者色動顏面彼存心於叢林豈淺淺哉今少年苾蒭見其畫像則指曰這不通方漢也死耶

首楞嚴經曰一切世間生死相續生從順習死從流變臨命終時未捨煖觸一生善惡俱時頓現古釋至此多略之滋以爲恨及讀寶積經有意釋此今系於其下曰善惡之業所自作時一生之中何不自見至捨壽時方始頓現者人生如夢方作夢時豈能自知是夢非夢要須覺時夢中之事了然自現不待尋繹亦復如是

福嚴感禪師面目嚴冷孤硬秀出叢林時謂之感鐵面首衆僧於江州承天時佛印元禪師將遷居新州斗方爇於郡守欲使嗣續之且召感語其事感曰某念不至此和尚終欲推出爲衆粥飯主人共成叢席不敢忘德然若使嗣法則某自有師矣佛印心服之業已言之因成就不復易遂開法爲黃龍之子道價重一時居常懸包倚杖於方丈不爲宿夕計郡將已下皆信敬之有太守忘其姓名新下車以事臨之感笑作偈投郡庭不揖而去偈曰院是大宋國裏院州是大宋國裏州州中有院不容住何妨一鉢五湖游太守使人追之已渡江去矣

餘杭政禪師住山標致最高時蔣侍郎堂守錢塘與師爲方外友師每來謁之則跨一黃牛以軍持掛角上市人爭觀之師自若也至郡庭始下牛笑語終日而去一日蔣公留師曰適有過客明日府中當有會吾師固不欲能爲我少留一日因欲清話師諾之蔣公喜甚明日使人要之留一偈而去矣曰昨日曾將今日期出門倚杖又思惟爲僧只合居巖谷國士筵中甚不宜坐客皆仰其高韻又作山中偈曰橋上山萬層橋下水千里唯有白鷺鷥見我常來此冬不擁爐以荻花作毬納足於中客至共之清論無窮秀氣逼人秋夏好翫月盤膝大盆中浮於池上自旋其盆吟笑達旦率以爲常九峰鑑詔禪師嘗客門下詔坦率垢汙不事事每竊笑之一夕將臥師使人呼詔不得已蹙頞而至師曰好月勞生擾擾能幾人暇與之對耶詔唯唯已而呼行者熟炙詔方飢意作藥石久之乃橘皮湯一盃

靈源禪師爲予曰有居士吳敦夫才敏銳意學道自己多見知識心地明淨偶閱鄧隱峰傳見其倒卓化去而衣亦順身不褪竊疑之曰彼化之異固莫測而衣亦隨之何也以問晦堂老人晦堂曰汝今衣順垂于地復疑之乎曰無所疑也晦堂笑曰此既無疑則彼倒化衣亦順體何疑之有哉敦夫言下了解故其一時應機之辯如雷如霆開警昏蟄者多矣

金剛經曰尋時慧命須菩提白佛言世尊頗有衆生於未來世聞說是法生信心不佛言須菩提彼非衆生非不衆生何以故須菩提衆生衆生者如來說非衆生是名衆生此義深渺從上聖賢語秘旨妙學者多聽瑩佛意卒不明獨定林老人解曰以慧命觀衆生如第五大如第六陰如第七情就爲衆生以衆生觀衆生然後妄見其爲有則衆生非慧命者之衆生是衆生之衆生而已衆生衆生者卽非衆生然是乃所謂衆生也則聞說是法苟能悟本性相何爲不生

信心、以慧命觀衆生、不見其爲有、則云何度衆生耶、曰、衆生有衆生、而衆生非有、慧命無衆生、而衆生非無、以是義故度衆生。

大智禪師曰、此事不是一切名目、何以不以實語答耶、曰、若爲雕琢得虛空爲佛相貌、若爲說道虛空是青黃赤白、如維摩云、法無有比無可喻、故法身無爲不墮諸數、故曰、聖體無名不可說、如實理空門難湊、喻如太末蟲處處能泊、唯不能泊火焰之上、衆生亦爾、處處能緣、不能緣於般若之上、每見學者多悞領其意、謂衆生於般若不能參求耳、非也、此法非情識所到、故

三祖大師曰、非思量處識情難測。

青龍道氣法師、於金剛般若經深達妙旨、嘗造疏疏此經、精博淵微窮法體相、諸師莫能望其藩垣、唐明皇亦留意經義、自注釋之、至是人先世罪業應墮惡道、以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅處、不能自決其義、以問氣、氣對曰、佛力法力、三賢十聖、亦不能測、陛下曩於般若、聞薰不一、更沈注想、自發現行、明皇於是下筆不休、其天縱神悟之辯、一期應答、掃滯惑於言下、揭般若於現前、豈意思義解之徒、可同日而語哉。

雲門大師有時顧視僧曰、鑒僧擬對之、則曰、咦、後學錄其語、爲偈曰、顧鑒頭、德山圓明禪師雲門之高弟也、刪去顧字、謂之抽顧頭、因作偈通之、又謂之擡箭商量、偈曰、相見不揚眉、君東我亦西、紅霞穿碧海、白日遶須彌、雲庵亦有偈曰、雲門抽顧自有來由、一點不到、休休休休、今禪者多漫汗之、問其意旨、則往往瞠目怒視曰、此是道眼因緣也不、亦悞哉、又其室中語曰、盡大地是法身、枉作箇佛法知見、如今見拄杖、但喚作拄杖、見屋但喚作屋、而校證者易之曰、枉作箇佛法中見、又曰、自小養一頭水牯牛、擬向溪東放、不免食他國王水草、擬向溪西放、不免食他國王水草、不如隨處納些子、他惣不妨、今本乃曰、他惣不見、如此之類甚衆、然此二字雖細事、其失先德妙旨、不爲不傷、當有知者耳。

英邵武臨終安坐、爲門弟子說出家行脚之因、竟、乃曰、吾卽化、骨石可藏、於普會塔、吾生平與大海衆居、死不忍與之離、非有他也、古之聖賢、莫不因叢林以折伏情見、成辦道果、今時衲子、德薄垢重、志願衰劣、多生厭退、是大可憫笑也、師既化、衆終不忍、不得已、投於水中、故泐潭今無復有英禪師塔。

舜老夫天資英特、飽叢林、初自棲賢移居雲居、授牒陞座、白衆曳杖而去、暮年以身律衆、尤謹嚴、嘗少不安、卽白維那、下涅槃堂、病愈卽入方丈、惜其傷慈、有所開示、但曰、本自無事從我何求、南禪師時已居積翠、聞之謂侍者曰、老夫耄矣、何不有事令無事、無事令有事、是謂淨佛國土成就衆生。

三祖大師作信心銘曰、至道無難唯嫌揀擇、但莫憎愛、洞然明白、毫釐有差、天地懸隔、故知古之得道者、莫不一切仍舊、有僧問永明和尚、衆生與佛既曰同體、何故苦樂有殊、答曰、諸佛悟達法性、皆了自心原、妄想不生、不失正念、我所心滅故、不受生死、卽究竟常寂滅、以寂滅故、乃樂自歸、一切衆生迷於眞性、不達本心、種種妄想、不得正念、故卽憎愛、以憎愛故、心器破壞、卽受生死、諸苦自現、欲知法要、守心第一、若一人不守眞心、得成佛無有是處。

悅禪師妙年奇逸、氣壓諸方、至雪竇時壯歲、與之辯論、雪竇常下之、每會茶、必令特榻於其中、

以尊異之，於是悅首座之聲價，照映東吳，及悅公出世，道大光耀，有闌上座者，自雪竇法窟來，悅公勸詰之，大驚且譽於衆，相從彌年而後去，前輩之推穀後進，其公如此，初未嘗以雲門臨濟二，其心，今則不然，始以名位惑，卒以宗黨膠，固如里巷無知之俗，欲求古聖之道復興，不亦難哉。

舜老夫初自洞山，如武昌行乞，先至一居士家，居士高行，爲郡所敬，意所與奪，莫不從之，故諸方乞士至，必首謁之，舜老夫方年少，不知其他參，頗易之，居士曰，老漢有一問，上人語相契則開疏，如不契，即請，却還新豐，問古鏡已磨時如何，對曰，照天照地，未磨時如何，曰，黑如漆，居士曰，却請還山，舜即馳歸，擧似聰禪師，聰爲代語，舜即趍問曰，古鏡未磨時如何，聰曰，此去漢陽不遠，磨後如何，曰，黃鶴樓前鸚鵡洲，舜於言下大悟，聰公機鋒不可觸，眞雲門之孫，嘗自植松，口誦金剛經不輟，今洞山北嶺號金剛嶺，松皆參天，乃師手植也，筠守許公式以詩贈曰，語言全不滯，高蹈祖師蹤，夜坐連雲石，春栽帶雨松，鑑分金殿燭，山答月樓鐘，有問西來意，虛堂對遠峰。

南禪師久依渤潭澄禪師，澄已稱其悟解，使分座說法，南書記之名，一時藉甚，及其至，慈明席下，開夜參，氣已奪矣，謀往咨詢，三至寢堂，三不進，因慨然曰，大丈夫有疑不斷，欲何爲乎，即入室，慈明呼左右，使進，楊且使坐，南公曰，某實有疑願投，誠求決，惟大慈悲，故不惜法施，慈明笑曰，公已領衆行脚，名傳諸方，有未透處，可以商略，爾何必復入室耶，南公再三懇求不已，慈明曰，雲門三頓棒因緣，且道洞山當時實有喫棒分無喫棒分，對曰，實有喫棒分，慈明曰，書記解識止，此老僧固可作汝師，即遣禮拜，南公平生所負，至此伏膺，予嘗聞靈源禪師，曰，昔晦堂老人親從積翠所聞，因同舊說，併錄於此。

福州善侍者，慈明高弟，當時龍象數道，吾眞楊岐會，然皆推服之，嘗至金鑾，眞點胸自負，親見慈明，天下莫有可意者，善與語知其未徹，笑之，一日山行，眞擧論鋒發，善取一瓦礫置石上，曰，若向者裏下得一轉語，許爾會見老師，眞左右視，擬對之，善喝曰，佇思停機識情未透，何曾夢見去，眞大愧悚，且圖還霜華，慈明見來曰，本色行脚人必知時節，有什麼忙事，解夏未久，早已至此，對曰，被善兄毒心終礙塞人，故復來見，和尙，慈明曰，如何是佛法大意，對曰，無雲生嶺上，有月落波心，慈明瞋目，喝曰，頭白齒豁，猶作此等見解，如何脫離生死，眞不敢仰視，淚交頤，久之進曰，不知如何是佛法大意，慈明曰，無雲生嶺上，有月落波心，眞大悟於言下，眞公爽氣逸出，機辯迅捷，叢林憚之，開法於翠嵓，嘗曰，天下佛法如一隻舡，大寧寬師兄坐頭，南褊頭在其中，可眞把梢，去東也由我，去西也由我，善公尋還七閩，佯狂垢汚，世莫有識之者，或問，晚住鳳林。

楊岐會禪師從慈明游最久，所至叢林師必作寺主，慈明化，去託迹九峰，忽宜春移檄命居楊岐，時長老勤公驚曰，會監寺何曾參禪，萬一受之，恐失州郡之望，私憂之，會受請即升座，機辯逸格，一衆爲傾，下座，勤前握其手，曰，且得箇同參，曰，如何是同參底事，勤曰，楊岐牽犂九峰拽把，曰，正當與麼時，楊岐在前耶，九峰在前耶，勤擬議，會喝曰，將謂同參，却不同參，自是道價重諸方，衲子過其門莫不伏膺，嘗因雪示衆曰，楊岐乍住屋壁疎，滿床盡布雪眞珠，縮却項，暗嗟

吁、翻憶古人樹下居、其活計風味類如此。

仰山和尚僧問、尋常和尚示人多作圓相、畫作字意旨如何、山曰、此亦閑事、汝若會不從外來、不會亦不失、吾今問汝、汝參禪學道、諸方老宿向汝身上指那箇是汝佛性、語底是耶、默底是耶、總是總不是耶、若認語底是、如盲摸着象耳鼻牙者、若認默底是耶、是無思無念、如摸象尾者、若取不語不默底是中道、如摸象背者、若道總是、如摸象四足者、若道總不是、拖本象落在空見、正當諸盲皆云、見象安知、止於象上名邈差別耶、若汝透得六句不要摸象、最爲第一、莫道如今鑒覺是、亦莫道不是、所以祖師曰、菩提本無是、亦無非、菩提更覓菩提處、終身累劫迷、又曰、本來無一物、何處有塵埃、其弟香嚴老亦曰、的的無兼帶、獨立何依賴、路逢達道人、莫將語默對、予嘗問僧、既不將語默對、何以對之、僧未及答、忽板鳴、予曰、謝子答話。

龍勝菩薩曰、若使先有生後有老死者、不老死、有生、生不有老死、若使有老死、而後有生者、是則爲無因、不生有老死、以此偈觀衆生生死之際、如環上尋始末、無有是處、吾以是知古之得此意、於去住之間、了不留礙者、特其不二於物耳。

維摩經曰、善來文殊師利、不來相而來、不見相而見、文殊師利言、如是、居士若來已更不來、若去已更不去、所以者何、來者無所從來、去者無所至、所可見者更不可見、起信論曰、若心有見、則有不見之相、心性離見、卽是徧照法界義、故乃知心外無法、徧照義成、苟有去來相見、則遺正義也、如人言風性本動、是大不然、風本不動、能動諸物、若先有動則失自體、不復更動、則知動者、乃所以明其未嘗動也、去來相見、亦復如是。

洞山聰禪師韶之曲江人、見文殊應天眞和尚、初游廬山、莫有知之者、時雲居法席最盛、師作燈頭、聞僧衆談泗州僧伽近於楊州出現、有設問者曰、既是泗州大聖、爲什麼向楊州出現、聰曰、君子愛財取之有道、一衆大笑、有僧至蓮華峰祥庵主所、擧似之、祥公大驚曰、雲門兒孫猶在、中夜望雲居拜之、聰之名遂重叢林、祥公奉先深禪師之嗣、知見甚高、氣壓諸方、嘗示衆曰、若是此事最是急切、須是明取始得、若是明得時中免被拘繫、便得隨處安閑、亦不要將心捺伏、須是自然合佗古轍、去始得、纔到學處分劑、便須路布箇道理、以爲佛法、幾時得心地休歇去、上座却請與麼相委、好臨終上堂、擧拄杖問衆曰、汝道、古佛到者裏爲什麼不肯住、衆莫有對者、乃自曰、爲佗途路不得力、復曰、作麼生得力去、橫拄杖肩上曰、柳標橫擔不顧人、却入千峰萬峰去、言訖而化、嗟乎、今之學者其識趣、與前輩何其相遠耶、如祥公聞聰燈頭一語、知其爲雲門兒孫、其後莫能逃其言、今雖對面終身論辯、莫辨邪正者有矣、其故何哉、以其臨死生之際、超然自得如此、則其平生所養高妙可知、惜乎莫有嗣之者、師與西峰雲豁禪師兄弟也。

百丈山第二代法正禪師、大智之高弟、其先嘗誦涅槃經、不言姓名、時呼爲涅槃和尚、住成法席、師功最多、使衆開田、方說大義者、乃師也、黃檗古靈諸大士、皆推尊之、唐文人武翊黃撰其碑甚詳、柳公權書妙絕古今、而傳燈所載百丈惟政禪師、又係於馬祖法嗣之列、悞矣、及觀正宗記、則有惟政法正、然百丈第代可數、明數但皆見其名、不能辨、而俱存也、今當以柳碑爲正。

古佛偈曰、如人掘路土、私人造爲像、愚人謂像生、智者言路土、後時官欲行、還將像塡路、像本無生滅、路亦非新故、又偈曰、諸色心現時、如金銀隱起、金處異名生、與金無前後故、文殊師利

言、此會諸善事、從本未曾爲一切法亦然、悉等於前際、所以正作時無作、以無作者故、當爲時不爲、以無自性故、任從萬法從橫、常等無生之際、乃知磁石決不吸鐵、無明不緣諸行、龐公臨終偈曰、空花落影、陽燄翻波、永明和尚嘆味其言曰、此爲不墮有無之見、妙得無生之旨也、學者可深觀之。

大智度論曰、復次有人、謂地爲堅牢、心無形質、皆是虛妄、以是故、佛說心力爲大、行般若波羅蜜故、散此大地、以爲微塵、以地有色香味觸重故、自無所作、水少香故、動作勝地、火少香味故、勢勝於水、風少色香味故、動作勝火、心無四事故、所爲力大、又以心多煩惱結使繫縛故、令心力少、有漏善心雖無煩惱、以心取諸法相故、其力亦少、二乘無漏心、雖不取相、以智慧有量、及出無漏道時、六情隨俗、分別取諸法相故、不盡心力、諸佛及大菩薩、智慧無量無邊、常處禪定、於世間涅槃無所分別、諸法實相、其實不異、但智有優劣、行般若波羅蜜者、究竟清淨無所罣礙、一念中能散十方一切、如恒河沙等三千大千國土大地諸山微塵、故知其心有此大力、衆生妄隔而不自覺知、我願聞此法者、隨順禪定而自修行、使稱覺盡本來清淨、此非興役功用之難、第約之心耳、今家山徧十方、衣食可終老、人生可憂者皆已免離、於此不以爲意、則非背負佛祖恩德乎。

景福順禪師西蜀人、有遠識、爲人勤渠、叢林後進皆母德之、得法於老黃龍、昔出蜀與圓通訥僧行、已而又與大覺璉游甚久、有贊其像者曰、與訥僧行、與璉僧處、得法於南、爲南長子、然緣薄所居皆遠方小刹、學者過其門、莫能識、師亦超然自樂、視世境如飛埃過目、壽八十餘坐脫於香城山、顏貌如生、平生與潘延之善、將終使人要延之敘別、延之至而師去矣、其示衆多爲偈、皆德言也、有偈曰、夏日人人把扇搖、冬來以炭滿爐燒、若能於此全知曉、塵劫無明當下消、又作趙州勘婆偈曰、趙州問路婆子、答云直與麼去、皆云勘破老婆、婆子無儞雪處、同道者相共舉、又作黃龍三關頌曰、長江雲散水滔々、忽爾狂風浪便高、不識漁家玄妙意、偏於浪裏飜風濤、又曰、南海波斯入大唐、有人別寶便商量、或時遇賤或時貴、日到西峰影漸長、又曰、黃龍老和尚有箇生緣語、山僧承嗣伊、今日爲君舉、爲君舉、猫兒偏解捉老鼠。

朱顯謨世英、昔官南昌、識雲庵、未幾移漕江東、以書來問佛法大旨、雲庵答之曰、辱書以佛法爲問、佛法至妙無二、但未至於妙、則手有長短、苟至於妙、則悟心之人、如實知自心、究竟本來成佛、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨、而日用唯用自心、自心變化、把得便用、莫問是非、擬心思量、已不是也、不擬心一一天眞、一一明妙、一一如蓮華不著水、所以迷自心故作衆生、悟自心故成佛、而衆生卽佛、佛卽衆生、由迷悟故有彼此也、如今學者、多不信自心、不悟自心、不得自心明妙受用、不得自心安樂解脫、心外妄有禪道、妄立奇特、妄生取捨、縱修行落外道二乘禪寂斷見境界、雲庵之言蓋救一時之弊、然其旨要、曉然可以發人之昧昧、故私識之。

大本禪師被詔住大相國寺慧林禪院、將引對、有司使習儀、累日、神宗皇帝御便殿見之、師既見但山呼、卽趍登殿賜坐、卽就榻禁足作跏趺、侍衛驚相顧、師自如也、賜茶至、舉盞長吸又蕩盞之、上問受業何寺、對曰、承天永安、蓋蘇州承天寺永安院耳、上大喜、語論甚久、既辭退目送之、謂左右曰、眞福僧也、侍者問、和尚見官家如何、對曰、喫茶相問耳、其天資粹美、吐辭簡徑、眞

超然可仰。

涿州尅符道者見臨濟機辯逸格以宗門有四料簡定佛祖旨要作偈發明之曰奪人不奪境緣自帶誦訛擬欲求玄旨思量反責麼驪珠光粲爛蟾桂影婆娑覩體無差手還應滯網羅奪境不奪人尋言何處眞問禪禪是妄究理理非親日照寒光淡山遙翠色新直饒玄會得也是眼中塵人境俱奪從來正令行不論佛與祖那說聖凡情擬犯吹毛劍還如値木盲進前求。妙會特地斬精靈人境俱不奪思量意不偏主賓言不異問答理俱全踏破澄潭月穿開碧落天不能明妙用淪溺在無緣洞山悟本禪師作五位君臣標準綱要又自作偈系於其下曰正中偏三更初夜月明前莫怪相逢不相識隱隱猶懷昔日嫌偏中正失曉老婆逢古鏡分明覩面更無他休更迷頭猶認影正中來無中有路出塵埃但能莫觸當今諱也勝前朝斷舌才偏中至兩刃交鋒不須避好手還同火裏蓮宛然自有衝天氣兼中到不落有無誰敢和人人盡欲出常流折合還歸炭裏坐臨濟洞上二宗相須發揮大法而是偈語世俗傳寫多更易之以徇其私失先德之意予竊惜之今錄古本於此正諸傳之悞。

報本元禪師孤硬風度甚高威儀端重危坐終日南禪師之門弟子能蹤迹其行藏者唯師而已師初開法法嗣書至南公視其名曰吾偶忘此僧謂專使曰書未欲開可令親來見老僧專使反命師即日包腰而來至豫章開南公化去因留嘆息適晦堂老人出城相會與語奇之恨老師不及見耳師道化東吳人歸之者如雲嘗自乞食舟載而還夜有盜舟人絕叫白及交錯於前師安坐自若徐曰所有盡以奉施人命不可害也盜既去達旦人來視舟意師死矣而貌和神凝如它日其臨生死禍福能脫然無累如此。

延慶洪準禪師桂林人從南禪師游有年天資純至未嘗忤物聞人之善如出諸己喜氣津津生眉宇間聞人之惡必合掌叩空若追悔者見者莫不笑之而其眞誠如此終始一如暮年不領院事寓迹於寒溪寺壽已逾八十矣平生日夕無佗營爲眠食之餘唯吟梵音贊觀世音而已臨終時門人弟子皆赴檀越飯唯一僕夫在師携磬坐土地祠前誦孔雀經一徧告別即安坐瞑目三日不傾鄉民來觀者堵立師忽開目見笑使坐于地有頃門弟子還師呼立其右握手如炊熟久寂然視之去矣神色不變頰紅如生道俗塑其像龕之予嘗過其席拜瞻嘆其平生多潛行密用不妄求知於世至於死生之際乃能超然如是眞大丈夫也八地菩薩證無生法忍觀一切法如虛空性猶是漸證無心至十地中尚有二愚入等覺已則一分無明未盡猶如微煙尚能懺悔準之梵讚其亦自治者歟。

南禪師居積翠時一夕燕坐光屬屋廬誠侍者勿言于外嵩明敎既化火浴之頂骨眼睛齒舌耳毫男根數珠皆不壞如世尊言比丘生身不壞發無垢智光者善根功德之力如來知見之力故行住坐臥須內外清淨彼二大老乃今耳目所接非異世也而獨爾殊勝者非平生踐履之明驗歟予嘗作二偈曰如來功德力內外悉清淨念起勿隨之自然心無病形與佛祖等道致人天護戒淨福人天心空同佛祖。

予嘗與數僧謁雪峰悅禪師塔拜起揖之曰生耶死耶久之自答曰不可推倒塔子去也旁僧曰今日時節正類道吾因緣因作偈示之曰不知即問不見即討圓滿現前何須更道維堅密